
エディ・バートンとアイリスのオートマタ

大空東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エディ・バートンとアイリスのオートマタ

【Nコード】

N7143K

【作者名】

大空東風

【あらすじ】

少年は空を走る――

東のはしつこの空に浮かぶ島にある街、ロックリバー。少年エディ・バートンは、ロックリバーに支店をおく、ベクターズカンパニーという運送会社の新人自転車配達員。彼は空を走る三輪自転車に乗って、毎日周辺の村に手紙を届けている。

これは彼が手紙を届け始めておよそ二ヶ月、風薫る晩春と緑濃い初夏の間の短い期間に世界の隅っこで起きた、通り過ぎる風のように儚く、朝焼けに染まる雲のような淡い色をした事件。

ある日、エディは得意先の占師、モーゼフからベクターズカンパニーのサービスの一つ『差出人戻し』の依頼を受ける。それは、抱えるほどの大きさの不振な箱だった・・・

大昔、マジになって書いた、初めての物語りです。オリジナルです。しょっぱい文章ですみません；

開幕

倉庫である。

その建物は、家と呼ぶには家としての機能がほとんど削がれていて、物置小屋と呼ぶにはあまりにも巨大な広さで頑丈な造りをしている。

だから、そこは一般的にいうところの倉庫である。

ばたばたと複数の足が倉庫内部の階段を上っていく。風が扉を叩くよりも激しい足音だった。足音は倉庫を壊してしまいそうなほど激しく、強かった。

そして奥の扉が乱暴に開けられた。部屋の壁際に積んであった書籍や箱が傾いて、鉄屑やら木片やらが固まったガラクタの山が雪崩を起こす。床は塵屑の海と化した。

部屋の中には一人の中年の男…… もじやもじやの髪の毛を後ろで束ね、濃い眉の下には垂れ目、無精髭が男のもののぐさを表している、そんな男が、低いテーブルを前に座っていた。突然の訪問に驚くことも、怯えることもせず、ただ挑戦的な笑みを浮かべていた。

薄汚れた窓から入る輝かしい夕日が、男を、テーブルを、ガラクタを、赤く染めていた。

「おう、てめえ。ふざけた真似してくれるじゃねえか。ボケたツラアしてやがるが、とうとう頭に隙間が出来たか？ てめえは生かされていているという事実を、忘れちまったんじゃないだろうな」

カーネル・ゴールは、羽虫さえも震え上がらせるような凄みをきかせた声で言うと、男の名を呼んだ。

「なあ、イアソン・ヴォード？」

カーネルは白髪白髭の初老の男。灰色のスーツに身を包み、葉巻をふかし、厳つい顔をした……頬は垂れ下がり、ブルドックのような顔だが犬の従順で可愛い愛嬌はなかった。暴れ犬のような凶暴な目で、ものぐさな男、イアソンを睨みつけている。

イアソンは答えず、カーネルの後ろに視線をやって、鼻を鳴らした。

カーネルの後ろにいたのは黒いスーツをスラリと着こなし、山高帽を被った長身の若い男だった。帽子の下で、細い眼鏡がキラリと光っている。カーネルとは違いこの男は水のように静かで隙がなく、全身に幕が張っているように内面を隠している。それがカーネルの像の足のような太く重い威厳と相まって、異様な雰囲気を作っていた。

三人の男たちはそれぞれ睨み合い、夕日が差し込む部屋の中は緊張感が蜘蛛の糸のように張り巡らされ、あまりの強力さに歪んでしまいそうだった。

山高帽の男は、すうっと、静かに、押さえつける迫力を含んだ声を出した。

「私に製造する技術と能力はなく、あるのは製造法を記した本……
国定図書館の書蔵庫の奥深くに眠っていた本でしたが、誰もが見て見ぬ振りをしてきたのは、それが禁物だったからです。世紀を一跨ぎするほどの長い時間、総ての人々が、本に触れることも、話題にすることも禁止してきたわけです。ですが、世相は日々変化し過去の鉄則が通用する事はありません。だから、我々は貴方に製造をお願いしたのです。総てを製造していただければ、私は莫大な恩賞を保証すると言いました。しかし、起動の『鍵』もあって、初めて契約は成立するのです」

男は無感情に言う、ずれた眼鏡を直す。

「どういっつもりですか？ 貴方には説明する責任があり、私には知る義務があります」

イアソンは口の端を釣り上げて笑った。馬鹿にしているのか。男の言動が可笑しくてたまらない、という笑い方だ。

男の顔に表情は表れない。

ただ、静かに。眉も動かさず。

しばらくの沈黙があり、険悪な雰囲気が漂う。

そして……不意に、

「……俺から一つだけ言える事は」イアソンが口を開けた。「簡単なことだ。契約契約と、馬鹿みてえに言うが、俺は全部請け負ったつもりはない。俺も職人の端くれ、存在は知っていたし作りたいとも思っていた。だから製造する、という部分においては、お前さん方と一致していた、それだけのことだったんだ。だいたい、半分は脅されたようなモンだ。それでも金はくれるって言うからな、乗ってやったのに」

言葉を区切ると、はあっ、とわざとらしく溜め息をつく。

「世相がどうあれ、どうしてもアレを選択したんだ？ お偉い人の頭の構造は、凡人の俺にはわからんよ」

カーネルは銜えていた葉巻を床に落として、一緒に怒りも捻り潰すように靴底でぐりぐりと火を消した。冷静な山高帽の男とは対照的に額には青筋が浮かんでいる。

「貴方が言う道理に価値はありません」男が言う。「世界は一般の人々が知らない所で動いています。その動きを知り、対処するのは我々であり、一般人はただ生活を営み、我々に従えばいいのです」

「へっ、そうかい」

イアソンはフン、と鼻を鳴らす。俺はご免だな、と悪態をついた。すると業を煮やしたカーネルが、懷から黒く光る無骨で無機質な鉄の塊……拳銃を取り出し、銃口をイアソンの頬に押し当てた。

「つべこべ言わずに、出すもん出しゃあいいんだ。てめえは意見する立場にねえと、言っているだろうが」

「ほらほら。そいつがいけないんだって。脅せば誰でも屈すると思うのは間違いだぞ。でかい力を見せつけて服従させても、そこに尊敬はなく、恐怖で縛っても誰もついてこない。あれは危険な代物だ。世界のバランスを崩すくらいだな。だからお前さんのような邪な考えのヤツに『鍵』を渡すのが嫌だって言っているのが、分かんのかね」

「貴方の言う『世界』が何を意味しているのかは知りませんが」

男がイアソンに近づく。

「私は邪心など微塵も抱いた事はありませんよ。私はより良い暮らしを一般市民に保障しなければなりません、そのためには少しの力も必要だと考えています。それは邪心などではありません。力を力で伏せることができるのも、事実なのです」

「ガキの喧嘩じゃないんだ、拳でなく対話で解決したらどうだい」「対話の時期はとうに過ぎています。だからこうして製造を考えたのですよ。……物は使うためにあるのです。貴方が製造した物も、次の技術者のための貴重な参考資料としてきちんと使わせていただきます。でないと、製造のために貴方に渡した金が無駄になりますからね。予算は限られていますから、無駄は出してはいけません」

男はカーネルの拳銃に手をかけ、納めさせると同時に。自分の懷

から拳銃を取り出した。

「貴方に理解されなくとも、時代の流れは止まりません」

カーネルの代わりに、銃口をイアソンの額に付けた。

それでもイアソンは……表情を変える事はなかった。

不敵な笑みを浮かべたまま、男と睨み合う。

その瞳は……何者にも従わないという意味。

男は拳銃の安全措置をゆつくり外す。

男の瞳には。信念を貫くという意思が宿っている。

「他人を陥れて破滅させる奴は悪人だ。と、これは俺の持論だが……
…お前さんはどうだい」

「さあ。貴方の持論に意味は無いですよ。こちらは『鍵』があればよいのです。無くともなんとかありますが、あるにこした事は無い。もう一度尋ねます。『鍵』はどこでしょう」

男は静かに問う。

どちらも、譲歩することはない。

互いにぶつかったままで。

イアソンは低い声で言った。

「さて。どこかな」

「……私が聞きたいのは、そういった答えではありません」

男は言うつと、

引き金に掛けた指を

一瞬の躊躇いもなく

イアソンを見据えて

どう

どつどつ

割れ金を叩くような激しい音が、空気を揺さぶる。

第1幕・1 エディとじいさん

東西に伸びるメインストリートの東の端にある、赤煉瓦造りの四角い建物。中は日が当たらず、ひんやりと空気は冷たい。湿った土とカビの匂いがしている。

建物の中に居た少年は、一台の自転車に手をかけて、それを引いて外に出た。

柔らかく爽やかな風が頬を撫でていった。先月まで花の甘い香りを漂わせていた風は、今は緑の葉の匂いを街中に運んでいる。日差しは強く、日を追うごとに夏に近づいているのがよくわかる。街の雰囲気明るくなり、人々の活気も増している。

少年はカゴの中に黒い皮の鞆を放り込み、防護ネットを掛ける。ヘルメットと目を保護するゴーグルを装着すると、自転車に跨がった。自転車の本体は頑丈に作られているために、かなりの重量がある。ペダルに全体重をかけるように漕ぐ。始めはふらふらして不安定だが、スピードに乗ればあとは重みが安定となり真っ直ぐ進む。

自転車はゆっくりと走り出す。

ゴリゴリと、石畳の振動がサドルを通して全身に伝わってくる。進行方向は、商店街の反対を向く先……駅である。駅前では屋台や行商人が簡素な店を出していて、人々がたむろしている。屋台の主人と談笑する若い女性、新聞を広げる中年男、酒を飲んで陽気に話す老人たち。座敷椅子のような脚の低い藤の椅子に座って、それぞれの緩やかな時間が流れている。

少年は駅舎のすぐ横にある門の前で、駅員に手帳を見せてから中に進んだ。そこは、一般人が立ち入りを禁じられている、車両専用の幅が広い直線の道。駅のホームとの段差はなく、誤って人々が入

らないよう柵がしてある。が、ホームには駅員以外の姿は無かった。駅舎を挟んで中はなんと静かなことだろう。しかしこれが普通である。

かあん、と駅員が鐘を鳴らした。

直線の道を、少年は総ての力を注いでペダルを踏み込み、スピードをどんどん上げていく。強い風が耳を叩き付けるように過ぎていく。路は緩やかな坂道になっていて、自転車はどんどん加速する。

その先に。

道は無い。

坂道に続くのは、絵の具をぶちまけたような真っ青な空と、綿飴のような白い雲の空。

頭の中で道をつくる。路の先の道。空の道。

ごうごうと風を切り、少年は空に飛び出て……自転車は勢いのまま宙を走った。遙か下の壮大な大地を眺めながら、空を走る。感覚は坂道を走るときに似ていて、風を受けながらも緩やかにブレーキをかけていく。自転車の走行が安定し、スピードも徐々に落ちてきたら、ペダルを動かす。スピードを維持して走り続けなければ地面に真っ逆さまだ。

空を走る自転車の運転は簡単そうदैて実は体力と運動神経、そして命綱もなく遙か上空を走る自信と度胸が必要なのである。その点に関して少年は合格ラインにあり、また合格する者が少ないので、彼が人に自慢できる唯一の特技だった。

額にうっすら汗をにじませて、今日のことを考えながら自転車を

漕ぐ。丘陵地の奥に、青い線が見えた。水平線だ。空との境目は曖昧だが、青の違いがうつすらと判る。

やや下を向けていた車体を平行にすると、自転車は真っ直ぐ前に進んだ。これもイメージだ。大地と同じような道があり、様々な方面に枝分かれしているのを想像する。

天気は晴、視界は良好。ゆっくりと雲が流れる快適で穏やかな日和だ。

鳶がひよろろと鳴きながら、自分より大地の近くを翔んでいる。

ロックリバーという名の街がある。

大陸の北にある、世界第二位の国土面積を誇る大国、フェブルマール連邦国の首都から東の東、さらに東の果てのド田舎の空の上に浮いている、巨大な饅頭型の土の塊の上に築かれた街が、それだ。

空にある島は総称して「浮島」と呼ばれているが、この浮島は世界に数多く点在しているのでそれほど珍しいものではない。だが、有人の浮島は世界に五つしかない。その中でもロックリバーは最大の浮島で、約五千人の人々が暮らしている。一つの町や村の人口が平均二百人という田舎の中ではそれなりに大きな街だ。

桜の蕾が一つ、二つと開き始めた四月の初め、十五歳になったばかりのエディ・バートンは、ロックリバーにあるベクターズカンパニーという運送屋支局の、自転車配達員になった。癖つけのある栗毛の髪に、褐色の瞳をしており、太めの眉は少年の愛らしさと青年の精悍さを兼ね備えている。微妙なお年頃独特の突慳貪な雰囲気が少ないのは、彼の天然で良質の愛想のお陰か、生来の人の良さか。配達先宅の評判は上々で「田舎の配達員さん」がすでに板に付きつつあった。

そんなエディは今、木々に囲まれた古い家屋の縁側で、へえ、と相槌を打っていた。

配達は……そっちのけで。

「ふむ、今月のエディの運勢は……」

「今月って。もう一週間ほどで終わりじゃないか」

エディは真向かいに座る、ヤギに似た顔をした爺さんに軽く言った。

村外れの木造一軒家に一人で住んでいる爺さんは、名をモーゼフ・ペイターという。この老人、少々風変わりなところがあり、服装は原色が目に痛い派手な柄のシャツに短パン、ラジオは流行の音楽が流れる民放の番組を好んで聴き、愛読書は人のプライバシーを刺激するゴシップ紙ときている。今も爺さんの横には、原色の派手な色使いで

『陸軍モロ軍曹、人妻との甘い一夜！ 浮気相手が語る 布団指令本部の真相！』

という題字が大きく踊った雑誌が置いてある。老いても精力漲るパワフルな爺さんだ。

そんな彼の本業は占師。しかし、爺さんの年不相応にも思える嗜好は（エディは若い考えの爺さんを好意的に思っている）周囲の人々には胡散臭く感じさせるのか、占ってもらおうという人は稀少だ。面白くて気のいい爺さんなのに、誰も爺さんを理解しようとしなかったことを、エディは残念に思っている。

「何が起こるか分からんのが、人生ってもんだ。残りが一週間だろうと一日だろうと、な。そのために、占いつちゅーもんがあるんだ」

そついう訳で、話し相手の少ない爺さんは、配達に来たエディをここぞとばかりに取っ捕まえて、最近の音楽はどの、軍であった

収賄事件がどうの、とラジオとゴシップ紙から得た情報をベラベラと喋った拳句、まだ帰すもんかと占いを始めた。

エディはというと……モーゼフ爺さんの心境を理解していたので、無下に断る事も出来ず、この家が最後の配達ということもあり、爺さんの話し相手になっっているのであった。

二人の間には、選んだ六枚のカードが並べてある。カードには様々な花の絵が描かれていて（花カードというのも爺さんには似合わない）、モーゼフは頷きながら意味を読む。

「ふうむ、こいつは面白いカードが出たわい」

「面白い、って」

エディは複雑な思いをする。運勢に面白いも何もないだろうに。

「三枚目の、未来を表す位置にサクラだ。パツと咲いてパツと散る、サクラの正は移り変わりの早さ、転換期。身辺に大きな変化があるかもしれない。気をつけた方がいいな、四枚目の心身に、アサガオの逆。花言葉は『健康』だが、逆だから病氣、怪我、事故、事件」……聞いてると、すごい不安になってくるんだけど」

「だはは、しかも最終のカードにクロユリが出とる。しかも正だ。タロットで言えば死神と同じ意味になる。だが暗示するのは不幸、死ではなく、危機や災難。永久の別れ。そんなところだ。だははは」

モーゼフが大笑いするので、エディは顔をしかめた。不愉快な笑いだった。

「そんなに気落ちせんでもいいぞ。最後の解決のカードは太陽のヒマワリ……逆だから夕日だな。終わり、幕引き。朝日は昇り夕日は沈むが、転じて明日への希望となる。結果を引きずらず次に備える。くよくよするな、ということだな」

まあ、占いとは絶対ではないからな。カードをまとめながらモーゼフが言う。これは、占いの後で必ず言う言葉だ。爺さん曰く、当たり外れも気の持ちよう。当たると思えば当たるし、当たらないと思えば当たらないのだ、と。

「でも爺さんの占いはよく当たるんだよ。前の占いのときも、良くない事が起きるって言っただろ、あの後自転車が壊れたんだ」

「そうかい、そりゃ災難だったな。だが言つとくが、そりゃお前さんが『当たった』と思ったからだ。自転車壊れるくらい屁でもねえ、つて思やあ『外れた』ことになるんだ」

「うっん、そうなのかな」

とエディは唸る。それは屁理屈じゃないのか？

「当たるか、外れるかは問題ではないんだ。重要なのは、運の動向を読んで、良い方になるよう助言することだ。だから占師は、予言者よりも予報士に近いかもな」

「ふっん、そうなのかな」

エディは再び唸った。モーゼフの言うことが、正しいのか、間違っているのか、どちらともはつきりと言い難かった。彼には、占いとは、という明確な説明をすることができないから、爺さんがそう言うのだから、そうなのだろう、と思うだけだった。胸の辺りに、灰色のモヤが発生していた。心から納得できない、不信の塊だ。

そのとき、居間の時計がブーンと時を告げたので、灰色の気分でエディは立ち上がった。

「一時間も経っちゃったじゃないか。俺、もう帰るよ」

声をかけると、モーゼフは……どこか寂しそうな表情で、おう、と返事をする。

爺さんが一瞬見せた表情に、エディは後ろ髪を引かれる思いだったが、いつまでも油を売っている訳にはいかない。話し込んでいて忘れていたが、今は勤務中である。

「それじゃ、爺さん。毎度ご利用ありがとうございます」

マニュアル通りの挨拶をして、その場を去ろうとする……と、ちよつと待ってくれ、とモーゼフに呼び止められた。

「あいや、エディ。すっかり忘れていたが、お前さんに持って行ってもらいたい荷物があるんだったよ」

「……なんだ、荷物受け取り便？ 手数料取られるよ」エディは足を止めて、縁側に近づいた。「そういうことは、先に言っただけだよ」

「いやいや、すまん。差出人戻しの荷物でな。三日前、孫が遊びに来ていて間違つて受け取ってしまったの。差出人は知らない名でな、時々変な音はするから開ける気にもならない。気味悪いから漬物石で重しをしておったのだが、丁度いい、持って行ってくれんか」
「うん？ 分かったよ」

差出人戻し……その名の通り、差出人に荷物を戻す事である。封を開けてなければ、ベクターズカンパニーのサービスの一つとして有無を言わず届けなければならない。

「どの荷物？」

「うむ、これだ」

縁側の隅から、モーゼフがずるずると引き摺ってきた荷物。

それは、木箱だった。小さな子供が入れるくらいの木箱だ。
一瞬、自転車のカゴに入らないんじゃないかという不安が、エデ
イの頭を過ったが、

「分かった、配達する」エディは受け取った。

「中身は『付属品で本体』？ 何だろう、何かの機械かな。差出人
は……イアソン・ヴォード？ ふうん、本当に知らないのか？ ボ
ケて忘れたんじゃないだろうな」

「失礼だの、まだモーロクしとらんわい。この通り、ぴっちぴちの
セブンティだ」

「七十代でぴっちぴちなら、十代の俺はどうなるんだ」

「ぶっちぶちだな。マメ粒みたいなヒヨッコちゃんだ」

「いやいや、意味解んないよ。もう何も荷物はないよな？ 葉書と
か、封筒とか」

「ああ、それともう一つ」

「何だ」

「うむ。なあに、些細な事だが……ガットに伝言を頼まれてくれな
いか。良くない方向へ進みそうだから注意しろとな、伝えてくれる」
「ふうん、分かったよ」

もう一度モーゼフに挨拶をして、木箱を抱える。意外と軽く、苦
労せずに運べそうだった。歩きたびに、中でごごと音がするのが
気に掛かる。

後ろで爺さんが、気をつけて、と言っていた。

第1幕・2 ベクターズカンパニーにて

東を向いて空を仰げば、ポツンと雲の塊が消える事なく浮いている。

真下で見れば、それがいかに巨大であることがよく分かる。雲は辺り一帯を影で覆ってしまい、大地は雲の隙間から僅かに漏れてくる日光だけを頼りに、低木や雑草が育っているが、森は無い。そんな地帯では当然作物も育ちにくいので人々の生活も成り立たず、結果そこは手付かずの自然のままだ。

大地に日光を遮る巨大な雲塊の上に、饅頭型の土塊が乗っている。ロックリバーは、そういう島にある街である。

饅頭型の斜面に黄土色や灰色のレンガの家屋が密集して、道は細い坂道と階段が入り組んでいる。田舎の昔から変わらない、素朴でくすんだ色合いの合間を行くのは、懐かしさを感じる風情がある。丘の上の小さな発電所では、街中の人々の生活を補うほどの十分な電気を生産することができないので、主な灯りといえばランプや口ウソクである。軒先にある灯籠や提灯、行灯が古さを際立たせている。所々にある藪や林は、浮島固有の珍しい植物で埋まっている。斜面の下は平に均され、東西に伸びる繁華街に築かれたアゼリア通りがある。幅の広い石畳の道の両脇には雑貨店、飲食店、市場、屋台があり、沢山の人々が行き交い賑わっている。横道に入れば小さな店がいくつもある。

アゼリア通りを西に行くと、赤い煉瓦作りの建物が二つある。

一つは駅舎。

ロックリバーに人が行き来するための通常の交通手段は、ブルートロツコという、青い線が入った車両がトレードマークのトロツコ

列車である。線路がいらぬ工夫がされていて、空と大地を結んでいる。ただ、線路が必要ないとはいへ離着陸時の滑走は必要なので、広い道が改札口を潜った先にある。

そして駅舎の隣にある建物。これがベクターズカンパニーの支局だ。

ここには空を走る自転車だけでなく、空陸両用の自動車もある。そのためある程度の道幅があり、且つ人々が無断で侵入しない道など、ロックリバーでは簡単に作ることはできない。そこで利用したのがブルートロッコだった。その道は大型配達専用の貨物車の発着にも、封書回収便の離着陸にも都合がよかった。エディが乗る自転車……ベクターズカンパニーの特製空色三輪自転車が発着するときにもとても都合がいい。

そんなわけで、ロックリバー支局は空の駅に隣接して建っている。支社の名には「空の駅支局」という、分かり易い名がついている。

「ま、またかね！　またやっちゃったのかね！　こ、こ、この……このヘナチヨコー！」

その言葉こそヘナチヨコだと、エディは思った。子供じゃあるまいし。

目の前にいるのは、エディが所属するベクターズカンパニー空の駅支局配送部一課の課長、マイク・マーリー、五十五歳。見事な卵型の体型をしている、格子ハゲの小太りおじさんだ。眉は無く彫りの深い大きな目、刻まれた幾つもの皺に、高い驚鼻の下には八の字の髭がある。苦悶と憤怒を混ぜたような複雑な表情は、紛れもない

般若だ。しかも言葉遣いと顔が一致していない部分が彼の一番恐ろしいところで、子供っぽい言い方は、般若の顔と釣り合いが取れておらず不気味だった。

「先々週にも修理に出したのに！ どうしてすぐ壊すかなあつ？
ねえ、何で？ 何で？」

ぶう、と頬を膨らませてマイクは怒りを露にした。頬を膨らますことにマイク自身は何とも思っていないらしいが、般若の形相がいっそう強調されて恐ろしく、エディは目を背けたくなる。

「でも、課長、」顔を引き攣らせてエディは答えようとするが、
「でも、じゃないよお！」

くわつと目を見開いた般若がさらに顔を近づけてくる。
あまりにも恐ろしいので、ちよつと泣きたい気分になった。

今より時間は遡り、およそ二十分前のこと。

エディはロックリバーの離着陸専用道路で着地に失敗した。

しかも、自転車は半壊。その壊れた自転車は今、空の駅支局の車庫に置いてある。

自転車の運転は難しいが、エディは持ち前の運動神経で今までやってこれた……だが、万事無傷ではない。入社したての頃は練習中にしょっちゅう転んでいたし、空色自転車に乗れるようになってからも、離着陸に失敗することは度々あった。

ただ、自転車が半壊するほどの大失敗というのは、これで三度目だった。

一度目は乗りたての四月半ば、慣れていなかったときに石につまづいた。

二度目は五月になったばかりに、運転に慣れはじめて気が抜けた時期に。

滑空する自転車は、三輪であろうと強度は低いし、天候によっては、いつも無事に離着陸するとも限らない。三日に一度の点検は義務化されているが、それでも壊れるときは壊れるのだ。

今回は、自転車の支柱がどこかに、歪みができていたのかもしれない。正確な原因は判らなかった。離着陸専用道路にタイヤが着いた瞬間、三輪自転車は激しい音をたてて着地した勢いのまま暴走し、百メートルほど走った末、右の前輪が外れ車体が凹み、後輪がパンクしてやつと止まった。

エディは自転車から投げ飛ばされ……やつと起き上がって見てみれば、自転車は哀れな姿になっていた。モーゼフの言葉を思い出しながら、やっぱり当たったじゃないか、と駅員が心配そうにかける声も聞かずに、頬の傷を触りながら溜め息を吐いた。

「オメーはドジだなあ」

と言ったのは、入り口近くのデスクの上で寝そべっていた、猫。猫が、二人を見ながら声をかけた。

「だがよ、てえした傷じゃなくて、よかつたじゃあねえか」

「そうだよ、お客様の荷物をお客様の破損させたらウチの責任なんだぞ」

「まあエディも小さな傷だったんでえ、大事に至らなくてなによりだ」

猫は渋い声でエディを労う。

彼は新人教育の補佐をしている猫で、名はガット。見た目はただの茶トラデブ猫である。皮下脂肪のたっぷりついた体は、デスクの上では重力に従ってだらしく広がっている。頬はふっくらとお多福だが、鼻筋はすつきり、目はすらりと横に長い。その首には、短い藍色のネクタイ。愛嬌のある姿だが、放たれるオーラは威厳がある。

彼は長い間、ベクターズカンパニー空の駅支社にて新人教育補佐という、どうでもいいような役職に就いている。

厳しさと優しさで、これまでに幾人もの新人を配達のプロフェッショナルに仕立て上げてきた、教育の鬼、いや猫だ。最近は何日か性格の角を削ったらしく、昔より随分丸くなったらしい。ついでに体格も大分丸くなったとか。今年の新社員のエディも、勿論ガットの世話になっていた。

ようやく教え子が手を離れた今の時期、彼は課長デスクの隣、黒ずんで落書きがあちこちにある木造デスクの上に、焦茶色をした煎餅座布団を敷いてゴロゴロしている。

「あんまり怒ってやるなよ、マイク。まだ入って二ヶ月なんでえ、これまでの奴らに比べりゃマシなほうさ」

長い尻尾を揺らしながら、マイクをなだめた。するとマイクは頬を膨らませたまま、ようやくエディから離れる。エディはほっと心の中で息をついた。

「もう、猫將軍はエディに甘いんだからッ」

ぷりぷりと怒りながら、マイクは椅子に座った。エディは彼の動きを目で追う。ぎしぎしと音をたてる椅子が、小さな悲鳴のようで、見えていて可哀想だった。

「修理費はねえ、ウチの課の予備費で賄われているんだよ。分かってる？　ただでさえ、今年に入って経費削減って言われて、予算が減っているっていうのに」

マイクはエディから離れたが、怒りが収まったわけではなさそうだった。座つても、まだぶちぶち言っている。小言だ。耳が痛い。自転車事故は不可抗力だ、不慮の事故だ、と言ってもマイクには言い訳にしか聞こえないだろう。こうなれば謝る以外、早期解放の手段は無い。

「……はい、すみませんでした」

「まったく、まあーっ。しっかりとやってよねーっ」　ぷりぷり

「はい。……すみません」

「まあう。修理出したら領収書切ってもらってねっ」　ぷりぷり

「……はい」

一応、反省の素振りだけはみせてマイクに背を向ける。それからマイクに見えないよう、思いつきり憎らしい表情をした。

と、隣に般若の顔が！

「うわっ」エディは飛び退いた拍子に、足下のゴミ箱を蹴っ飛ばした。

「……荷物の手続きも早くね？」

マイクはエディに対して全く可愛くないアカンベエをして、配送部一課から出て行く。その背中からは、怒りのオーラが燃え盛る炎

のように放出されていて、彼と周囲の景色を歪ませていた。

マイクの姿がなくなると、エディはホツと息を吐いた。

理不尽な怒りを真正面から受け、反論も出来ず、般若から解放されると同時に疲れがどつと押し寄せてきて、頭がぼうつとした。急にすべてが面倒に感じた。

マイクに不満を持つことすら億劫だった。

惚けたように一課の中を見渡す。

課長デスクを含め八席のデスクしかない小さな部署は、静かだった。

他の部署が忙しく動いている音と、カラスの声が、微かに聞こえてくる。

今日は午後から散々だ。なんで怒られなきゃいけないんだ、少しくらい労ってくれてもいいのに。うんざりしつつ、散らかったゴミを片付けた。

と、ガットが重そうな体を動かし、側に寄ってきた。

「タイミングの悪いときに帰ってきたなあ、オメーも。さっきなあ、ちよつとしたごたごたがあつたんでい、それであの態度よ」

「なんだ、それじゃ八つ当たりされたのか。普通にしているても怒つたような顔をしているのにさ、怒ると昼間でも心臓に悪いよ。モーゼフ爺さんにトラブルがあるって言われたけど、これだったのかな」
「なんでい、オメーまたあの爺さんに占ってもらったのかい」
「うん、成り行きだったんだけどさ」

断れなくて。無理矢理に。その顛末を話すと、

「そうかそうか。だがなあ、占いなんて気持ち次第なんだぜい。オメーが今のトラブルだと思ったら、占いは当たったことになるしよ、こんなモンじゃあねえなと思ってりゃあ、当たってねえんだ」

「モーゼフ爺さんも、同じことを言っていたよ」

「そうかい。ま、あんまり深刻に受け止めるこたあねえんだ。孤独な老人の話し相手になんのもな、配達員の仕事の内でえ。ああ、それじゃあオマーが持つてきたあの荷物は、モーゼフのトコのか」

ガットはふん、と鼻を鳴らしてそれに視線を向けた。彼が指したのは木箱である。

エディがモーゼフから預かった、謎の木箱。今はエディのデスクの上に置いてあった。

「中身は何でい」ガットが尋ねる。「重いのか？」

「以外と軽かったからさ、持ち運ぶのは簡単だったよ。中身は『付属品で本体』としか書いてない」

壊れ易いものかな、だったらヤバイなあ、さっき大コケしたとき、壊れたかもしれない。エディは不安になる。

「妙な書き方だなあ。『付属品で本体』たあな」

「国語が苦手な人なのかも」

そうではないな、と自分で分かっていたが、理由らしい理由も見当たらなかった。

「モーゼフ爺さんは、差出人が知らない人だと言っていたんだ。爺さんはずっとあそこに住んでいるんだろ？ 差出人が宛名と住所を間違っことはあるだろうけど」

宛先の住人が引っ越してしまって、まったくの別人が住んでいた……差出人がそうとは知らず、元の住人の名で送ってしまう間違いがあるのだ。そういう事例はよくあるし、エディも何度か遭遇して

いた。その場合、荷物は『差出人戻し』扱いになる。

だが今回は、その事例に当てはまらない。爺さんは生まれても育ちもあの家で、別の場所から移ってきたわけでない。元も今も、なくずつとモーゼフ・ペイターズが住人である。

だから。モーゼフと面識の無い差出人が、宛名をモーゼフにし、住所を彼の住まいにしたのは意図してのことだ。わざと、モーゼフの家に届けた。

「……なんでかな」ガットを見やる。

「俺が知るかい」ぴしゃりと言った。

エディは肩を落として、深い溜め息をついた。

「爺さんの占いのこともあるし、いろいろあつて気になるなあ」

気にするな、と言われても気になるし、気を逸らせようとすればするほど、風船のように大きく膨らんで気を揉むのは、自分が神経質なのだろうか。

「そついえば爺さんからの伝言だけど、『よくないから注意しろ』ってさ。何を占ってもらったんだ？ ガットは占いを信じないと思つてた」

何にでも精通し、博識な彼でも占いに頼るのか、とエディは意外に思つていた。肥満体だから、今後の健康運でも見てもらったのかもしれない。年も年だし、健康に気を遣うのは当然だろう……そう考えたが、実際は違ったようだ。

「奴とは十年來の仲だ、奴の運勢を見る力はゴシップ誌より信用できらあ。……モーゼフの野郎にはよう、近頃西の国境での戦闘が盛

んだからな、今後の動向を見てもらっただけでいい。そうかい、よくねえと言っていたか……」

エディの考えも及ばないことだったので、驚きも納得もなかった。西の国境などロツクリバーから見れば真逆の、一番遠い場所だ。対岸の火事も煙すら届かない程離れていて西の街など国外に等しい。地方紙には二週遅れで情報が入ってきて、取り扱いも小さい程だ。

そんな場所のことを知る必要があるのだろうか。と疑問にすると、

「全然関係が無えように見えても、どつかで繋がってるモンなんですね。動きがあれば、直接間接問わず、何かしらの影響が出るモンだ。国の大事なら尚更だ」

「考え過ぎじゃないのか？」

実際、エディにはガットの言った事は突飛だった。国のどこかで戦闘があるのはなんとなく知っていたが、それも遠い国の出来事のように思っていて、自国で起きている事という実感は無かった。ふうん、なんか大変そうだな。そんな程度である。危険の場所が離れれば離れるほど、危機感の水でばかしたようにぼんやりとしていた。それが、影響が出る？　こんな何も無い田舎にどんな影響があるというのか。

彼の考える事は入道雲のように大きく、エディには計り知れなかった。

「まあ、オメーは荷物を配達するだけだ、気に病まなくても大丈夫でえ」

ガットは気にするな、と笑ったが、エディは本日何度目かの溜め息をついた。

こんなに溜め息をしてたら、俺の幸せなんてとっくに無くなって

いるなあ。そんなことを思う。知らない事が多すぎて、頭の中は霞がかかったかのように、はっきりとしなかった。それがまたもどかしく少しだけイライラして、深い息と共に吐き出した。

これは溜め息じゃないぞ、と自分に言い訳がましく心の中で呟く。

伝票を整理したら明日の配達のために自転車を修理に出しに行く、と気分を改めた。

気づけば太陽の光が強くなっている。夏はまだまだ遠い五月の終わりだが、日差しは確実に夏に近づいている。ちよつと前まで夜だった時間なのに陽はまだ沈まず、オレンジ色の眩しい光を放っていた。

第1幕・3 地上の街、サンミラノにて

後始末はウチの若いモンにやらせましょう。

カーネル・ゴールはそう言った。昨晚のことである。
そしてそれを、ある二人に任せた。

皮ジャケットが似合う、モデルのように整った面立ちのスーヴェン・ゴール、21歳。

黒縁眼鏡が年齢より幼く見せているハマート・ケリー、19歳。

二人はギャンブルで栄える東一番のきらびやかな街、サンミラノの西側の街外れにある倉庫の中に立っていた。倉庫を所有するのは、サンミラノで活動する中堅組織『極黎会』。

ボスの名はカーネル・ゴール。

言うまでもなく、スーヴェンの実父だ。

サンミラノは軍の部隊所もある大きな街だ。西や北へ向かうブルートロッコや特急列車も運行しているので、周囲の村や小さな町だけでなく、遠くの街からも人々が一攫千金を夢見てやって来る。

ロックリバーの古い街並とは対照的に色彩豊かな建物が多く、強烈な光を放っている。

しかし倉庫がある場所は喧噪や騒擾とは無縁の、藪と墓地に囲まれた陰湿で陰気で、街の裏路地とは違った、独特の陰の世界がある。そこは発展から取り残されたように静かだった。

「それで、ボクたちは何をしに、ここに来たでしたっけ？」

ハマートが恍けた質問をしてるので、スーヴェンは深々と溜め息をついた。

「後始末だよ。さつき自動車の中で言っただろう」

「ああ、そういえば言っていましたね。ああ、このことでしたか。後始末、ということは、ボスはまたここでリンチでもしたんですかねえ？」

「そうだろうね。あのオヤジは力加減を知らないから、また酷く荒らしたに違いないよ。自分の後始末くらい自分でして欲しいね。ガキじゃないんだから」

「断ればよかったんじゃないですか？」

「そう思ったけど、どうせもうすぐ出て行くんだ。最後くらいは聞いてあげようかな、と」

あっけらかんとした表情で、スーヴェンは言った。

父親とは長い間、面と向かったの会話がなかった。スーヴェンは父を敬遠していた。カーネルの野蛮で、卑劣な行動が、気に入らなかったのである。拳銃で脅したり、無駄な暴力を振るったりするのは、自分の性には合わない。

だから堅気になって、すべてから決別しようと考えていた。その矢先の出来事だった。

「優しいですねー。ボクはスーヴェンのそういうお人好しな所が好きです」

「魔が差しただけだよ。ちょうど母親の墓参りに行った帰りだったんだ、いろいろ考えていたから、いつもとは気分も違っていたんだよ。そこへオヤジが折り入って話があるって、真剣な顔で……あのゴツい顔でいう真剣っていうのは人を睨みつけることだけと……と

にかく、言ってきたから何だろうと思ってね。聞いたんだ。そうしたら、後始末をしてこいつてね、それだけだ。人に物を頼む態度じゃないよ」

「ボスですからね」

スーヴェンは今更ながら、面倒臭い事になったと後悔していた。魔が差したとはいえ、ハマートの言う通り、本当にお人好しだったと思う。

倉庫の中は薄暗い。

半分は吹き抜けで、半分は二階になっている。元は一階に爽やかな風と墓地の風景を届ける大きな窓だった部分は、板が張り付けられ、さらに煤けたカーテンが掛けられている。吹き抜けの高い位置にある窓だけが、外の光が入る部分だった。

倉庫の床には鉄屑やら釘やらコードやらガラスやら、ガラクタが散らばっていた。その中心には、そういったガラクタが結集したような鉄の塊があった。高さが二メートル近い巨大な塊で、何の形を模しているのか全くの意味不明な形態だ。子供でもこんな酷い物は作らないだろう。オブジェにしては悪趣味なものだった。

隅にある錆びた階段を上げれば、二階唯一の部屋の扉がある。

部屋の中には、テーブルと、倒れた椅子と、中年男の死体。

惨劇を見たスーヴェンは驚きよりも舌打ちが先に出て、ハマートは彼の後ろで、うわー、と小さく声を漏らしていた。

「見事な死体だね」スーヴェンは顔をしかめて中に入った。それから死体を見ても平然としていられる自分は歪んでいるな、と感じた。それとも現実が歪んでいるのか。サンミラノの街外れでは、死体は

珍しくないものだ。

死体の見開かれた目は光を失い、天井を睨んでいる。血が乾いたのか、頭部を中心に黒い染みが床に広がっている。壁にも点々と黒い飛沫が残っている。額には、小さな穴が三つ空いていた。

スーヴェンは死体を跨いで、顎に手を当てて部屋をゆつくりと見回った。争った形跡はなかったが、雑然とした部屋だった。雪崩を起こした本たち。床に転がる木箱。何かをメモした用紙の束。

「死因は発砲による脳内損傷ですかね。被害者の周辺を洗いまして、犯人の特定を……」

死体をじろじろ眺めながらハマートが言っている。

「おいおい、探偵小説じゃないんだから。犯人探しなんてしないでいいんだ。どうせ殺ったのはオヤジだよ」

スーヴェンはさらりと受け流し、側の本を手にとった。臙脂色の表紙に印刷された文字は擦れ、何の本なのか判らなかった。カビ臭く、歴史の重みを感じさせる古い本だった。表紙をめくると一枚の薄い紙があった。

それはベクターズカンパニーの配達伝票だった。

差出人の名はイアソン・ヴォード、宛先はモーゼフ・ペイターズ。

「それにしても、ボスがやったにしてみれば綺麗な死体ですね」

ハマートは死体の顔を見る。虚ろな瞳と目が合って、あわてて逸らした。

「この部屋も……荒らされてないね。おかしいな、オヤジは一体ここで、この男に何をしていたんだろう」本を閉じて、部屋の中をもう一度見た。

「と、言いますと？」ハマーが尋ねる。

「リンチをしてないってことさ。君も言った通り衣服は乱れていないし、殴られた跡も無い。これは銃で撃ち殺している。リンチ目的でここに連れ込んだわけじゃないのかな」

「リンチ以外の目的があったってことですかね？」

「そうだね……ギャングの目的としては監禁が一般的かな」

死体は冴えない中年男である。この場合は、とスーヴェンは考えた。

「暗号解読者、とか、研究者、とか。そんな感じがするね」

「なるほど。そういえば昔、歴史学者の父親がギャングに誘拐され たっていう映画を観た事あります。学者の誘拐、監禁って結構ありますよね」

「探偵が旅館に行ったら必ず死人が出る確率と、同じくらいかもね」

そう言っ て、スーヴェンは心の内で静かに笑った。

そもそも、ありきたりな理由……誰かを従わせるとか、身代金目的とか、脅すとか。それ以外の目的でギャングが誘拐や監禁するのはゼロではないにしろ、ほとんど無いわけだから、自分やハマー トがそう考えても何の不思議もない。推理をするような謎はなかった。

あるのは、男の死体。それだけだ。

スーヴェンは肩を竦めてハマーを見た。

「とりあえず、片付けてさっさと帰ろうか。こんなことで、煩わされたくないね」

「そうですね」返事をしながら、ハマートはイアソンの顔を覗き込んだ。男は虚しく天井を見つめている。

「あれ？」

「どうした、ハマート」

「あれっ」もう一度、今度は驚きの声だ。

スーヴェンは不審に思い、ハマートが見た……男の死に顔を再び見た。

すると。目玉が、ハマートを。

ハマートは一瞬、自分の目を疑った。

スーヴェンは一瞬、見間違いかと思った。

死体が動いた？
そんなことは。

あつたのだ。

突然、虚ろな瞳が光を宿して、体が動いた。
腕が伸びて、ハマートの首を鷲掴みにする。

「——つつつつ！」

ぎゃああああああ……

空気を裂いた絶叫は長く続かなかった。額に黒い穴を空けた死体を目の前に、ハマーの意識はぶつんと音がしてショートした。白目を剥いて、口から泡を噴く。

男の死体は、バネの外れた人形のようにカクカクと首を回し、スーヴェンを見ている。真後ろにいた、スーヴェンを。

顎がだらりと開いて、死体は笑う。

ははは。

ははは。

見下すように、首を後ろに傾け、目玉だけはスーヴェンを向いている。

「ははは。気絶しないだけ、度胸が据わってるな」

口の端を上げてにやりと笑った。頭の中が混乱し、どうしようもなくただ突っ立って唾然としていたスーヴェンだったが、それがスITCHだったかのように、ハッと我に返った。

「な……何だ、アンタは」

頭の中をぐりぐりかき混ぜて底の方から、やっと見つけ出してきた言葉だった。久し振りに声を出したみたいに、乾いて擦れた声だった。

「俺か？ 俺は見ての通り」ハマーの首から手を離すと、腕を力無く垂れ下げて立ち上がり、体だけをぐるりと回す。首が正しい位置に戻った。

「イアソン・ヴォードだ」

「……イアソン？」

「そうだ。ははは。イイ男の驚いた顔っていうのは、傑作だな。面白い面白い」

死体は……最早死体と表現すべきなのか判らない生白い顔の男は、心底愉快だ、というふうに体を仰け反らせて笑った。開いた口から、ぼろぼろと歯が零れ落ちる。

ははは。

イアソンは歯を受け止めようとしめない。笑みを浮かべたまま……額の穴から、黒い液が、噴水のように勢いよく飛び出た。

スーヴェンを見据えたまま、ゆらりと動いた死体は片足を引き摺り、その軌跡に黒い筋を引いて前に進む。右の目玉がぼとりと落ちて、スーヴェンの靴に当たった。

右目が欠けた穴の中から、黒い粘液が溢れ出して、顔を垂れる。

スーヴェンは、あまりの不気味さに頭痛を感じた。これは現実なのか？ ついさっきまで自分を構築していた世界が、足下から崩れていくようだった。目の前で起きている事に現実感は無く……感覚が遠のいている。すべてが自分のことではないように。まるで映像の世界に入り込んだように。

ごああ。

イアソンは何かを言おうとして口を開けたが、出てきたのは右目の穴から垂れる液と同じ、真っ黒な、光も反射しない闇のような色の、粘液。血ではないことは明らかだった。それでもなお口を動かしている。唇の端で、黒い泡ができていく。

「……な……何だ」

スーヴェンも口を動かした。先ほどと同じ質問を繰り返していることには気付いていない。目の前のものが何であるか確認しなければ、自分を作り出している世界が、崩壊してしまいそうだった。実際、足がふらふらしてきて力が抜けていく。

「ほ、ん」イアソンは左腕を持ち上げ、スーヴェンに触れようとした。

とたんに、ぎい、という鈍い音がして、左腕は床に落ちた。

「ほん？」スーヴェンは聞き返すが、左目も半分飛び出た、イアソンの異様な顔面を直視することができなかった。

「その、本を……」

人としての顔の成り立ちが歪んでしまったイアソンは、耳まで裂けた口の端を持ち上げて笑って言った。みしみしと音がして、口がさらに裂ける。

「本……この本？」

「すべては、その、本に」

イアソンの顔が一段下に落ちる。見れば、引き摺っていた足が外れていた。

「ちつ……作るなら、もっと、がんじょうにつくりやガ」

ゼンマイの切れたオルゴールのように声は途切れ途切れになっていき、やがて停止した。音も、空気も、何もかも。

静寂。

しかしそれは一瞬だった。

音もなく首に横一文字に亀裂が入り、頭部がころりと落ちた。

それは盛りを終えて萎んだ花が、地面に落ちる様子に似ていたが……落ちたのは人間の首だ。儂さや、憂いさなどの情緒は皆無で、

ただただ不気味だった。

頭が無くなると、制御を失った胴も、後を追うように崩れ落ちた。床ではイアソンの残骸が墨より黒い粘液にまみれて、原始生物のようにゆっくりと広がっている。

目の前から虚構が消え去った。安心感からか、スーヴェンはその場に座り込んでしまいそうになる。が、なんとか堪えた。

床には虚構ではなかった証拠があったからだ。

足を上げると、爪先に付着した黒い粘液が糸を引く。蜂蜜のような柔らかさだが、イアソンの体液だと思うと吐き気がする。こんな所に座るのはご免だ。

とにかく落ち着こうと、息を整えた。目を瞑って、静かに考える。最初から順を追って、この不可解な出来事を整理した。でなければ何も解らず、何も始まらないと思ったのだ。

後始末を頼まれた部屋に、男の死体。

綺麗すぎる死体。

動き、喋る死体。

スーヴェンが持った本を指した死体。

本。本と、死体。

すべては、本に。

「……………」

イアソンの言葉を頭の中で反芻すると、スーヴェンは目を開けた。一番に視界に入ってきたのは現実だった。真っ黒い粘液は、そこに存在していた。

部屋に入った時点で本物の死体だと思っていたから、奇異な出来事に咄嗟の判断ができなかった。だが、事が通り過ぎた今は違っていた。冷静になっていた。これは死体ではない、では何かと問えば……人のパーツを持った物。ゾンビか人形。

本を開く。

この本に何かがある、ということを感じた。

黄ばんだ紙を捲りながら、スーヴェンは複雑な気分だった。

本当は、面倒事に首を突っ込むことはしたくなかった。渦の中に飛び込む行為は、後戻りが出来ないくらいの大事に巻き込まれる危険を伴う。

だからカーネルから言われた通りに、イアソンの残骸も黒い体液も全部片付けて、何も見なかった振りをすればよかった。それが利口というものだろう。しかし残念ながら彼には、己の好奇心を犠牲にして、物事を穩便に済ませる、という選択肢は無かった。未知の出来事を目の当たりにし、スーヴェンは未知に挑む好奇心を抑えられずにいた。

……後悔するなよ。

どこからか、声が聞こえた気がした。だがここには気絶したハマ

ート以外、誰もいない。己の内からの忠告だった。後悔なんかしないさ、と言葉に出さず言い返しながら、本をじつくりと読む。古い字で書かれていて、読むのが難しかった。

と……本を読むスーヴェンの視界の端に、不自然な光がちらりと入ってきた。

黒い粘液に埋もれ、断片しか見せないそれは。

近づいて屈んでよく見れば、小指ほどの大きさの小さな『F』型の鍵だった。指先でつまんで拾い上げる。ねつとりと、黒が糸を引く……鍵には、金属の札が付いていた。そこに小さく、擦れた字が彫ってあった。

『ブルーフォレスト9番地』

第2幕・1 その晩、闇の中に潜むもの

静かに沈んだ夜。

奥の無い暗がり。

扉の中の深い影。

丑三つ時の気配。

「……ウージー君。腰が引けてるよ」

「うあああ、はいいつ」

指摘され、ウージーことウィンジールは背筋を勢いよく伸ばした。明りが激しく揺れて、影が左右に伸び縮みする。

彼は今、ベクターズカンパニー空の駅支店において夜の見回り中である。

横に並んで歩いているのは、本日の相棒の、後輩のトリティ・バートン。

共に守衛の制服で、腰には柄の長いハンマー、手にランプを持っている。

ほとんどの生き物が寝静まった夜は、別世界である。特に今日は月の無い夜……廊下の窓から見える星空は賑やかだが、建物の中まではその話し声も聴こえてこない。暗闇に染められ、色彩と音を失った場所では自分が異物のようだった。

ああ、怖い怖い！

ウィンジールは拳動不審者のように、忙しく首を動かしていた。

「しゃきつとしなよ、しゃきつと！」

膝に力が入っていないところに、激しく腰を叩かれて倒れそうになる。

「本当にビビリだね、ウージー君は。守衛になって長いんでしょう？」

「は、はい、もう四年になるっス」

「それまで遅番は何度もあったでしょ。どうして慣れないの」

「ど、どうして、と言われましても。ボクはお化けが嫌いで……奴ら、どこから出てくるか分からないし……透けてるし……夜は好きじゃないっス」

潤んだ情けない声で、ウィンジールはぶつぶつと呻くように言った。

トリティは後輩だが二歳上である。軍に所属していた経歴があり、物事に動じない態度や堂々とした姿は凛々しく、周囲からはウィンジールの先輩と見られがちだ。

実際トリティの行動力や社交性は優れているので、立場が逆転してもウィンジールは気にしていなかった。彼女のほうが自分より男らしく（トリティには失礼だが）、頼りになるのは事実だ。

「夜が苦手によく守衛になれたね。それじゃ敵兵やゲリラと遭遇したとき戦えないよ」

「いや、ここ戦場じゃないっスから。敵なんていないし、これからも出てこないっス。トリティさんは軍隊が体に染み付いてるっスね

……」

トリティの勇ましい発言に、ウィンジールは呆れた。

「私が現役だったのは五年も前の話。それに軍といっても実際に前線にいたのは二年くらいだったし、あとの三年は衛生兵だったんだから」

「ボクはまず軍に入りたいとも思わないっす。喧嘩はボクには向いてないっす」

「そうだね。ウージー君のネズミの心臓じゃ、きっと耐えられないね」

「ネズミはあんまりっす。せめてハムスターにして下さいっす」

「どっちもそんなに大差ないよ」

ハムスターもネズミじゃない、とトリティはにべもなく言う。

そりゃそうですが。

ウィンジールは返す言葉が見つからず、前を見た……その先は輪郭の無い暗闇で、背筋に氷を当てられたような冷気を感じ、身震いをする。

音の無い建物の中に、足音が再び響く。会話中は気も紛れ何も意識しなくて済むのに、少しでも言葉が無いともういけない。目の前の暗闇に、後ろに、窓の外に……何もいないのに、何かが居そうな気がしてウィンジールは体も気も縮めて恐る恐る歩いた。

カッリ カッリ

コッリ コッリ

ゴッ

「むっ？」

「どうしたの、ウージー君」

「い、いやあ、たぶん気のせい……」

ガン

「！ 今音がしなかった？」

「気のせいじゃないみたいっス……」

二人はランプを高く掲げて辺りを見渡すが、小さな明りでは廊下の端まで照らす事はできない。廊下は濃い闇に包まれていて、静かな空気がやたら不気味だった。

「ゴキブリじゃないスか」

「それにしても音が大きい気がする」

「とてつもなく巨大なゴキブリとか」

「……やめてよ、想像したじゃない」

ゴソ

「！」

「！」

二人に緊張が走り、周囲の空気が糸を張ったようにピンと張った。急に空気が狭くなったような気がして、ウィンジールの鼓動が早くなる。

「いるね」

「巨大なゴキブリが」

「じゃなくて。侵入者だよ」

トリティがランプを頭上近くまで持ち上げ、音のした方……扉を照らす。「この部屋だね」

上から照らされる彼女の顔には、うつすらと笑みが浮かんでいるようにウィンジールには見えた。軍人の血が騒いでいるのだろうか。

「火を消して」自分の持つランプの火を消しながら、トリティは小声で言った。

「え。」なんて、とウィンジールは彼女の言葉に一瞬臆する。真っ暗になるじゃないですか。

「ほら、早く。乱闘になったとき危ないでしょ」

トリティはすでに戦闘態勢に入っていた。ランプを床に置き、腰のハンマーを手にとって姿勢を低くしている。

その姿は図鑑で見た大きな猫科の猛獣が狩りをする様に似ていた。こうなったら誰も彼女を止められない。彼女はたった今、捕食者になった。

「消しましたっス」

自分の力では止められないことを知っているウィンジールは、素直に従った。

「よし、じゃあ私が先に部屋に入るから。ウージー君は入り口で見張っていて。幸いここの部屋は入り口が一つで、窓は廊下側だけ。通気口は天井にあるから、そう簡単には逃げられない。敵が混乱に陥ればきつとここを通るから、そのときは……わかってるよね」

トリティの鋭い瞳が、ウィンジールを捕らえる。

「う。は、はいっス」自信無さげに返事をした。

この闇夜の中に、何処の誰ともわからない、謎の人間が潜んでいる。それは、どことなく……彼の嫌いな闇の存在に似ていた。彼は

一瞬、考えた。そして想像した。そうしたら駄目だった。想像を頭から消そうとしても離れず、無理矢理考えまいとしたら意識してしまふ。ウィンジールは再び恐怖した。

「なに震えているの、ウージー君。行くよ」

「……はい」

「構えはいい？」

「は、はい」

「誰か居るのっ！」

トリティの大声が、部屋の中に響き渡る。が、しばらく待っても反応は無い。暗闇は暗闇のまま、静寂だった。

しん、としている。

しかしトリティは感じていた。何かが潜む気配を。体中で空気を感じ、その中にある些細な変化を逃さなかった。この部屋に何かいる。

巨大ゴキブリ以外の何かが。

足音を極力たてずに部屋の中に入る。ゆっくりと移動しながら注意深く探っていく。

目は暗がり慣れて、影の塊となったデスクや椅子の、おおまかな配置は分かった。足下は星の明りのような些細な光は届かず、依然として暗闇に包まれているが、トリティには闇の中の戦闘術も備わっていた。息を整えながら進む。

トリティの視界の端で、何かが移動した気配があった。慌てて振り返るが、すでにそこには何もなく闇があるばかりだ。息をゆっくり吐きながら自分を落ち着かせる。ハンマーを持つ手に力を込め、不審者が移動したと思われる先を、目指す。

スサツ

と、黒い影が視界の端を移動するのをはつきりと見た。トリティは条件反射ともいえる素早さでハンマーを投げ、それは激しい音をたてて床を貫いた。

「むっ、外したかな？」

構えるが、彼女の手にはすでに武器は無い。ハンマーは数メートル先にあり、拾いに行くには少し距離があった。黒い影は部屋の中を移動している。

「そこかつ」彼女は考える間もなく、手近にあった椅子を投げ飛ばす。

「そこかつ」デスクをぴよい、と飛び越えて影を追う。

「そこかつ」足下のゴミ箱を影に向かって思い切り蹴飛ばした。

黒い影はトリティから飛んでくる、あらゆる物をかわし、彼女の容赦ない攻撃にも怯むことなく、俊敏な動きで部屋の中を逃げ回った。そして……

「ウージー君！ そっちへ行った！」

部屋の中は危険と判断したのか、逃げ場が無いと悟ったのか。影は部屋の前方、扉へ一目散に目指した。だが、扉の前にはウィンジールが。

震えて小さく縮こまっていた。

「おい！ ウージー君っ！」そっちへ行ったよっ！

トリティの大声にウィンジールはハツとして顔をあげた……とき
にはもう、目の前に、真っ黒いものが迫ってきていた。体が石のよ
うに硬直して、咄嗟の判断ができず、ウィンジールは、ただ黒い影
が迫るのを呆然と見ていた。

「——うああああ！」 ドンッ

影は一瞬の迷いもなくウィンジールに正面からぶつかり、彼を思
いきり踏みつけて廊下に飛び出した。

「何をやっているんだ、ウージー君！ 敵が逃げた！ 追うよっ！」

トリティは影を追い、入り口で腰を抜かしていたウィンジールの
襟首をつかんで強引に彼を引っ張る。待って下さいトリティさん、
と叫んでも彼女には聞こえてない様子だった。

真っ暗な建物の中を、上へ下へと駆け巡る深夜の鬼ごっこが始ま
る。

夜はまだまだ長い。

第2幕・2 夢から覚めて

落ちている。

雲や鳥があつという間に通り過ぎていく。

配達の途中で、急に自転車の車輪が停止した。

自転車が空を走るのは、魔法使いが帚に乗って空を飛ぶのとはまるで違う。表現通り『走る』のだ。

ペダルを漕いで。

チェーンが回って。

車輪が動く。

地面を走ると同じ様に、空を走る。

では走らなければどうなるか？ 大地なら停止する。三輪自転車なので倒れる事はなく、そのまま、ぼうつとしているだけだ。

しかし空は。

足下が無い。

何も無い。

車輪が止まれば地面に向かって落下する。

耳が痛い。

落ちていく。

車輪が回って走るのならば、車輪を回せばいいだけだ。

頭の中に道を描いて、沿うように自転車を走らせる。イメージする。

足にぐつと力を入れた。

だが、車輪は回らなかった。

なぜか。

ペダルが無かったからだ。ペダルだけじゃない。ハンドルもカゴも車輪も。

……自転車が無かった。宙に放り出されていた。空に足向け、地面に吸い寄せられていく。

頭上には大きな岩が敷き詰められていた。どれもこれも角があり、岩の隙間に頭蓋骨が転がっている。空から落ちた先人たちだろうか。ああ、じぶんも落ちたら骨になるのか。体はこうちよくしてしまつて動かずあしもとははそら、ずじょうにはするどくがったいわのせんたんが

「うわあつ」

叫ぶと同時に、夢は幻と消え、エディは現実に戻ってきた。汗をかいていた。

とても不吉で、嫌な夢だった。落ちる夢。本当に嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

頭を振って、悪い夢を振り払う。それから隣の部屋に姉がいなくてよかった、と現実を感じてほつとした。

エディの身内は十歳離れた姉が一人。両親祖父母、叔父叔母もおらず、姉一人弟一人の生活が五年続いている。

ベクターズカンパニー空の駅支社の社宅アパート「スカイハイツ」には姉が支店に就職した二年前から住んでいる。このアパート、築五十年と半世紀を生き抜いた逞しい建物なのだが、壁が薄い。

寝言であっても隣の部屋に丸聞こえなのだ。寝惚けて叫び声をあげるなど、恥ずかしくて姉と顔を合わせられない。

本当にいなくてよかった、と安堵の溜め息を吐きながら、のろのろとベッドから出る。

今日は修理に出した自転車を取りに行かねばならないので、いつもの時間より早く家を出ないといけない。

さらに封書の配達他に、昨日のあの木箱もある。謎の箱。中身が何であるかは自分の知るところではないが、とても気になる。箱に思いを馳せながら、今何時かとふと壁の時計に目をやった。

「……？」

そのとき、エディは時計が壊れているのかと思った。次に、自分はまだ夢の中なのかと疑った。だが時計が示すそれは、有り得ないと思いたかったが、間違いなく現実だった。

「……遅刻だあああつつつ！」

現実を受け入れたエディは、ボロアパートを揺らすような勢いで支度をし、部屋を飛び出した。

出勤前に自転車を取りに行くのは諦めた。

遅刻だけは厳禁だ。

時間に関して潔癖なほど敏感なマイクは、遅刻を嫌っている。だから口が裂けても「寝坊しました」なんて言えない。言えば、どれほどの時間を拘束されるのか。その間、ずつつと粘っこいお小言攻撃をされるのである。

その光景を少し想像してみた。

恐ろしくてエディは身震いした。

空の駅支社まで数メートル、というところで鐘が空に響いた。空の駅支社の朝の始まりの鐘だ。五回目が鳴り終わるまでにデスクルームへ入らなければならない。

エディは走る。自転車配達で鍛えた足と体力を使って。ひたすら走る。

空の駅支社の大きな扉を開ければ最初にお荷物受付窓口と、お客様相談窓口「あおの窓口」がある。その後ろに客から見えないよう壁があり、その向こう側が社員の領域だ。エディは受付窓口横の「関係者以外立ち入り禁止」の札が付いている扉を通過した。

鐘は容赦なく時間を数える。

最後の鐘が鳴り終わる直前。

エディは一課の扉を開けた。

直後に最後の鐘がごとんと鳴って、社内全体を震わせる。間に合った！

本当に、ぎりぎりだった。鐘は鳴り終わる前にデスクルームに入ったのだから、遅刻じゃないはず。お小言は避けられた！ とエディは勝手に嬉しくなる。が、それもすぐに、空気の抜けたゴム風船のように萎んでしまった。

「……？」

直前で到着したはいいが、エディは目の前の光景がよく理解できなかった。いつもとは違う一課の風景。慌ただしい雰囲気。一体何があったのか。

メンバーは揃っている。

マイク課長、ガット、それから配達員の面々。

彼らはエディが着いたことに気づいていないようだった。はて、これは自分が異常なのか、夢の続きなのかと首を傾げるが、そんな事は無いと思い直す。

異常なのは一課だった。

一課のデスクルームは、まるで嵐の後のように荒れ果て、書類やら何やらが散乱し、一課のメンバーはそれらを懸命に片付けていた。

「な、なな、なんだこれ……」

落ち着いてきたエディは自分のデスクに着こうと、散乱物をよけて進んで行く。

デスクルームは本当に酷いありさまだった。床一面に書類。文房具。壊れた椅子。凹んだスチール製の棚。散らかったゴミ屑。課長デスクの側でマイクとガットが真剣な顔で話している。よくよく見れば、そこにはもう一人、見覚えのある姿が。

女性にしては百七十センチというスラリとした長身で、エディと同じ栗色の髪はショートカット、飾り気のない守衛制服という出で立ちは、後ろ姿は男性のようだが間違いなく姉のトリティであった。

「何してんだよ、姉ちゃん」

「あんたこそ何やってんの」

振り向いた彼女の目の下には隈が濃く浮いており、灰色の瞳は充血している。誰が見てもわかるような疲労の色が濃く顔に出ている。

ので、エディの心臓がドキリとなった。彼女の身になにか良くない事でもあったのだろうか、心配になる。

「何って、ここはデスクルーム……」

「そうじゃなくて、今まで何をしてたのかって聞いているの。遅刻するなんて、また寝坊したの？ 私がいなくても一人で起きられるようになりなよ」

なにも職場でそんなことを言わなくてもいいじゃないか、とエディは反論したくなったが、姉はどうも機嫌がよくないようだ。目つきがいつになく鋭い。

「本当に悔しい。この私が敵を取り逃がすなんて！」

握りこぶしに力を込めて憤怒している。エディが思うような心配事はなかったようだ。

それにしても、

「敵？ 敵って？」

「敵というより、不審者だな」答えたのはガツトだった。「そんなことより、トリティ、オメーは一日寝てねえんじゃないのかい。支社長には俺から言っとくからよ。そのまんまじゃいけねえな」

「でも、まだ捜査は終わっていないから」

「ウージー君なんかギックリ腰になって、宿直室で寝ているんですよ。交代の守衛さんが来ているんだから、もう戻ったらどうなのさ」

と言うのはマイク。エディは彼がトリティを苦手としていることを、密かに知っていた。マイクが小心者なだけか、二人の間に何かあったのか（道の外れた間違いでないことは確実だ）理由は知らない。マイクは氣遣う素振りをしているが、目には怯えの色がある。

「私から逃げるなんて、いい度胸しているよ。絶対にホシを見つけ
てやるんだから」

トリティが拳を振り上げると、ガットとマイクがそれを軽く避けた。

「ホシってなあ、犯人は中にやいねえだろう？　あとは警衛隊に任せな」

「そうだよ。それに君にも他に仕事があるだろうから、早く行きな
って」

「警衛隊なんて一番近くてサンミラノの基地でしょ、いつ来るかわ
からないじゃない。自衛団だって役に立ちやしない。彼らに任して
たら解決なんかないよ」

トリティはぶつぶつ不満を漏らして渋っていたが、最終的にはガ
ットとマイクの説得もあって、

「じゃあ、エディ。しっかりね」と言っただスクルームを去って行
った。

「本当に姉弟揃って破壊が好きだよな」トリティが去るとマイクは
ボソッと呟いて、疲れきった表情でデスクルームを出て行った。

「……何があっただらう」

結局、何がなんだかかわからずじまいだった。呆然としていると、
一番近くで書類をかき集めていた、一課メンバーのメリーアンヌが
教えてくれた。

「それがねえ、トリティの話だと、昨晚不審者が出たらしいのよね
え」

メリーアン又は頬に手を当て、くねっと腰を動かす。

彼女は一課の配達書類をまとめる事務係で、肩まである褐色の巻き髪が美しく、高級メロンのような芳醇な胸と括れた腰、形のいいお尻が艶かしい大人のお姉さんだ。

仕草のひとつひとつが色っぽく、咳き込むほどの強い花の香りに魅せられる男性社員は多い。

「ドロボーですか？ 殺人事件が起きたわけじゃないですよね」

エディはメリーアン又到に尋ねた。男勝りの姉に翻弄されているせいか、エディは社内でも数少ない、魅せられないタイプだった。

「そんな物騒な事は起きちゃいないわよう。それに今のところ盗まれた物は無いようよ」

「何も盗られてないんですか？」

「そうねえ、経理課や集配係が詳しく調べてる最中だから、あなたも盗られた物がなか調べといてね。トリティはこの部屋で不審者を発見したと言っていたから」

「ここ部屋から？ それじゃ、もしかしてこの嵐の後みたいなのは……」

ぐるりと部屋を見渡した。よく見れば床に穴があいている。

「うん、これはね」

「姉ちゃんが暴れたんですね」

「……そうなの」

はあ、と二人揃って溜め息を吐いた。

敵に対する攻撃に集中するあまり、周りが見えなくなってしまう

のはトリティの悪い癖だった。

夏のある日、アパートの部屋に出た一匹のゴキブリを退治しようとして、部屋の中を滅茶苦茶にした。また空の駅支店でもハンマーを振り回し、窓ガラスなどを破壊したこともあった。

おかげでエディは、アパートや空の駅支店でしばしばバツの悪い思いをする。

今もデスクルームの整理をしている、一課のメンバーの視線が微妙に冷たい。

「俺、自転車取りにいいのかな」ほとぼりが冷めるまで、隠れていたかった。

「それは急ぐものかしら？」

「ええ、まあ」エディは歯切れの悪い返事を返す。

自転車が無いと配達ができないのは事実だが、今はそれどころではない状況だ。自分のデスクを片付けるほうが優先なのは理解している。

「この状態だと午前の配達ができるか分からないから、今すぐでもなくても大丈夫だと思うわ。対応が決まるまでしばらくかかりそうなもの」

「ですよね」

予想通りの答えがメリーアンヌから返ってきたので、エディは自分のデスクを片付けようと思い、デスクに向かった。そのとき、般若の顔を歪ませたマイクが不満を背負って戻ってきた。

「はい、みんなー。ちょっと聞いてー」

パンパンと手を鳴らして皆の注意を引く。何の発表か、皆が興味

津々にマイクに瞳を向けた。それには少しだけ期待の色があった。配達を休める、という期待が……

「今日の配達は……」マイクが言うと、重々しい沈黙が流れる。誰もが注目した。

「今日の配達は……ありまーす！」

それまでデスクルームに立ち籠めていた緊張感と、少しばかりの期待感は、一瞬にして消え失せた。声には出さなかったが、皆がこの状況で配達をするのを嫌がったのだ。エディだって嫌だった。今日は事件の捜査のために、配達は休みだと思ったのだから。

「なんだよう、ボクだって嫌なんだからね」と言うマイクの顔も不満いっぱいだ。

「こんなんで配達するってえのかい」煎餅座布団の上からガツトが尋ねた。

「そうだよ、こんなんで配達するんだ。集配係の調べでは今日の午前の分の配達物は盗まれていなかったんだって。だから午前の配達是可以るんだよ。支社長がしろって言うてんだからやらないと。ほらほら、ブーたれていないでさっさと行って来な！」

不審者が出たというのに配達をしなければならないなんて。一課の誰も納得していなかった。エディも、マイクも、他の配達員たちも。

それでも仕事は仕事。

上に逆らえないのが、従事する者の悲しさだ。

不満があっても配達員たちは、それぞれのデスクの周囲を片付けると配達に出て行った。エディも同じように簡単に自分のデスクを

整理していると、

「ここは私に任せて。あなたも行っくらっしやい」

メリーアヌが優しく声をかけてくれた。

自転車を取りに行けるからいいか。エディは思い直し、行ってきます、と返事をしてデスクルームを出た。

第2幕・3 ネコと美人と、箱の中身

配達員が出て行くと、一課に残されたのはマイク課長と事務員メリーアンヌ、それにガットだけだった。メリーアンヌが引き続き書類をまとめていると、ガットが側に寄ってきたので声を潜めて話しかける。

「大変ねえ、課長さんも」

「中間管理職つてえのは上からも下からも挟まれて辛い立場だからな。オメー今夜でも酒に付き合ってやらねえか」

「そんなことをしたら奥様に誤解されてしまうわ。アナタも一緒でない」と

「ははは。勿論、俺も行くさ」

そう言うと、ガットは軽い身のこなしでデスクの上に飛び乗った。いつ見ても肥満猫の身の軽さには驚かされる。脂肪など無いように動くのだ。

「どうしたの？」

メリーアンヌは立ち上がり、ガットの行く先を見た。彼はエディのデスクの上に置いてある木箱に興味があるようだ。そういえばあれは何かしらね、と今頃になってメリーアンヌは気になった。今まで荒れ果てたデスクルームの片付けで手一杯だったので、箱のことなど少しも気に留めていなかった。近づいて、ガットの横から自分も箱を覗き込む。

「これは何かしら？ 誰かからのプレゼント？ 灼けちゃうわねえ」
「かっかっか。アイツにも惚れた腫れたの浮いた話でもありゃあい」

いんだがな、こりゃ差出人戻しの荷物でえ」

「あら、エディ君は配達以外にも仕事があるのねえ。何か気になることでもあるの？」

「この差出人の名だが……」

ガットは伝票の記名部分を指す。「ヴォードてえのをどっかで聞いた気がしてなあ」

「ああああああああっ！」

ガットの横で、いつの間にかいたマイクが頬をおさえて叫び声をあげた。移動する気配を感じなかったので、メリーアンヌは心臓が飛び出そうなほど驚いた。

「か、課長さん！ 急に出てこないで下さいっ」

「あああつ！ 箱が開いてるううう！」

「え？」

メリーアンヌとガットは声を揃えた。箱が開いている？

「本当だわ」よく見ると箱の蓋が二センチほどずれていて、中の暗闇をのぞかせていた。

「あれほど壊すなと言ったのに！」

マイクは頭を抱えて唸る。これから身に降り掛かるものを考えて恐怖しているのだろう。

ガットはそんなマイクを放ったらかしにして、箱の蓋をそろりと開けていた。

「あつ、いいの？ 開けちゃって」

と言いつつ、箱の中身に興味を引かれていたメリーアン又は強く止めずに、一緒になって中をのぞいた。何があるのだろう、分別あるガットが開けるくらいなのだから、すごいものが入っているに違いない、と心を躍らせる。

そろり、と開けた、箱の蓋。

その中であつたものは……

「はいよ、頼まれとつた自転車、ハーレースペシャルやぞっ」
「ありがとう……って何だ、この後ろに付いている機械は！」

エディは戻ってきた三輪自転車を見て、礼もそこそこにツナギ姿の青年に飛びついた。修理に出して戻ってきた三輪自転車の後部には、コードや筒や螺子が剥き出しの無骨な機械がくっついていた。

「何て、エンジンやがいね。見たことないんかえ？ 揮発油を燃料に動く自動車の心臓部分やよ。貨物車にも搭載されてるんやけど、アレは自転車に付けるにはデカ過ぎやし、オレが改造して自転車用にしたんや。これで計算上は時速四十キロメートルはいける！ ブルートロッコより速く走れるんやぞ！」

自慢げに話す男は、ハーレー・ジムニスト。ロックリバーの機械職人だ。

背が高く、いつもサングラスを掛けていて油まみれで、ぼさぼさ頭の青年（おそらくトリティと同じ年の頃）は、外見は誠実そうだが話してみればただの機械バカである。

だが侮る事なけれ、祖父はブルートロッコの製造にも関わった機械の匠で、ハーレーは祖父の技術を受け継いだ若き技術者だ。

空の駅支社の裏の路地を少し入った所に彼の工場はあり、空の駅支店で使用されている自転車や貨物車の製造・修理を任されている。

「小型化で強度が下がったのが結構難しくって、それクリアさせるのが大変やってン。でもいい仕事やったわー」

「いやいやいや、よくないんだって！　なに『お腹いっぱいです』みたいな、満足気な顔してんだよっ」

エディは迫るが、ハーレーは満足そうに笑っているだけだった。

「サービスなんやから金はいらんよ。あ、でも乗ったら感想は聞かせてや」

「俺は修理してくれて頼んだんだ、エンジン付けろなんていつ言っただ！」

「言ってないけどさあ、好意やがいね。そんな怒らんといてや。顔怖いよ」

「これは会社のだから、改造なんかしたら駄目なんだ。俺が怒られるだろ」

「大丈夫やって。そんな大層なことでもないやろ、エンジン付けたくらい」

「大層なことだよっ！　これじゃ配達に行けないじゃないか。早く外せよ」

「……そんなに言うんなら外すけど。要るようなくても、オレは知らんよ」

エディが怒るので、ハーレーは工具を手にして口を尖らせて渋々と外しはじめた。

今の時点で他の配達員から三十分の遅れだ。『時間帯お届け』は五課の担当なので時間にそれほど縛られていないが、エディは焦っていた。遅れば遅れるほど、他の課や利用客に迷惑をかけることになる……最後には、自分がマイクに叱られるわけである。それだけは嫌だった。

「まだ？」ブルツと身震いをしたエディは、首を長くしてハーレーに訊く。

「まだやわ。若モンが生き急いだらいかんよ。寿命縮むよ」
「生き急ぐとか、そういうことじゃないんだって！」

マイペースなハーレーに少々うんざりし、エディは落ち着こうと深く息を吐いた。

メリーアン又は箱の中身を見て絶句した。

「予想外だ」これにはガットも驚いている。

マイクは衝撃で顎が外れそうなほど口を開いていた。目の前に、誰も予想しないことが起きていた。

箱の中には、白く細い、華奢な腕が入っていた。

「これは……事件というものではないの？」腕が入っているなんて尋常ではない。メリーアン又はただならぬ事態に困惑していた。「子供の腕よ」

「うっん、昨日の奴はこいつが狙いだったのか？」目を丸くして、ガットは言った。

「どういうこと？」

「この箱の中身が何なのかってえのは、ひとまず置いて。犯人は箱の中身が目当てだったんじゃないのか。この箱ががちり封をされているのを俺は見てるんでえ、外から誰かが開けたに決まってるあ。犯人は箱の中身を狙ってたんでえ、きつと」

「そうね、他に盗まれた物は無いようだし……ああ、でも箱の中にはやっぱり、その、子供の死体が入っていたのかしら？ この腕は何なのかしら」

「それも含めて事件でい。こりゃ本格的に自衛団が必要だな」

自衛団とは、各市町村の民間人によつて結成された警備団体のことである。フェブルマリー王国の防衛はすべて軍の管轄で、軍の中の警衛隊という部隊が地方に駐在している。しかし警衛隊が配置されているのは都市だけで、田舎までは彼らの手や目が届かない。届かせるつもりもないらしい。

彼らがどん詰まりの田舎街に来る事はほとんど無い。

自分の身は自分で守る、ということ、自衛団は壮年と青年を中心に結成されていて、大抵事件の犯人は自衛団の手によつて捕まり、警衛隊がいる都市まで連行される。

ロックリバーから一番近い部隊所はサンミラノにあるが、大抵はその場で叱られて終わりになる。空の地において、逃げ場がないこと、また、狭い場所での情報の伝達は虫が知らせるよりも早く、そのため重罪はほとんど起こり得ないものだった。

「とりあえず、守衛室に行つて知らせてくるわ」

そう言つてメリーアンヌは駆け出した。これほど重大な事件は無いと、そして自分が関わる事ができるなど、この平穏な田舎に居てそうそう有り得る事ではないと、内心事件の発生に楽しく思いながら。

「あいつぁ大丈夫か？」

メリーアンヌの表情を見逃さなかったガットは、少々不安になった。女というやつは噂話が大好きだから、ここで起きた事をべらべら喋ってしまうんじゃないかと心配になる。当事者になったことを自慢したい気持ちは分からなくてもないが。

「……おいマイク」彼女に一言あったほうがいいんじゃないか、と言おうとしてマイクに向き直ると、彼はすでに正気に戻っており、箱の中身に手を触れていた。

「おいおい、触るな壊すなってえ言っときながら、オメーが触るのかよ」

だがマイクはガットの言葉を聞いていないようだった。「……猫將軍」

「なんでい」

「これ、人の腕じゃないよ」

一瞬、沈黙。

「あん？」なんだって？

第2幕・4 車庫に潜む妖怪、鍋の中の小人

ちりりん

時刻はすでに正午を過ぎていた。午前の配達を終えるのに、昼休みの半分を使ってしまうていた。

遅刻に社内でのトラブル、自転車は改造されて、エディの気分は最悪だった。

しかもこんな日に限って遠方の配達があつたりするので、余計に気が滅入った。

午前の配達が終わった時点で、彼は一日分の気力を使い果たしていた。

ふと、モーゼフの占いの言葉を思い出された。まだまだトラブルがありそうな予感がしてうんざりする。

空の駅支店の真横に設置されている車庫に辿り着くと、自転車が降りて中に入る。

穴のような小さな窓が四つあるだけの車庫は薄暗く、換気が悪いので空気が籠っている。車庫は入り口から見て右側に、集配所と直結している大きな扉がある。昼休みなので扉の向こうの集配所は静かだった。車庫の中はエディの足音だけが響いている。

と……はっとして、エディは顔を上げた。

微かな物音が聞こえた気がして、目を凝らし耳を澄ます。

だが、車庫には自転車と貨物車があるだけだ。何者の気配もない。ゴキブリかとも思ったが、エディは思い出した。今朝の騒動。不審者の存在。不審者が捕まっていけない事実。まさかまさか、と思いつつ、こんなところで出くわしたら嫌だな、とエディは急いで自転車駐輪スペースに自転車を留めた。

体力はあっても体術は姉と違って心得ていないので、争いになったら確実に負ける。

そうならないために、早足で車庫を出ようとしたところ、

ずる

はつきりと、物音を聞いた。ゴキブリではない、何かの音だ。体を強張らせてゆっくりと振り返る。

そこにはいつの間にか。

得体の知れない物体が。

長い毛で覆われ、白い三本の足で這う。
まるでモップの妖怪だ。

足を器用に動かして、エディに近づいて来る。不気味で奇妙な生物を目の当たりにしたエディは、逃げることも悲鳴をあげることもし忘れて、ただ呆然とそれを見ていた。

「……………え、し……………」

それは鳴き声だったのかもしれないが、エディには言葉のように聞こえた。

生物はどんどん近づいてくる。もうメートルも離れていない。

「か……え、し、……」

前足が（よく見ればそれは人の腕と同じ形をしている）エディのズボンの裾をつかむと、そのままするように抱きついてきた。

エディは口を開けるが声は出ず、反対に息をのんだ。

「か……え、……し、て」

長い毛の隙間から覗く、真ん丸の灰色の目玉と目が、エディに向けられる。

「——っ」 わあああああつ！

空の駅支社は大変な騒ぎになっていた。その中でも特に大変だったのは、配送部一課だった。

木箱の中から見つかったもの……ガットが見間違うほど、精巧に作られた人形の腕によって、殺人事件ではなく窃盗事件に発展していた。守衛室からトリテイ（まだ帰っていないかったらしい）の他、今日の当番の守衛や自衛団の団員たちがかけつけ、やれ現場保存だ、やれ現場検証だと忙しく動き回っていた。

ただし、それも昼を過ぎるまでだった。

昼休みも半分が終わった頃、悲鳴を聞いたのはガットだった。猫はヒトの何倍も耳が良く、誰も聞こえない声でも彼には聞こえ

ていた。

不審に思った彼は悲鳴がした場所、車庫に向かうと……そこでモップの妖怪と、それに襲われているエディを発見した。

「しかし、よく出来てるもんだなあ」ガットが興味深げに視線を送る。

自衛団は去り、デイヴ（今日の早番の守衛）も見回りに戻っていて、一課の中は落ち着きを取り戻していたが、別の関心が増えて、デスクルームは賑わっていた。

「本当にすごいね、信じられない。こんな技術があるなんて」

残っていたトリティもしげしげと見つめていたのは、椅子に座った少女だった。

「名前は何ていうの？」

尋ねると、耳に心地よく響く声で少女は答えた。

「アイリス」

「あらあ、可愛い名前ねえ」

少女の後ろで彼女の乱れた髪の毛にブラシを当てていたメリーアンヌも、顔をほころばせた。

少女アイリスは、非の打ち所のない可憐な美少女だった。ぱつちりした灰色の瞳に長いまつげ、小振りの鼻、ふつくらした

桃色の唇、白い肌に赤く染まる頬。上半身を覆うほどのウェーブのかかった金髪が特徴的だ。着ている服も彼女の愛らしさを際立たせるような、肩の膨らんだ白いブラウスに、胸に大きなリボンが付いた青いワンピース、白のハイソックスとローファーという組み合わせだった。

エディは、アイリスを中心にした人ばかりから離れた場所で、椅子に座って彼女を見ていた。

可愛い。直視するのを躊躇ってしまうほど、可愛い。

メリーアンヌが持つ大人の女性の魅力とは違い、アイリスは清楚だ。素朴で慎ましく、大輪の花ほど豪華ではないが、小さいからこそその美麗を持つ、そんな花がよく似合う。

だが……

「おい、エディや。腕え持ってこい」

「う、うん……」

ガットの一言で、カインは現実には引き戻された。自分のデスクに置いてあった木箱の中から白くて細い腕を取り出す。人の肌と同じ弾力はあるが、冬の冷気で凍えた手のような冷たさではなく、陶器のような『物体』の冷たさで、不思議な感触だった。

はい、とアイリスに差し出すと、

「ありがとう」

ぎこちない言葉で礼を言う、それがさらに可愛いくて、胸の中がほっこりする。

アイリスはエディから受け取った腕を器用に自分の左肩に付けると、かちりという音がして、腕は血が通ったように滑らかに動いた。

そこで再び現実に戻された。

アイリスは、人形だった。

正確には、オートマタという種類のからくり人形だと、ガットが付け加えた。

「オートマタ？」

皆が一斉に首を傾げた。

ブルーフォレスト9番地。

数字は付いていたがそこは森の中だった。

青々と葉が繁り、空気は澄んで体が浄化されるような場所だ。木々によって視界が遮られた森の奥からは鳥獣の鳴き声が轟き、まるで自然の腹の中にいる雰囲気だ。

その中央に、大きな木造平屋建ての家屋。

表札にはイアソン・ヴォードの名。

伝票の記すものと一致していた。

玄関のドアノブの真下に、鍵の対になる穴があった。

「は、入るんですか？ 不法侵入になっちゃいますよ」

「勝手に入って誰が気にするんだよ？ 入らないと何も始まらないよ。昨日のこともさ、まるで僕たちに『来て下さい』と言っているようだっただろう。本を届けろってね」

「……はあ、では家主はここにいますかね？」

「居ないだろうさ、鍵がここにあるんだから。でもこの家に何かあ

るのは間違いないよ」

そういうわけで、遠慮なく二人は家に上がり物色していた。

「やもめ暮らしなんですねー。うわっ、汚い台所！ このフライパン、油でぎとぎとじゃないですか！ チーズなんかカビが生えちゃって！ このお酢、賞味期限が一年も前に切れてますよ！ うわあ、包丁に錆びがつ！ 嫌だな、最低だなー」

ハマートは主婦の嘆きのようなことをブツブツ言いながら、台所を漁っていた。

スーヴェンはそんな彼のことを構うことなく寝室と工場を見ているが、何も出てこなかった。

それから裏口へ向かった。

そこは雑然と物が置かれ、裏口というより物置に近かった。奥の突き当たりに扉があるが、その周囲を木箱が何かを避けるかのようにな、一定の軌跡を描いていた。見えない壁でもあるのか、そこだけを躲して。

スーヴェンは箱を跨ぎ、箱のすぐ側の裏口の扉に近づいて、ノブに手をかけた。ゆっくり回して、引く。すると、扉は簡単に開いた。内開きである。扉を完全に開けると、ちょうど木箱たちはぎりぎりのところで扉に触れなかった。

（誰かここに来たのか？）

裏口の外は少しばかり開けていて、日光が当たっていて雑草が生

え放題だった。しばらく、それも二、三ヶ月は手をつけられていない状態だ。

それなのに雑草は表へと続く方から押し倒され、潰され、微かな道ができていた。一直線に裏口へと続く獣道。誰かが通った証拠だ。それに裏口の扉は内開きだから、中から開けれるなら荷物は片すだろう。これは外から無理矢理開けたのだ。

つまり、誰かが来た可能性は大きい。つい最近だ。

イアソンが開けた可能性は……無視した。

リビングへ戻ると、ハマートが鍋を持って右往左往していた。鍋を持って慌てる状況が理解し難く、スーヴェンは呆れを通り越して見なかったことにした。そういえばシャワールームはまだだったな、とリビングに背を向ける。

「ああつ、スーヴェン！」

出ようとしたところへ、ハマートに呼び止められた。

「お、お……」ハマートは歓喜と興奮と焦燥で口が回っていない。彼のことだから、頭も回っていないだろうが。

「落ち着きなよ。何を言いたいのか、分からないよ」

「はいっ、あの、おっさんが居たんですう！」

「どこに？」

「ここに！」

ハマートは嬉しそうに鍋をスーヴェンの目の前に差し出した。

「……どこに？」

「ここに！」ハマートは満面の笑みで、鍋を振った。「ここに居ました！」

目の前のハマートと鍋を交互に見たスーヴェンは、フと笑みを浮かべ……

「いい加減にしろ！ 遊んでる暇は無いんだ！」

左手の甲で、思い切り鍋を吹っ飛ばした。

ところが。激しい音を立てて床に落ちた鍋の中から、何かがはい出して来たのだ。

一瞬、特大ゴキブリかと見間違えたが……

「……いてて、なんつー乱暴な」

それはまさしくイアソン・ヴォードだった。倉庫で見たイアソンと同じ顔、同じ服。

だがその十分の一ほどの大きさの、小さな小さなイアソンである。

「ねっ、居ましたでしょ」

とハマートは胸を張って言うが、スーヴェンの耳には届いていなかった。

目を見開き、テーブルの上にあった紙の束を手に取りそれを棒状に丸めると、小さなイアソンめがけて力を込めて振り下ろした。

「ぬおっ！ なんだーっ？」

間一髪で避けた小さなイアソンは、危険を察知して逃げ回る。テ

ーブルの下、ソファの影、戸棚の隙間……そのたびにスーヴェンは家具をひっくり返し、棒を振り下ろす。

「おい止める！ 俺はゴキブリじゃねえっ！」

「スーヴェン、止めてください！ 動物虐待ですよっ」

二人の叫びに、スーヴェンはやっと手を止めた。小さなイアソンとハマー트는、同時にホッと胸を撫で下ろすが、次の瞬間。

「おおっ？」

「油断したね、おっさん」

スーヴェンは小さなイアソンの首根っこを摘まみ上げ、フフフと不敵に笑った。

丁度良いところにハムスターの檻があつたので、小さなイアソンをその中に閉じ込めた。寝床や滑車もあり、なかなか快適そうな住まいだ。

「似合ってるよ、おっさん。メタボリックシンドロームも解消できるね」

「ゴキブリの次はハムスター扱いか？ 馬鹿にするなよ、ガキンチヨ！」

「馬鹿にしているのはどっちだ？ アンタみたいな奴がいるから話がややこしくなるんだ」

「乱暴をしなくても俺はちゃんと話してやるのに、これだから最近の若造はダメなんだ」

「その辺の奴らと一緒にしないでほしいね。わざわざ本を持ってきてやったんだ、礼を言われてもいいくらいだ」

スーヴェンと小さなイアソンは、檻を挟んで言い合っていた。それを少し離れた所から、ハマートはのんびりと眺めている。

「しかしスーヴェン、このおっさん、いつの間にこんなに小さくなったんですかね。体が小さくなる毒でも服用したのでしょうか」

二人が睨み合っているのをよそに、のほほんとした場違いな口調でハマートが言うので、スーヴェンは彼をキツと睨みつけた。

「なにボケたことを言ってるんだよ、マンガの読み過ぎだ！ このおっさんが普通の人間に見えるのか？ そんな毒あるわけないだろ！」

「ええーっ？」 驚くハマートは、演技でも何でもなく、本気で驚いている。

「今さら何を驚いてるんだよ！」

「体が小さくなる毒って無いんですかぁーっ？」

「そっちなっ」

ハマートに突っ込んだところで、スーヴェンはハッと我に返った。小さなイアソンを見ると、滑車に寝そべってくつろいでいた。

「楽しそうだな、お前ら」

スーヴェンの額に青筋が浮き上がる……が、彼はすぐさまそれを引っ込ませた。これ以上こんなところで時間を潰すわけにはいかない。さっさと話を進めなければ。

「僕たちはね、おっさんには聞きたい事が山ほどあるんだ」

「おっ、やっときたな。何を知りたい？ さあ訊け。それ訊け。俺がすべて答えてやるぞ」

小さなイアソンは偉そうだった。この見下した言い方が気に食わない。檻を前後左右、めちやくちやに振り回したい衝動に駆られる。落ち着かせるようにコホンと咳をしてから、

「そうだな、本当に沢山の事を知りたいと思っているんだ。でも何よりも先に理解しなきゃいけないのは、アンタのことだ。そうだな？ アンタ一体何者だ？ 倉庫のおっさんと無関係じゃないだろ」

スーヴェンの言葉を聞きながら、小さなイアソンは嬉しそうに頷いた。

「うむ、男前は鋭い。丁度いい奴に鍵を拾われたもんだな」

「鍵？」

「……俺が何者なのか、倉庫のイアソンが何であるか……それは同じで、お前さんのオヤジが何をしようとしているかも、すべてはそこに繋がる。一見すればばらのことでも、順序を追っていくと、行き着く先が一つだということもある」

「それで？ どういうことなんだよ」

「つまり『オートマタ』と呼ばれる人形がすべてを繋ぐ」

「……オートマタ？」

スーヴェンは眉間に皺を寄せた。

第2幕・5 オートマタ

「起源は中世の頃に貴族の間で流行ったオルゴール人形なんですね。オルゴールの回転に連動して、人形が動く。」

近代くらいに入ってから、オルゴール部分を外して、人形だけが動く物が作られるようになったんですね。オルゴールから外れた人形は、歯車やネジやゼンマイで動いてんじゃないですね。」

「どんなしくみは詳しいことは俺もよく知らねえがな、その技術を使って動く人形のことを、オートマタって言っんだ」

ガットは皆に説明した。

「初めて聞くわ。そんな人形があることも知らなかった」

トリティは、すごいね、と感嘆の声をに出している。

「持つてる奴なんざ金持ちの道楽人だけだ。庶民にや縁の無えモンだ、知らねえで当然さ。俺も目にしたのは二度目だがよう、こんなリアルなオートマタは初めてだ。イアソン・ヴォードって奴は腕の立つ職人なんだろうな」

ガットはちらりと木箱に目線を送った。

イアソン・ヴォードという名の職人によって生み出されたのだとアイリスは言った。

エディがモーゼフ・ペイターズ宅から預かってきた木箱の中に入っていたが、小さな木箱なので足を外して入れられたのだという。

「どうして外に出たんだ？」

エディが尋ねると、

「だれもいなくなったら、遠くに逃げなさいって、言われたの」

とアイリスは答えた。

本当はもっと前に出ようと試みたが、箱の上に何かがあつて（モ―ゼフが置いた漬物石である）出られず、そうこうしているうちに再び人の声や激しい揺れが起きたので、じつと潜んでいた。

それから静かになり、しばらくしてからアイリスは箱から抜け出した。自分で足を装着し、出たことが知られないよう木箱を元の状態に戻そうとしたとき、接続が悪かったのか左腕が抜け落ちて……拾おうとしたと同時に、誰かに大声で呼ばわれた。

誰かいるのか、と威嚇の声で。

それは当然のことながら、見回りをしていたトリティだ。

驚いたアイリスは慌てて隠れたが、左腕は箱に残ったままだった。腕を取り戻すこともできず、アイリスはとにかく逃げなければという思いで、降り注ぐゴミ箱やら椅子やらをかくぐり、出口を見つけた。そして障害物（ウィンジールである。彼は今も仮眠室で痛めた腰を擦っていた）を跳ね飛ばし、安全な場所を一晩中探した先が、車庫だった。

「すぐに逃げたかったけれど、うでが」腕は箱の中に残ったままだった。それですつと車庫に隠れていた。

「どうしてエディくんの前に出てきたの？ 夜まで待っていたらよかったのに」

そのほうが人がいないのにねえ、とメリーアン又はトリティに同意を求めた。トリティも、そうだよな、と頷く。するとアイリスは少し間を置き、

「安全そうだったら、だいじょうぶって言われたの」

それを聞いた周りの者はくすくすと笑い出す。アイリスはきょとんとしており、なぜ笑っているのか理解していないようだった。言われた当のエディは複雑な気分だった。

「そうだね、アイリスちゃんの判断は正しい」トリティが笑いながら言った。「確かに、エディは安全だよ」

なんだか自分が意気地なしと言われているようで不愉快になる。いや、意気地なしなのは事実に近いから否定は出来ない。それがなお悔しい。

「まあ、とにかく。窃盗事件はアイリスちゃんの脱走だったわけだし、こうして本人もいることから、事件はめでたく解決だね。ああよかったー」

「ほっとしていますねえ、課長さん」

「そりゃあそうだよ。このまま事件が迷宮入りなんてことになったら、どうなってたか。荷物を盗られたなんて、ベクターズカンパニーの信用に関わるもの」

「荷物？」

「そうだよエディ。アイリスちゃんは『差出人戻し』の荷物に入っていたってことを、忘れてないだろうね？ 君はアイリスちゃんを、差出人に届けなきゃいけないんだよ！」

「あ……」

マイクから指摘されるまでアイリスが人形であることを忘れていた。どうみても普通の女の子（可愛さは普通以上だ）だから、つつい人間だと錯覚してしまっていた。気を抜くとそのことを忘れてしまいそうだ。

急にアイリスが声をあげた。何事かと思えば、彼女の左目が外れてころころとエディの足下まで転がってきていた。

「目が……どこ？」

「……落ちてたよ」

「ありがとう」

微笑んで目玉を受け取るアイリス。その顔は端正で、少しの歪みもない。しかし左目の部分はポツカリと穴が空いている。空白。闇。虚無。それらが彼女の目の奥に潜んでいた。やっぱりアイリスは人形だ、とエディは改めて認識して、なぜかとても残念に思った。

エディの気もよそに、そういえば、とトリティがマイクに言う。

「そういえば、アイリスちゃんは何かから逃げていたんでしょ。差出人に返して大丈夫なのかな」

それを聞いたマイクは、くわつと目を見開き、歯を剥き出しにして、威嚇するオオカミのように彼女を凝視した。般若の恐ろしい形相に、トリティは一瞬怯む。

「いいんだよ。海より深い事情があろうとも、お客様のプライバシーに触れるようなことはしちゃいけないんだ。配達員は配達が仕事！ 信用第一！ これ、鉄則！」

「そ、そうなんだ」

「じゃ、そういうことだから。ちゃっちゃと行ってきてよ、エディ」

「はあ……」

マイクに睨まれ、エディはムツと反発心を抱いたが、すぐにアイリスと目が合ってドキリとした。アイリスは相変わらずにここにこしている。

そのとき、ゴーンと昼休み終了の鐘が鳴り響いた。エディはそれを聞いて、昼食を食べ損ねたことに気がつく。

腹がぐうと鳴った。

「オートマタ、ね。この世には不思議な物があるもんだ」

小さなイアソンの説明を聞いたスーヴェンは、目の前の人形をまじまじと眺めながら素直に感心の声を漏らした。

「で、ヴォード家は代々続くオートマタ職人の家系なんだ。すごいだろ」

「なるほど、倉庫の奴もおっさんが作った人形だったわけか。それにしてもあんな気味の悪い物にしくたっていいだろうに」

趣味が悪いな、とスーヴェンは言った。

「奴は試作品だったからな、不具合があったんだろ。職人でもたまには失敗するさ。本物のイアソンが逃げるときの時間稼ぎもあって自分の分身にしたんだと。かくゆう俺も本物の分身だから、いろいろなお前さんに教えてやれるわけだ」

「試作品……もしかして、あの本に書いてあった物の試作品か」スーヴェンは自動車の中に置いてきた、古い本を頭の中で思い描いた。

「そうとも、よく理解しているな。先生は説明の手間がかからなくて楽チンだなあ」

「誰が先生だよ？ まあ、とにかく……なんとなく見えてきたかな。この面倒事の関係が」

スーヴェンは顎に手を当て、ふむふむと頷いた。

「え、判ったんですか？」

一人納得するスーヴェンに、ハマートは置いていかれまいと慌てた様子で尋ねた。彼にはスーヴェンが頭の中で組み立てた推理の一部すら、読み解けていなかった。

「まあね、でも半分くらいは僕の考えていた通りだった。ただ、まだ判らない事がある」

「ふむ、何だね？ 遠慮なく質問しろ」

太々しい言い方に、スーヴェンの額に再びカチンと当たった。それを確認することなく、頭を振って追い払う。冷静になれ、と言いつけさせた。

「なぜ家の鍵を残したんだ？ 重要な謎だよ。だいたい僕が見つけずにオヤジやトムが見つけていたら、どうするつもりだったんだ。イアソン・ヴォードが生きている事がバレるし、鍵があったらここにも来ただろう」

「あいつが鍵を残した理由は、残念ながら俺は知らん」

「なんで知らないんだよ。分身なんだろ？」

「そうだが、本物が持つ情報のいくつかは、俺には無い。オートマタに人格、記憶などの総てを反映させるのは難しい。ま、お前さん

が来たわけだから何の問題も無いわけだがな」
「それはそうだけど」

と、スーヴェンはもともと口の中で言った。確かに自分たちが来たが、それは結果論だ。自分以外の誰かが来ていた可能性は高いし、そうなれば今までのことは全部、ブルドッグオヤジの耳に入っていたのだ。

「ていうか、もう来たしな」

さらりと小さなイアソンが言ったので、スーヴェンは一瞬、どういう意味か解らなかった。何かの比喩か聞き間違いかと思って、驚いた声で言葉を返した。「何だって？」

「来たんだ、妙な連中がな。お前さんの知り合いじゃないのか？ ハゲ頭のゴツい男が鍵はどこだと騒いでいた。妙に律儀な奴らでな、痕跡を残さないよう片付けてから去って行った」

お陰で部屋が前より綺麗になったよ、と小さなイアソンは笑った。

「そうか、やっぱり来たんだ。ハゲって言ったらトムだな……裏口がそのままになっていた。律儀な割には最後が杜撰だったね」

「いんや、裏口はイアソン・ヴォードだな奴は間抜けな事に、玄関の鍵を倉庫の奴に隠したせいで自分が入れなくなっちゃったんだ。アホだろ？ それで裏口から無理矢理入って、俺を置いてから出ていった」

と言う小さなイアソンに、スーヴェンは呆れて、一瞬後悔の気持ち浮かんだ。

「……なんだかバカらしくなってきた。僕がそんな奴の残した物を探る必要があるのか？」

吐き捨てるように嘆くと、

「あるんじゃないですか？ トムの兄貴がここに来たのなら、兄貴が探している『鍵』も先に見つけた方がいいんじゃないですか？」

珍しくハマートが真剣な表情で言うので、スーヴェンは驚いた。それが正論なだけに二度驚いた。

「それに」小さなイアソンが続けざまに言う。「それに、お前さんはもう関わってしまった。逃げることも、投げ出す事ももうできない」

「僕が何をしようと、アンタに決められる筋合いは無いよ」

怒りと呆れない交ぜになった表情でスーヴェンが言うと、目の前のおっさんは不敵な笑みを浮かべた。挑戦的で癪に障る笑い方だった。にい、と口の端を持ち上げる。

「倉庫で鍵を見つけ、ここに来た……そして、俺を見つけたことは、何よりも重要なことだ。言っただろう、バラバラな事でも行き着く先は一つだ、と。関わってしまったお前さんは、その行き着いた先の結末を、見届ける責任があるのさ」

「何で、僕が」面倒事に見切りをつけたって、罰が当たるわけでもなしに。

「お前さんが、鍵を見つuckerからさ。奴らではなくて」

含むように笑う小さなイアソンの顔を、スーヴェンは訝しく思った。

鍵を見つける？

それは予定でも、予測でもなく、未来が断定された言い方だ。

しかも、鍵とは？ 倉庫ですで見つけた、家の鍵のことではないのか。

それなら過去のことだし、言い方が間違っている。トムが探している鍵のことか？

どういうことだ、とスーヴェンが詰め寄ろうとしたとき……

ぐにり。小さなイアソンの顔が醜く歪んだ。

一瞬だった。

あつと言つことも出来なかった。呼び止める隙間も無かった。

歪んだ顔は、首から発射するように吹き飛び、切断面から黒い液体が飛び散る。踊るように手足が弾け飛び、胴体は壊れたパズルのような破片と化して、ハムスターのカゴの中は黒い粘液に汚染された。

倉庫の時と同じだった。等身大ではない分、不気味さや奇妙さは薄かった。二度目だったから、それほど動揺せずに済んだのかもしれない。

だが……それとは違う意味でスーヴェンは気分が悪かった。それは一番重要な部分を知る事ができなかった、という腹立たしさと、イアソン・ヴォードが残した謎に対する苛立ちだった。中途半端な

情報を掴まされたのが不愉快で、胃の中がムカムカした。それらは内蔵も骨も、体中の隅々まで浸食していき、終には頭の天辺から溢れていった。

「……どうしましょう、これから」ハマートがおずおずと、腫れ物に触るように（実際スーヴェンの気分は、目に見えて分かるほど腫れていた）尋ねてきた。

「さあね」スーヴェンはそっけなく返す。腫れがひくのは容易ではなさそうだった。

「あ・そうそう！」

突然イアソンの声がした。驚いたのはハマートだけで、体を強張らせて辺りを見渡している。スーヴェンの頭の中はイライラで満たされていたので、あからさまに不機嫌な表情をした。まだ何かあるのか。

ほどなく、ハマートがハムスターの寝床に埋もれていた小さなイアソンの頭を発見した。

「お前さんが俺を叩き殺そうとしたときに使った本だがな、あれは取扱説明書だからよく読んでおくように！ それから、本八本物に渡しテクれ。おれじゃダメだ」

そう言うつと頭も破裂し、小さなイアソンは完全に壊れた。その中に、キラリと光る物が……黒い粘液の隙間から、顔を出す。

「……？」

第2幕・6 空と地上、それぞれの時間

アイリスはエディの横に並んで行儀よく座っている。作業をしている彼の手元を興味津々に見ており、視線を受けるエディは緊張していた。ペンを持つ手に力が入る。

「それは、なあに？」と、アイリスが尋ねてくる。

「これはインクペンだよ。紙に書く道具だから食べられないよ」

「これは？」

「インク。それも食べ物じゃないよ」

「これは？」

「クリップ。紙を挟む道具だよ。食べ物じゃないから」

「食べられるのはどれ？」

「どれも食べられないよ」ああ、仕事が進まない！

エディは午前の配達伝票をしていたが、デスクにある文具に手を触れようとするアイリスを、ひやひやした気で見ている。手に取るうとすれば、引き出しに入れたり手の届かないところへ置いたり、その繰り返しだ。まるで幼児を相手にしている気分だった。

午後の時間、昼食を食べられなかったエディを気遣って、メリーアンヌが屋台で肉饅頭を買ってきてくれた。

それを有り難く食べていると、アイリスが真剣な眼差しを向けてくるので、半分だけ差し出した。人形が物を食べるなんて思っていない。それは冗談のつもりだった。しかし、アイリスは肉饅頭を食べてしまったのである。

それからアイリスは、目に映るものすべてを口に入れようとする。肉饅頭半分だけでは物足りなかったのだろうか、好奇心だけでなく

食欲も旺盛だ。

「アイリスって、どういう構造になってるんだ？」

「そういう人形なんでえ。オートマタってのはよ」

ガットに訊けば、動き、話すのが、オートマタの特徴なのだ、と言われた。

「オートマタってのはよ、オメーが自転車で空を走るときと似ているかもな。オメーは自転車を走らせるとき、道をイメージするだろ？ オートマタもな、作るときに人形に作り手のイメージを反映するんだ。職人が肌の質感や性格を想像しながら『食欲旺盛な』『好奇心のある』ってえイメージを持って作れば、オートマタはそんなことになる」

「じゃあ食べるようになってるのも、作った人がそうしたいと考えていたからなのか？」

「そうだな。腕のいい奴ほど、人形の動きはリアルになる」

「ふうん」

と納得したところで、別の疑問がふと思いつく。アイリスがデスクのメモ用紙に手を伸ばしていたので、さりげなくそれを遠ざけて再び訊いた。

「なんでそんなに詳しく知ってるんだ。ずっとベクターズにいたんだろ？」

「ここに来たのは年食ってからのことでい。オメーと同じ年の頃は無茶してたからなあ、伊達に今まで生きてる訳じゃねえや。マイクや支社長すら知らねえことも知ってるのさ」

ガットはがはと笑っているが、彼はいつたい何歳なんだと、エ

デイは眉間に皺を寄せる。

年老いているとはいえ、身動きは軽いし頭も口もよく回っている
ので、ヒトでいえば還暦くらいか、とも想像していたが、それも自信がなくなった。そういえば、猫は長い年月を経ると妖気を帯び、尻尾が二つに割れてネコマタという妖怪になると、昔に聞いたことがあった。彼の尻尾は割れていないが、尻尾が割れていないタイプのネコマタなのかもしれない。

と、ぼんやりと考えていたら……

「ああっ！ アイリス、それはだめだっ」

少し目を離れた隙に、アイリスはエデイがまとめていた伝票を、口に入れようとしていた。エデイは慌てて手を出したが遅く、彼女は伝票の端を食ってしまった。

そして一言。

「……………おいしくない……………」

伝票を口から離して、渋い顔をした。

「どんなもんでい？」ガットが苦笑いで尋ねてくる。

「歯形がついたよ」

伝票の束は、上と下の用紙にくっきりとアイリスの歯の跡が残った。それから彼女の歯並びが綺麗だということがわかるが、関係のないことだった。

「千切れてないから、なんとかギリギリかな」

「ごめんね」

アイリスが萎れて謝るのを見ると、些細なことにように思えてくるのが不思議だった。

「うん。いいよ、謝らなくて」本当はよくないのだが。

「可愛さつてえのは、特権だなあ」隣でガットがにやにやしながら言っている。

「何か言ったか」

「はは、何でもねえよ。それよりアイリスを送っていくなら早くしろ。差出人の住所だと、そろそろ出ねえと帰ってくるのが夜になっちまうぞ」

「そうか。そうだよな」

アイリスをちらりと見る。相変わらず愛くるしい笑顔で、今度はガットの尻尾をつかもうと手を伸ばして遊んでいる。

「なあ、ガット、差出人のイアソン・ヴォードって人はアイリスを作った人なんだろ。なんでアイリスをモーゼフ爺さんの所に送ったんだろう。知り合いでもないのに」

「そうだなあ……事情があるんだろ。オートマタってなあ制作に大金が要るらしいが、せつかく作ったモンを赤の他人に送るってなあ、普通じゃねえ。サンタクロースだとしても気風が良過ぎらあな」

そう言うと、ガットは尻尾に戯れるアイリスを相手に遊びはじめたが……それがエディには何か含むものがあるように感じた。

「何か知ってんのか？」

実際、ガットは自分の知らないことを沢山知っている。表には出

てこない、裏の奥の、深いところの情報まで知っているのだから、彼の物の言い方が余計に引つかかった。

「ああ、知ってるともな。だがオメーが気に病むことじゃねえよ」

ガットの答えは、エディを押しつけていた。突っ撥ねて、近づかないように。それ以上踏み込まないように。エディは想像していた通りの答えだったので、やっぱり、という思いしかなかった。同時に、自分が仲間外れにされている気分にもなった。

ガットは重要なことは話してくれない。それは面倒事に関わらせたくない、という親心にも似た心遣いからくるものかもしれない。しかし自分が子供扱いされているようで、エディは悔しかった。配送部一課の新人であることは事実だが、それでも何かを共有できないことは淋しいし、自分は信頼されていないのか、という孤独感が湧いてくる。

「俺は、ガットが何も話さない事を知っているよ」

そう言うのが精一杯だった。だが、ガットの返事で一つのことには確信を得ていた。

ガットは隠し事をしている。それも、重大な事柄を。それが何かは分からなかったが、ガットの態度はそれを裏付けているようにも思えた。

とはいえ彼が何を知っていようと、自分が何を思おうと、アイリスを差出人である、イアソン・ヴォードの元へ送り届けることは確実に決まっていて、それ以外に何かあるのか、と問われれば、やっぱり何もない。

自力で真実を探り当てられるとも思えず、エディは、今より己の無力を強く感じたことはなかった。

「それじゃ、アイリスを送り届けてくるよ」

どうしようもなく、どうすることもできず。
もやもやした気持ちでエディは席を立った。

がたがた、と車体が揺れている。道は舗装されていようと、それが長い年月によって風化していれば、舗装の意味は無いに等しい。砂利道とそれほど変わらない道だ。

「それがトムの兄貴が探していた『鍵』なんですかねえ？」

運転席のハマーが、体を揺らして興味津々に尋ねてきた。

「さあ、どうだろう。鍵には違いはないけど、何の鍵なんだかね」

助手席に座るスーヴェンの手元には、『T』型の鍵があった。

「オルゴールの鍵に似ていますね」

言われてみれば、手にした鍵はオルゴールのゼンマイを回すのに手頃な大きさだ。柱時計のゼンマイを回すのにも丁度良い具合だが、オートマタのイアソンの中に入っていたことを考えると、そのようにも見えてきた。

スーヴェンは鍵をジャケットの内ポケットに仕舞うと、冊子を出

した。小さなイアソンは本だと言ったが、それは薄っぺらで装丁も何も無い、簡素なものだった。イアソン・ヴォードが作ったのか、紙は白く、赤い表紙の古い本とは違い古びた物でもない。

開いて読んでいると、ところで、とハマートが言ってきた。

「ところで、さっきの『面倒事の関係』とは何ですか？　ボクにはさっぱり解らないです」

ずっと気になって気になって。ハマートは照れ笑いを浮かべているが、目は早く教えて欲しいと訴えていた。

「……そうだね」と言ってから、スーヴェンはフツと息を吐いた。
「あの家に行つて分かったのは、イアソン・ヴォードがオートマタ職人だつてこと」

「倉庫のおっさんや、小さいおっさんはイアソン・ヴォードが作ったんですよね」

「そう。それから何かの製造法を記した、赤い表紙の国定図書」
「倉庫にあつた本ですね」ハマートが確認するように頷く。

「イアソン・ヴォードはその本に記されているものを作った。正確には、強制されて、だろうね。オヤジに脅されたか、金に釣られたか……とにかくあの倉庫で作ったんだ」

「あ、では一階のガラクタは作業の名残だったのかもですね」

「問題はオヤジがなぜ作らせたか、だね。この本はどう見ても個人の物だよ。それが国定図書館にあつたことは、それなりに重要な内容なわけだ。ギャングのボスが正当な手段を使って、持ち出せるような本じゃない」

「スパイでも雇ったんじゃないですか」

「そんなものを使ってこの本を手に入れて、イアソン・ヴォードに作らせる理由は何だ？　戦争でも起こす気かよ、馬鹿らしい。この

本に書いてある物を欲しがった奴がいて、それをオヤジに依頼した
つてのが、自然な成り行きじゃないかな」

「おお、なんだかギャング映画っぽい展開ですね！」

「映画だったら、依頼主は政治家や革命家だったりするけど、今回はどうなんだろうね」

ふう、とスーヴェンは息を吐く。今度は疲労を溜めた息だった。

「それで、ボスが作らせた物とは、いったい何でしょう？」

「それはね、たぶん……これだよ」

スーヴェンは首を傾げるハマートに手に持つ冊子を見せた。数ページ白紙が続いた最後に、ごちゃごちゃした小さな文字をまとめるように題字が書いてあった。

『アイリスのオートマタ 取扱説明書』

第2幕・7 交差

「舌を噛むから気をつけて」

言ってからエディは、うん？ と考える。アイリスには舌があるのだろうか？

それから、味覚も持っているからあるか、と思い直す。そういえば、話している時になんとなく舌も見えていた。

「うん、だいじょうぶ」とアイリスが返事をする。

エディは頭の中で緩やかな下り坂を思い描いていた。空から、大地へと続く、長い坂道。車輪が停止しない程よい加減を保ちつつ、ブレーキをかける。

前輪が地面に接触する。

石畳を叩いて、小石がぱちんと跳ねた。すうっと滑り込むように後輪も地面に降り立ち、無事に着地した。スピードは下り坂からそのまま移行され、道端の小石を車輪が弾く。周囲の景色も足早に去っていく。

「わあ、すごい。おもしろい！」

アイリスはカゴの中ではしゃいでいた。ヘルメットはしているものの、メリーアンヌに整えてもらった長い髪が、風になびいて乱れていた。

ロックリバーを出発して一時間以上が経っていた。昼下がりの時間は相変わらず日差しが強く、ヒツジのようなもこもこの雲が空を漂い、誕生と消滅を繰り返している。

差出人であるイアソン・ヴォードの家は、ベクターズカンパニー空の駅支社の管轄の一番遠い場所にあった。道すがら午後の配達をしているので、余分に時間がかかっていた。

アイリスは三輪自転車のカゴの中に収まっていた。

本来なら箱ごと差出人へ届けなければならないのだが、彼女を箱に入れて荷物扱いするのは気が引けた。

アイリスを乗せて自転車を走らせるのは危険だったので（昨日事故を起こしていたから尚更だ）、貨物車を他の配達員の運転で出してもらおうと思ったが、それは叶わなかった。

というわけで、仕方なくアイリスだけをカゴに入れて、イアソン・ヴォード宅へ向かっている。

アイリスは配達の間、ずっとカゴの中に入っていたのに、疲れていない様子だった。

自転車のスピードに興奮して、楽しそうに笑っている。一時間以上も。

「楽しい！　ねえエディ、もつと速く速く」

「ダメだよ、危ないから」

「じゃあ、空走って」

「だめだよ。もうすぐ着くから」

アイリスは、自分が生みの親の元へ帰ることを理解していないらしく、ずっと笑っている。それがエディには心苦しかった。

トリティやガットが言っていたように、アイリスは何らかの事情

でイアソン・ヴォードの元から離れなければならないのに、自分は帰そうとしている。それは仕事だから仕方ないけれど、エディには『仕事だから』が自分を正当化する、言い訳のように感じた。

本当にこれでいいのか、取り返しのつかないことが起きるんじゃないか。ずっと思っていたが……本音は、アイリスと少しでも長く一緒にいたかったのかもしれない。

「アイリス」

「なあに？」

呼びかけられ、アイリスは振り向く。エディはただなんとなく、声をかけたただだったので、何、と言われても何もなかったのだが

「……イアソン・ヴォードってどんな人なんだ？」不審に思われる前に、なんとか話題を絞り出す。

アイリスは、ふと、首を傾げてきょとした表情で答えた。

「四十五さいで、どく身なの。それしか知らないの」

「いや、そうじゃなくて……」

人相を訊いたつもりだったけれど、まあいいや、と思って自転車を走らせる。

四十五才、独身、イアソン・ヴォード。オートマタ職人。可愛いアイリスを生み出す人物。名前からして男性だろうが、どんな姿なのかなかなか想像できなかった。職人といえば、ごっこつしたイメージがあるが、果たしてイアソンはどうだろう？

しばらく行くと、前方から自動車がやって来た。以前ハーレーが

自動車雑誌を広げて、いいなあ、と子供のように目を輝かせて話していた自動車だ。

ロックリバーでは自動車が走れるほどの道が無いので、自動車を
知る人は少ないが、地上で生活しているからといって頻繁に自動車を
を見かけるかというと、それも違う。人々の移動手段はブルートロ
ツコや馬車、などの昔ながらの公共交通機関だ。

自動車は高価な物で個人が所有することは難しい。

だから目の前から走ってくる自動車……ガラス越しに見える運転
席と助手席にいる人物が、それほど年配ではないのを見て、エディ
はどこの金持ちかと不思議に思った。

畑と林と、茶色い民家があるだけの田舎にどんな用があつて来て
いるのか。

いずれも、ロクなことではないだろう。借金取りか何かかな。嫌
な予感がしたエディは、変なことに巻き込まれる前にさっさと離れ
ようとペダルに力を入れ、横を通り過ぎようとした。

「やあ、配達員さん。ご苦労様」

自動車は止まり、全開になっていた助手席の窓から声を掛けられ
てしまった。

無視をするわけにもいかず、エディも自転車を止めた。

「若いのに大変だね」

そう言う相手は自分より年上の青年だ。にっこり笑った顔は羨ま
しいくらい的美形だ。雑誌のモデルのようにも思える面立ちだった。

「何か用ですか」

エディの視線は自然と青年の顔に集中する。あまり失礼にならないようにと思っていたら、自分でも驚くほど無愛想な声が出てしまっていた。

いけない、これでは町の配達員さんは失格だ。

「僕たちさ、メニマウントっていう町に行きたいんだけど、道に迷ってしまつてね。行き方知らない？」

はい、とエディは答えた。笑顔、笑顔と心の中で念仏のように唱えながら。

「それならこの道を真つ直ぐ行くと三叉に別れる道があるので、それを右に行くと、途中で看板が出ています。すぐに分かると思います」

「そう？　ありがとう」

青年は笑顔を崩さず礼を言うと、運転席の男（これも若い男で、眼鏡と丸い顔が印象的だ）に目配せする。

自動車は排気ガスを勢いよく吐いて、エディが来た道を行ってしまった。どうやら思い過ぎだったようだ。何事もなくてよかった、とほっとしてペダルに足をかける。

それから二又の道を左に曲がって真つ直ぐ行くと、ようやくイアソン・ヴォードの自宅へ着いた。そこから先の道は無い。森の中の一軒家だ。

「すみませーん、ベクターズカンパニーです。お届け物です」
「いないの？」

何度も扉を叩き、名前を呼んでも、イアソン・ヴォードが出てくる気配はなかった。

二度ベルを鳴らしても、何の反応もない。

「留守みたいだ」

「ねえ、ここはだれのお家なの？」

とアイリスが尋ねてきたので、エディは意外に思った。

「ここはイアソン・ヴォード……アイリスを作った人の家だよ」

だが、アイリスは首を横に振った。

「私は、もつとせまくて箱がいつぱいある所に、いたの。まどから、家がいつぱい見えたの。くらい中で。もつときたなくて、いやな匂いがする場所に」

どういうことだろう。イアソン・ヴォードは、別の場所でアイリスを作ったらしいが、それが意味する事は何であるか、エディには皆目見当もつかなかった。

仕方がないので『不在通知』をポストに入れて、空の駅支社に帰ることにした。

アイリスは自転車に乗って空を走れることがわかって、無邪気に笑っている。

第2幕・8 交差2

それから、しばらく沈黙が漂った。カーオーディオはラジオの電波を拾いきれず、雑音とともにパーソナリティの声を流している。

「ところでスーヴェン」

ハンドルを握り、ハマーは声をかけた。隣で沈黙している幼馴染みの様子が、さつきとは明らかに違う事をその身にじっくり感じながら。

「どうして、あんな嘘をついたのですか」

「特別な意味はないよ。ただね」

スーヴェンは無表情のまま、ちらりとバックミラーを見る。

「不自然に感じただけさ」

つられてハマーもバックミラーを見た。そこには、先にすれ違った配達員が遠ざかっていく姿が映っていた。

「はあ、不自然ですか」

と言いながら、ハマーは首を傾げた。どこにも不自然な点はないように思えたからだ。

もう一度目をやると、配達員の姿はすでに鏡になかった。

気を取り直して、再び声をかける。「……ところでスーヴェン」

「何だよ」冊子を閉じ、単調な景色を眺めているスーヴェンの返事はそつけない。

「次はどこへ行きますか？」

「さあ、どうしようか」スーヴェンはハマートを見向きもしない。

取扱説明書は、二人が考えている以上に、重大な情報をもたらしてくれた。予想外すぎてハマートはブレーキを踏んでしまったほどだ。

それからしばらくの間、二人とも言葉を交わさなかった。スーヴェンは窓に腕を掛け、流れる景色を見ている。

沈黙の中、ハンドルを動かしながらハマートはふと思い出した。小さなイアソンの言葉だ。

『バラバラな事でも行き着く先は一つだ』

『結末を見届ける責任がある』

今からどこへ行こうとも、最後は同じ所にあるのか。

だとすると、自分たちには選択の余地など最初からないのかもしれない。それは、倉庫で鍵を見つけた時点で。

「とりあえず、事務所へ行こうか」

ハマートが横で大人しく、自分の内側で様々なことを考えていると、スーヴェンが声をかけてきた。突然だったので、ハマートは驚いて声が出そうになる。が、なんとかこらえ、いつもの調子で返事をした。

「はい、分かりました」

空の駅支社に帰ってきた頃には太陽も山の陰に隠れ、空が燃えたような茜色を押し出すように、濃紺の夜が東から迫ってきていた。空を彩る星が、ぼつぼつと輝き始めている。

「楽しかった！ もつとのりたいの」

「また次だよ。今日はもう仕事が終わりだから」

自転車を車庫に収めて、エディはアイリスを連れたまま一課のデスクルームに戻ってきた。

届け先が不在の場合は、荷物は保管する決まりになっている。

今回の責任者はエディである。アイリスが自分の手元を離れるまで、荷物を扱った責任者として、責務を全うしなければならない。

エディの気持ちは複雑だった。アイリスはオートマタだから『物』であることに変わりない。が……彼女の持つ感情は、人と同じだ。喜んで、笑う。嫌な表情もする。

動きも自然で、肌の質感は人肌と同じだし、瞳は常に潤んでいる。これが人形だって？

意志を持つ人形なんて有り得ない！ エディはそう強く感じていた。

「おう、帰ったか。あんまり遅えんで皆帰っちゃったぞ」

デスクルームに残っていたのはガットだけだった。

座布団の上で新聞紙を広げていて、年老いた猫というより隠居し

た老人そのものである。

「なんでえ、イアソン・ヴォードは留守だったのか」

「うん。せつかく遠くまで行って来たのに。今日はもう、疲れたよ」

アイリスに隣の席を勧めると、ああ疲れた、と自分も椅子に座った。障害物のない大空を行くのは開放的な気分になれて最高だが、空には空の道があり、またブルートロッコが時折走ってくるので気をつけなければならない。

墜落の危険を冒して走っているので、空を走る時は神経を使う。特に今回は、管轄内とはいえ外れの地域だから距離もあった。

「でも、楽しかったの」

と、アイリスは嬉しそうに言って、エディに寄り添う。エディも拒まずに笑いかけていた。

「……おい」

二人の仲睦まじい姿を見てガットは不安に感じた。いつの間に二人の距離は縮まったのか、昼間とは二人の雰囲気が随分違っていた。デスクに移動し、ガットは言った。

「あんまりアイリスに情を移すんじゃないよ。離れられなくなっちゃうぞ」

「言われなくても、分かっているよ」ガットに指摘され、エディは憚然とした態度で答えた。

「いいや、分かってねえよ。俺はマイクみてえによ、荷物だなんだ

と言つつもりはねえが……アイリスが置かれている状況を考えな。まだそっちの問題が解決してるわけじゃねえんだ、何かあつたら……」

「問題つて、イアソン・ヴォードがアイリスを作った理由？ それともアイリスのこと？ ガットはいつも重要な事は教えてくれないのに、何かある、っていわれてもわからないよ。俺にどうしろっていうんだ」

今までは自分に理由をつけて抑えてきたが、我慢できなかった。口から出てくる言葉を止められなかった。

知っているのに、それを臭わずだけで教えてくれない。突き放される。

何があるのか、どうしたらいいのか……辛いと言うなら、今も辛い。何も選択できないでいるのだから。

エディは自分がいかに腹を立てているかをアピールするように、フイ、と顔を背けた。

「……ふむふむ、そりゃそうだな。悪かったなあ」

ガットは落ち着いた声で言った。

出来の悪い生徒を諭す教師のような、優しい眼差しをエディに向けていた。

「知らねえほうがいいことも、世の中にはあるんでえ。オメーが知っていても、何が出来るってモンでもねえし……勿論、俺にも何にもできやしねえだろうな。だが、ふむ、そう言うなら教えてやってもいいか」

ガットは謝るが、エディは膨れっ面のまま、そっぽを向いていた。

なんだよ今更。

「どこから言ったらいいモンかな。なにしろ難しくて、複雑なことだ。俺もどこまで広がっている話なのか、見当もつかねえんだ。もしかしたら、とか、あるいは、とか、そんなあやふやなことしか言えねえ」

前足で頭を撫でてガットが言いにくそうにするので、エディは少しだけ興味を引かれた。

「ガットでも分からないことがあるのか」

「まあな。オレも万全じゃねえよ。だが、よう……」

ガットが真剣な面持ちになるので、エディもつられて気を引き締めた。これは自分が思っていた以上に大変な事なのだと悟った。ガットがその事実には慎重になっていることも。

ガットの言葉で、エディは冷静を取り戻していた。何もできない、ということは始めから分かっていたことだ。そして、しなければならぬことも。モーゼフからアイリスを預かったときからすでに責務はあり、それは幾度となく確認してきたことだ。アイリスを届けること。それは絶対だ。

「だが、何？」エディは気を引き締めて、問い返した。

「だが、俺は今日はマイクとメリーアンとな、飲みに行く約束をしてんだ。だからもう帰ってえんだ」

すまなそうに苦笑して言うガットに、エディは眉間に皺を寄せる。

「なんだよ、真剣になって損した。やっぱり言うつもりはないんだ」
「いや、教えてえがな、もう時間なんだ。オメーを待ってたからよ。
明日じゃダメか？」

本当に悪いなあ、とガットが繰り返すので、エディは嫌だと言えなかった。

「勝手にしろよ。でも明日は俺、休みなんだよ」

「ああそうか。それならオメーの家に行くか。美味しい饅頭持って行ってやるからよ。昼過ぎに行くからな、そんときに詳しく教えてやらあな」

じゃあな、戸締まりしとけよ。ガットは言い残し、帰って行った。

外はもう暗い。

いつの間にか、デスクルームも夜に包まれている。集配所の音も聞こえてこない。建物全体が休眠に入ったかのようだった。

いつもなら閑寂に心細くなる。

それがないのは、隣にアイリスが居るからだろう。

彼女はいつも笑顔だった。

第2幕・9 息子VS父

サンミラノにある『クラブ・ミサキ』は、極黎会が運営するカジノクラブだ。

スロット、ダイス、ルーレットといった定番の台があり、バーカウンターやら舞台やら定番の造りになっている。

スーヴェンはクラブの正面入り口で降りると、そのままハマートを帰して、裏口へ向かった。

裏口はクラブとは別空間への入り口だ。壁一枚隔てたこちら側では、遊興の華やかさとは対照的に、黒く、暗いものが蠢いている。

狭くて急な階段を上り、突き当たりの扉を開ける。

そこにはブルドッグをさらに不細工にしたような顔をしたカーネル・ゴールが、接客用の黒いソファに座って煙草をふかしていた。応接間も兼ねる事務所は霞んで煙たかった。

「なんだテメエか。何の用だ」カーネルが、酒と煙草と珈琲で潰れた濁声で言う。

心底興味が無いといった様子だった。

おそらく彼は、風が入ってきた程度にしか思っていないのだろう。

「何の用だ、って？ 一番にそう言うのか。倉庫の後片付けをしてやったんだ、ありがとう、くらい言ったらどうなんだ」

「ああ、そうだったか。そんなことも頼んだか？ だが引き受けたのはテメエの勝手だろうが、何で俺が礼を言わねばなんのだ。言

う義理も義務もねえ。小遣いが欲しいなら、そう言え糞ガキ」

相手を押さえつけ、自己の理屈を押し通す頑固な物言い。これが彼の常である。

カーネルの頭の中は、金と、儲け話が、ほとんどを占めているのだ。そして、その中に自己利益のために、己を偽ることへの羞恥心は無かった。

昨晚の狼狽した、卑屈で、哀れで、追いつめられたネズミのような目も、平気で演じられる。相手の内面をくすぐり、刺激し、天秤を自分側に傾かせることは悪辣商売には最適だ。

スーヴェンはそのことを、すっかり忘れていたのだ。

不覚にもその垣間見た情に流されたことを、深く後悔した。

そして血が繋がっている事実を恥じ、恨んだ。

「金の話じゃない。僕が何をしても勝手と同じにね、アンタが何をしようと勝手だ。でもこれだけは聞きたい。アンタはいつたい何を企んでいるんだ？」

そう強く言って……圧服に逆らうように、手にした白紙の冊子を見せつける。

「そいつは何だ？」カーネルが興味を示し、冊子を手に取った。はらはらと捲る。

「なんだ、白紙じゃねえか。ふざけてんのか」

「最後のページだ」

ふん、と鼻から白い息を吐き出して、カーネルは最後のページを

見る。すると顔色が青くなり、次に赤くなった。器用なことをするもんだ、とスーヴェンは心の内で呟く。

「こいつをどこで見つけた？」

カーネルがスーヴェンを睨んできたので、スーヴェンも睨み返す。

「……その前に僕の質問に答える。アイリスを作って何をしようとしているんだ？ それを読む限り、『アイリス』があると世の中が劇的に変化する。まさか世界征服でもしようってんじゃないだろう？」

「ケツの青い糞ガキが、知った風な口をきくんじゃねえ。ろくすっぽ事務所にも顔を出さなかった野郎が、偉そうに言うんじゃないよ。テメエが俺に意見を言うときはな、その反抗的な態度をなくしてからだ」

「うるさいな。あんたが言わないのなら、僕もそれをどこで見つけたのか言わないよ」

スーヴェンは退かなかった。

しばらくの沈黙の間、二つの鋭い眼光が対立し、部屋の中を潰れてしまうような重厚な空気を作り出していた。

何もかもが形も残さず、潰れてしまう前に、先に口を開いたのはカーネルだった。

「いいだろう、教えてやる。テメエがこれをどこで手に入れたのかも聞かないでやろう。その代わり、俺の今から言う仕事をしろ。報酬も出してやる。取引だ」

それまでとは正反対にも思える言いように（少しだけ口調も和らいでいる）スーヴェンは不審を抱いた。

またなにか、良くないことを思いついたに違いない。

スーヴェンは疑いの眼差しでカーネルを見る。彼はにまりと笑みを浮かべているだけだった。スーヴェンの中で、さまざまな思いが交錯する。

行き着いた先の結末を。

見届ける責任。鍵。本。

己の内に潜む正義は？

「……。」

硬く結んでいた眉間の皺を解くと、スーヴェンは、いいよ、とだけ答えた。

それ以外には何も言わなかった。

カーネルは満足そうに声を出さずに、笑った。半殺しにした獲物を見て楽しむかのような、いやらしい笑い方だった。スーヴェンは嫌悪感を抱く。

「俺がアイリスを作ったのは、金のためだ。それ以外に何もねえよ」
「確かに、あんたにとってアイリスは金以外の魅力はないだろうね。アイソンとはどこで知り合った？ オートマタ職人が、わざわざあんたに売り込みに来たわけじゃないだろ」

「奴あ、ただの飲んだくれの借金野郎だ。売り込みには来なかったが、製造を持ちかけてきた。アイリスも、それをどこに売ればいいのかも、全部提案してきた。それで借金をチャラにしろ、とな。イ

カレ野郎だな」

「それで、殺したのは……アイリスをどこかへやったからか」

「まあ、そんなところだ」

カーネルは苛々しながら、短くなつた煙草を灰皿に乱暴に押し付けた。

「俺がテメエに言う事は一つ、鍵を捜す事だ。訊かれる前に言っておくが、その鍵は『アイリス』の鍵だ。手違いで紛失したのを、トムに捜させている。テメエはトムと一緒に、鍵を探してここに持ってきてい。それだけでいい」

言い終わると、カーネルは新しい煙草を缶から取り出し、口にくわえて火をつけた。満足そうに大量の煙を吐き出し、部屋は一層白く濃くなる。

「……オートマタを作るために金を出した奴がいるはずだ。それに、買い手も。そいつは誰だ？」

「そこまで言う義理はねえよ、ボケ」

そう言うときカーネルは無関心な顔つきになり、手元の冊子をじっくり読み始めた。スーヴェンのことはすでに意識の外に出てしまい、無色透明になつてしまつていた。

それ以上話す様子は無く、零れる笑みからは、自分の策が順調であることを喜んでいるようだった。

スーヴェンは不快な思いに襲われながら……面倒臭さなどとうに忘れ、深淵のような、心の底から聴こえてきた声に耳を傾けていた。

『劇的な変化を。結末を、共に』

第3幕・1 朝日浴びて、ベッドの中

ふと目覚めると、
目の前に女の子。
灰色の丸い瞳が、
向けられている。
……目が合った。

「わあああああ……」

あああああ

本来、荷物の持ち帰りは厳禁である。
しかし、アイリスの場合は例外かな、とエディは勝手に判断した。
知られれば、たとえ般若顔じゃない課長だったとしても、叱られるだろう、なぜなら規定違反だからだ。

しかし、自分がいない間に一課にイアソン・ヴォードから荷物引き取りの連絡が入っても、何とかなるだろう、と楽観的に考えていた。

どうしてそう考えたのか、エディはわからなかった。
とにかく、大丈夫だと思ったのだ。

それなのに、すっかり忘れていたのである。

アイリスが、なぜエディの隣で眠っていたのか（そもそも眠るのかも不明だが）、慌てたエディは布団を投げ出してベッドの端に逃げた。

そして我に返り、次の瞬間には両手で顔を覆う。

「アイリス！ 服はどうしたんだ」

アイリスはニコニコ笑っている。

が、彼女は下着姿だった。華奢な手足が丸見えである。

「おはよう、エディ」

アイリスは何事もないように体を起こし、挨拶をする。

「服はね、しわになるから、ぬいだの」

皺になるから服を脱いだ、だって？ そんなことまで考える人形なのか！

「早く着ろ、アイリス！」

エディは手の下の顔が熱くなるのを感じていた。一瞬見えた、アイリスの白くて張りのある、玉のような美しい肌が目に焼き付いていた。

人形相手になにを恥ずかしがっているんだ、と自分に言い聞かせる。

ああ、でもなんてことだ。それでも、人形にしてはリアル過ぎるじゃないか。

アイリスは、はい、と返事をする、エディの心中もよそののろと動きだした。

そこへやってきたのは、エプロンを着たトリティだった。

「大きな声出して、また怖い夢でも見たの・・・」

トリティの視線が、エディから下着姿のアイリスに向けられ……捕らえ所のない妙な空気が流れ、沈殿していく。

その一瞬の間に、エディの頭の中では思考がどたばたと駆け巡った。

緊急事態に司令室は混乱に陥っていて、言い訳すらもまともに出てこなかった。同時に、警戒警報がわんわん鳴り始めていた。このままリアクションをとらなければ、増々気まづくなる！

一方、トリティはトリティで、困惑していた。

漫画のような光景が実際に目の前に起きた驚きと、いざこざいう場面に出くわして何と声をかけていいのやら、口を半開きにして複雑な気分だった。

見なかった振りをして扉を閉めるべき？

それともユーモアな姉を演じてサツと去る？

普段の調子で声をかける？

とにかく凝りが残らないように。思春期の弟を刺激しないように、言葉を。慎重に選んで……。

「……ご飯は？」ああ、なんて気の利かない言葉なんだろう！

慎重になって出てきた言葉のいたらなさに、トリティは少しだけ自己嫌悪に陥った。

「え？ ご飯？」

エディはハツとして聞き返す。すると、横から眼を輝かせたアイリスが（下着のままで）嬉しそうにトリティに駆け寄った。まるで子犬がまとわりつくように。

「ごはん、たべたいの」

「え？ アイリスちゃんも食べるの？」

「はい、たべるの」

「あ、そうなんだ」

不意を突かれたかのような間の抜けた表情で、トリティはアイリスに視線を向けた。

「それなら居間に行つて。準備してあげるから」

「わあい、ごはんごはん」

「……。」

アイリスは下着のまま、無邪気にトリティの脇を抜けていった。その姿を姉弟は呆然と見ていたが、それまでの妙な空気は消え去っていた。ほう、とエディは息を吐くと、一緒に体から力が抜けていった。

それはトリティも同じで、ふう、と息を吐いた。

「エディ、もう仕事に行くから、後片付けはしといてね」

丁寧に折り置まれたアイリスの服を手にとって、部屋の扉を閉める前に付け加える。

「あんだ、もうちょっと男になりなよ」

部屋にはエディと共に平静が取り残された。小さな混乱の中にあつても時計は変わらずかちかちと仕事をしている。

窓の外では鳥がアホウと鳴いていた。

第3幕・2 いざ、ロックリバーへ

えー ブルートロッコ 八時三十分発 ロックリバー行き
発車いたします

えー 駆け込み乗車は大変危険ですので お止めください
発車いたします

車掌独特の、鼻に綿が詰まったような声がホームに響き渡ると、
かあん、と鐘が鳴って降車係が扉を閉めた。青い線が入ったブルー
トロッコは、ゆっくりと走り出す。

ブルートロッコは東北地域一帯の交通を担うトロッコ列車だが、
行き先によって車両の数と本数に大きな差がある。

八時三十分の時点でサンミラノ発ロックリバー行きは、客車部分
が二両と貨物部分が一両の計三両での運行だが（多い時間帯では七
両に増える）両手で数えられるほどの客しかいなかった。

その中にはスーヴェンとハマー、それにトムの他にカーネルの
手先数人が入っている。

それぞれ好きな席を陣取っていた。スーヴェンとハマーは一両
目の最前列に座っている。

運転席の真後ろで、目の前に迫る風景が楽しめる特等席だ。
しかし二人は景色などそっちのけでばそぼそと話している。

「……では、スーヴェンは鍵を捜す事にしたんですね」

「ここまできると引き下がれないっていうか。でも君も来ることは
なかったんだよ」

「気遣ってくれるんですか？　大丈夫です、ボクは何があっても平気ですから」

答えるハマートは笑顔だった。それを見たスーヴェンは、頼りなさを感じた。

「でもスーヴェン、昨日イアソンの家で見つけた鍵を、ボスに報告しなかったんですか？」

「何でもかんでも報告する必要はないよ」

言いながら、スーヴェンはジャケットの内ポケットの中の鍵を取り出した。

「説明書には『起動の際には鍵を差し込む』と書いてあったけれど、この鍵は巻くか、回すかする鍵だ。だから起動の鍵とは違うと思うたんだ」

「おお、なるほど」

「……そういえば停止の詳しい手順は書いてなかったな。『差し込んだ鍵を回す』とだけだ。もしかしたら、これは停止のための鍵かもしれない。……それと、これ」

「伝票ですね」

ハマートは伝票に穴をあけるように、じっくり見つめた。

「伝票の受け取り印は一週間前になっている。『アイリス』を制作している最中か、終わった後か。どっちにしろ『アイリス』に関する物を送ったんだろう。荷物の欄にも『付属品で本体』と書いてある。僕の考えでは、それがオヤジが捜している物だ」

鍵は太陽に当たり、鋭い光を反射していた。ハマートが、ほうほ

う、と頷きながら、

「ということは、今からモーゼフという人の所へ行つて、確かめるわけですね？……でも住所がロッキンバーじゃないですよ？」

「僕の考えと計算がうまくいっていれば、荷物はロッキンバーにある」

「ええ？　どういふことですか？」

「声がでかいよ」

裏返った声を出すハマーに、スーヴェンは辺りを気にしながら、静かに、という仕草をする。そして自らも声をひそめてハマーに言った。

「簡単に説明してやるよ。僕が怪しいと思った点は、伝票に記された荷物の大きさだ」

「大きさ？　ああ、書いてありますね。……縦六十センチ、横百センチ、深さ八十センチ？　結構大きい鍵なんです」

「そう、鍵だというから僕も君も、このネジ巻きの鍵や家鍵くらいの大きさかと思っていたけど、鍵といたって小さいとは限らないんだ。それから、僕たちがイアソンの家から帰るときに擦れ違った配達員」

「はい。カワイイ女の子も一緒に、変わった自転車に乗っていましたね。……まさか」

「……証拠はないけど」スーヴェンは彼が察知したことを感じ取り、にやりと笑う。

「デート中でしたかね？　ボクたち野暮ったいことしちゃったんでしょうか」

「違うつつの」

鈍い音がして、スーヴェンの拳がハマーの頬にめり込んだ。

「制服を着ていたんだから勤務中だよ。僕があるとき不自然だと言ったのは、それなんだよ。配達員が女の子をカゴに乗せてデートなんかするか？ 百歩譲ってデートだとしても、女の子をカゴに乗せるって、どんな奴だよ。僕はそんな奴を男として認めないね。」

その配達員は僕たちと擦れ違ったあと、イアソンの家に向かったんだ。配達員なんだから荷物を配達しに行ったんだろうけど、何を配達したんだ？ 僕はあの女の子じゃないかと思うね。イアソンはオートマタ職人だ、女の子が人形だって事は有り得るよ。荷物としてイアソンに送り返されたんだ」

「おお、なるほど」ハマーは大袈裟に相槌を打つ。見事な推理ですな、と感心した。

「イアソンの家に誰も居ないのを僕たちが確認しただろ？ 大きな荷物は、受取人が不在の場合は不在通知を残して、集配所に保管されるんだ。あの子たちはあれから集配所に戻っているよ。配達員が乗っていた、空を走る変わった型の自転車は有名だからね。……ここまで言えばわかるだろ？ ロックリバーへ行く理由が」

「おお、なるほど」とハマーは繰り返し相槌を打った。「見事な推理です」

説明をし終わったスーヴェンは、ふうつと息を整える。

それからふとハマーが顔を向け、でも、と真剣な顔をした。

「でも、スーヴェン。その女の子が、普通の女の子だったらどうします？」

「どうもしないさ。そのときは、別の場所を見つければいいよ」
「はあ、そうですか」

ハマーがお決まりの間延びした返事をするので、スーヴェンは、あんまり解っていないな、と今度は溜め息を吐いた。

第3幕・3 オルゴールの歌

配達員に一般に出回っているカレンダーは、日付と曜日を確認するだけのもので、休日か、平日かの区別は関係ない。なぜなら、配達は年中無休だからである。

彼らの休日は順番にやってくる。だから、カレンダーは平日でもエディは休日なのである。

着替えると開放感に包まれた。

制服の縛られているような、窮屈な感覚は苦手だった。

外に出たエディは配達員ではなく観光案内役になっていた。相手は勿論、アイリスである。

朝食後、彼女は外に行きたいとせがんだ。一瞬、逃避行でも考えたのかと勘ぐったが、そうではなかった。どうやら、朝食だけでは食欲が満たされなかったらしい。

食事する人形なんて人形じゃない、とエディは改めて思い、不思議な感覚に襲われたが、とにかく彼女を連れてアゼリア通りの裏にある食品市場に来ていた。

市場は商売人の声が飛び交い、活気と熱気に満ち溢れている。さまざまな食品の臭いが混ざり合い独特の臭気が籠っている。人々の

生々しい生活の匂いがそこにある。

「ねえ、エディ。あれは何？ あれがたべたい」

「え？ ソーセージ？」まだ食べるのか？ エディは呆氣にとられてアイリスを見た。

アイリスが立ち止まった店はこれで二十軒目だった。見掛けによらず大食漢のアイリスを最初は可愛らしくも感じていたが、ここまですると呆れるしかない。それに……

「はいよ、ソーセージ一つね、お嬢さん！ 可愛いからもう一本オマケしちゃうよ」

「わあ、ありがとう！」

焼きたてのソーセージを頬張るアイリスの姿を、誰もが注目していた。アゼリア通りを歩いているときから、すでに彼女の美貌は老若男女問わず、視線を集めていた。

「エディにも、一つあげる」

はい、とアイリスはオマケのソーセージをエディに渡すと、一斉に視線がエディに集中する。あれは誰だ、どういう関係なんだ、どこから連れてきたんだ……そういう疑心と羨望に満ちた刺々しい視線だった。特に男からの視線が痛い。

「すごくおいしい！」

と、アイリスが笑いかけてくる。そのとたん、視線が矢のようにエディに突き刺さる。

「……アイリス、別の所に行く？」

「エディが連れて行ってくれるなら、どこでも行く」

口元にケチャップを付けたまま可愛い事を言うアイリスに、エディの心に大輪の花が咲く。

と、同時に花を枯らす毒々しい視線が雨霞と降り注いだ。

逃げるように市場を出たエディは、次にどこへ行こうかと考えた末に、礼拝堂前の広場を選んだ。

礼拝堂は歴史的価値の高い建築物で、長年の風雨によってくすんだ外壁は、歴史を静かに語っている。その場を包む空気は、街中にある躍動や生活感の生々しさではなく、威風堂々とした厳格なものだ。

だが、ほとんどの人々が建物の価値など知らないの（エディも勿論知らない）古くさい建物より、広場から望める景色を楽しむに来る。

眼下に広がる街並と、街を囲む雲海、そして果てしなく続く空は美しく壮大だ。

「うわー、すごい」

アイリスも感激している。

「夕方も綺麗だよ。でも、昼間のほうが遠くまで見えるから、俺は好きなんだ」

「うん、広いのが、きれい」

雲の隙間から大地が覗いており、山や丘の起伏が実際よりもなだらかだ。地平線は霞んでいて、青空との境目がはっきりせず、吸い込まれていく感覚に陥る。昼間にこの場所に来ると、大地は本当に広いのだと、エディはしみじみ感じるのだ。

「ねえ、ヘンなのが走ってるよ」

アイリスが指差す。短い針金がひよろひよろ飛んでいるようだったが、空を走るブルートロッコだった。ロッキリバーに向かってきている。

「ブルートロッコ？」

「ここからだ、南のサンミラノか、西のルランツェ行きが出てるよ。あれに乗って、遠くにいけるんだ、時間はともかかるけれど」
「そうなんだ。とおくに行けるんだ」

アイリスは遙か彼方に想いを馳せるように、寂しそうな、悲しそうな表情を浮かべた。本来の目的、『誰かから逃げる』ことを思い出したのだろうか、エディはドキリとする。

彼女が誰かから逃げるのは、本能みたいなものだ。そういうふうに作られている。

自分は、彼女を送り主に届けなければならない。仕事だからだ。

これは、同時に叶うことではない。矛盾している。

情けないことに、エディにはその矛盾を解決する方法がわからない。

優先しなければならないのは何だろうか？

アイリスの安全、配達義務……

仕事を全うすることが、本当に正しい事なのだろうか。

自分は彼女と仕事、どちらを選択するのか、どちらを選択しなければならいのか。

そこまで考えて、なんだかよくある恋愛小説みたいだな、とエディは思った。それも、自分よりはもう少し年上の男女によくある情景のような。

しかし、今まで恋愛には縁のなかったエディである。

「ま・そのときに選べばいいかな」

考えるのが億劫になって、ぼつりと呟いた。

あれこれ頭を悩ませたって、仕方がない。もし窮地に陥るようなことになったら、ガットに頼もう。彼は子羊を導く羊飼いの如く、エディに的確な助言をしてくれるのだ。

「ねえ、エディ」それまで景色を眺めていたアイリスが、不意に振り向いて微笑んだ。

「すごく楽しかったの。おいしい食べものも、たくさんたべさせてもらったの」

「うん」

突然アイリスが、それまでとは違い落ち着いた様子で言うので、エディの心臓が高鳴った。

なんだ、もう窮地か？ どうしよう、ガットがないのに。

「ありがとう」

「うん」無理矢理笑顔を作って言う。

「お礼に、いいこととしてあげるって、思ったの」

「え？」

言うなり、アイリスは左目に指をねじ込み、目玉を抉り出した。彼女が人形だと分かっているにも、人形だと感じさせない動きだ。美少女が自らの手で、寸分の迷いも無く目玉を取り出す光景はどこか歪んでいて、現実離れしている。いや、アイリスの存在そのものが現実離れしているのだが。

アイリスの手には、人間と同じ形のとおりと光る目玉がある。彼女の顔には虚ろな穴が空いていた。それからどうするのだろうか、と見ていると、今度は後頭部を軽く叩いた。すると、中からぽとりと出てきた。

地面に落ちる前にアイリスはそれを受け止めた。

「それは？」

ゼンマイを巻く鍵のようだった。『T』型で、先端に突起が二つ。ゼンマイを巻くためのものにしては、変わった形だ。

アイリスは目玉を擦じ込んで元に戻すと、それをエディに手渡した。そして背を向けると、長い髪をかき分けてうなじを露出させた。真っ白な綺麗なうなじだが、真ん中に二つ並んで穴が空いている。小さな穴だ。それを指差しながら、彼女は言った。

「ここに、かぎを入れて回すの。右回りに」

「何かあるのか？」

「ふふ、お楽しみ」

初めて触れる女の子のうなじに緊張しつつ、エディは言われるままに、鍵を穴に刺して回した。かちかちという歯車が回る音がする。中に何が内蔵されているのだろうか。彼女が何を見せてくれるのか

楽しみだった。

「もういいよ」

と言われたので、手を止めて鍵を外した。

アイリスはスカートの裾をひらりと翻し、エディに向き直ると、得意げに笑みを浮かべた。

「これは、エディだから、ナイショで見せるの」

すうつと姿勢を正したアイリスは、目を閉じ、腕を少しだけ広げると、ゆっくりと唇を開けた。すると……

タン タンタン タン タンタンタン

アイリスが歌っている。

だが声ではなく、金属が弾く軽やかで澄んだ音だ。歌うというより、奏でる、というようだ。アイリスの体内から響いてくるのが奇妙だった。

メロディはどこか切なく哀愁が漂っている。太陽が燦々と照る昼間なのに、まるで夕暮れの寂しさの中にいるようだ。太陽の時間と、月の時間に挟まれた、どちらともない夕方の一時の儚さが、その音に込められている。

アイリスが奏でる音に心を奪われた。音が体中に響きわたった。同じ曲が三巡して、四巡目に入ると徐々にスピードが緩くなっている。音と音の間隔が開き、五巡目を前にとうとう止まってしまった。拍手をするのも忘れて、ほう、とエディは感嘆の溜め息を吐いた。音楽で感動したのは初めてだった。

「オルゴールなの。とてもいい音でしょ」

アイリスははにかんだ笑みで、エディを見つめてきた。

アイリスが歌っていると思ったのは、オルゴールの音だったのだ。エディは妙に納得し、それからガットの言葉を思い出して二度納得した。オートマタは元々、オルゴールに付随していた人形だった。それでアイリスにもオルゴールが入っているのか。

「うん、すごい。それにいい曲だね」言葉が見つからず、そんな感想しか出てこない。「なんて言う曲？」

「『私の好きな歌』っていうの」

泣きたくなくなるようなメロディに『私の好きな歌』と名付けるとは、イアソン・ヴォードという人は教養がある人物のようだ。職人というより、芸術家に近いのかも知れない。白いヒゲが生えているのだろう、と勝手に想像した。

「きれいでしょ」

「うん。綺麗だよ」

その言葉がアイリスに言ったものか、メロディに言ったものかはエディ自身、判然としなかったが、心から出た言葉だったことだけは確かだった。

そのとき、遠くから空の駅支社の昼休みを告げる正午鐘の音が、微かに聞こえてきた。

第3幕・4 空の上の町

えー 空の駅 終着駅でございます 忘れ物のないようご注意ください

えー 大変危険ですので 列車が完全に停止してから お降りください

「うわあ、すごいですねえスーヴェン！ 空の上ですよ、雲の上ですよ！」

駅から出たハマートは、雲の上の街にしきりに感動していた。観光客になっている。

ロックリバーはブルートロッコで三時間以上もかけなければ辿り着かない、近くて遠い街である。スーヴェンもハマートもこれが初めての訪問だった。

大地に足をつけて暮らすスーヴェンにも、いつも眺めていた空に降り立つというのは新鮮な感覚だった。

駅を出ると、そこに広がるのは古い石畳の道と、延々と続く空。雲は子供が作った砂山のように、盛り上がっている。初めて見る上空の世界は、一瞬すべてを忘れてしまうほどの驚きだった。静かに、おお、と声をあげた。

それでもスーヴェンは冷静だった。感動もそこそこに、頭を働かせる。

「さて、これからどうしようかな……」

目当てのベクターズカンパニー空の駅支社はすぐそこにあるが、

名前も知らない配達員を、どうやって呼び出そうか考える。素性を明かさずに会う事はできないだろうか？

「これから、どう行動するつもりですか？」

側に寄ってきたのは、頭頂部に反射する太陽が眩しい坊主頭の大男、トムだった。主人のために忠義を尽くす、ドーベルマンのような性格の男だ（ただし姿はまったく似てない）。

勿論スーヴェンはそのことを承知していたし、カーネルの意図するところ……反発心を抱いているから、鍵を見つけても素直に渡さないだろう、そのときはトムに横取りさせてしまおう……という姑息な考えも見抜いていたから、

「そうだね。君とは別に、僕は情報を少しだけ持っているんだよ」
見せかけだけでもトムを信用している振りをする。

「ここにモーゼフ・ペイターズというイアソン・ヴォードの知り合いがいるんだ。そいつなら何か知っているかもしれない。モーゼフを探すんだ」

スーヴェンはトムと共に搜索をする気など微塵も無かった。でたらめを言ってトムとその他三人を追い払う。少しでもカーネルの空気を纏う者を遠ざけたかった。

それからベクターズカンパニー空の駅支社に向かって、歩き出した。

空の駅支社のお客様相談窓口「あおの窓口」は、朝から夕まで並

ぶ人が途切れた事はない。

小さな礼から大きな文句まで（どう考えても苦情が多い）取り扱うので、窓口嬢エミリのポケットには胃薬が常備してあり、今日も朝から胃に穴が空く寸前だった。

「次の方どうぞ！」

あと三十分もすれば待望の昼休みだ。それまで持ち堪えてよと自分の胃に願いつつ、エミリは声を張り上げ客を呼ぶ。来たのは目も覚めるようないい男だった。

「どうされましたか？」

荒んだ心が洗われる思いで対応しつつ、エミリは青年を鑑定する。この客は苦情なのか注文なのか。でも見れば見るほどいい男だこと。「配達員に会いたいんだ」見た目彼女より年下の青年は、優しくそう言った。

文句でも礼でもなかったので、エミリは少し意外に思った。

「それでは、配達員のお名前をお聞かせ願いますか」

「名前は分からないんだ。栗毛の十代くらいの配達員でね」

と男が言ったので、エミリは思い当たった。今春入社したばかりのトリティの弟の新人配達員。

トリティとそっくりのエディとは、話をしたことはないが見知っている。

「エディ・バートン配達員ですか？」と言うと青年は、ふうん、と

いう顔つきになった。

「そんな名前なんだ？ 会えば分かるんだけどね。前に配達してもらったんだけど、ちょっと手違いがあったから、会いたいんだよ」
「そうですか。では少々お待ちください」

なるほどそういうことか、とエミリは納得しながら、席を離れて配送部一課のデスクルームへと早足で向かった。

眼の保養の続きを早くしたいがために、エミリは急いで窓口に戻ってきた。

「エディ・バートン配達員は、本日は出勤しておりません。お伝えする事があるならお聞き致しますが」

「それじゃ、エディ君の家を教えてほしい」

「申し訳ありませんが、社員の個人的な情報はお教え致しかねます」

エミリが言うと、そうなんだ、と言ってあっさりと帰ってしまった。

それをエミリは不審に感じた。用があるのなら、言付けの一つもありそうなものなのに。

「今の彼は名前を言った？」首を傾げるエミリに、守衛のトリティがそつと尋ねてきた。

「あら、聞くのを忘れちゃった。なんか配達についてのことみたいだけれど、行っちゃったわね。何だったのかしら？ それにしてもいい男だったわあ」

「この辺の人じゃないみたいだね、垢抜けてたもの。メリーアンヌも大喜びするタイプだよ、彼は」と、トリティは笑って言う。

「そうね。ちょっと若いけれど」とエミリも笑う。「今日のお昼を一緒にどう？　メリーアンヌに今の事を自慢してやりたいわ」
「いいね。たまには外で三人で食べようか」

それじゃ後で、とトリティが持ち場に戻ると、エミリは少しだけ気分を持ち直し、次の方どうぞ、と声を出した。

戻ってくると駅前で遊んでいたハマートが、嬉しそうな顔をして寄って来た。

「行商のおじちゃんから聞いていたんです。今、街では結構な噂になってるようですよ、見慣れない綺麗な女の子がいるって。女の子と男の子が、デートしてたと言っていました」

ハマートの手には、食べ物が沢山乗っていた。

そうか、二人は外に出ているのか。スーヴェンは顎に手を当て考えた。それなら容易く見つけられそうだ。女の子の容姿は歩こうが座ろうがかなり目立つ。町中を行けば必ず人目につく。現に行商人も覚えていたし、噂にもなっているという。

「礼拝堂へ行ったようですよ。仲がいいんですね。羨ましいですね
！」

羨むハマートは放っておいて。礼拝堂か、とスーヴェンは民家が並ぶ町を見上げた。

細い路地、階段、急な坂道。煉瓦作りの民家は過去の時代の匂いを残し、大地の町と同じように埃っぽい土の香りがする。

どこかの家で昼食の準備をしているのか、風に乗って芳ばしい香りが漂っていた。

とろとろにとけた長閑な時間が流れていて、体中がそわそわしたきつとスーヴェンの体は、サンミラノのあくせくした時間に慣れてしまっているのだろう。

「良い所ですね、なんだか昼寝をしたくなりますね！ お昼前ですけど！」

観光客と化したハマートは嬉しそうに横を歩いている。関心の無い声で、そうだね、と相槌を打った。

ハマートと二人きり、狭い路地を横に並んで歩いている。いつものことだが、たまには女の子と歩きたいとスーヴェンと思う。

礼拝堂への坂道を進んでいた。

配達員……エディ・バートンとその連れに会いに。彼はスーヴェンが考えた通り、空の駅支社の配達員だった。

次は、女の子がオートマタであるか確認することである。それで半分以上の目的が終了し、先が決まるのだ。

「あ。もうすぐですよ、スーヴェン」ほら、看板があります、とハマートは指を差す。

高い所まできたらしく、振り向けば民家の隙間から眺望が微かに窺えた。上を見れば建物は少なく真っ青な空が広がっている。な

るほど、高台にある礼拝堂はデートには丁度いい場所だ。
次はぜひ、女の子と来よう。

さらに歩くと開けた場所に出た。広くはないが、ベンチがあつて、憩いの場としてそれなりの体面を保っている。右の奥に古びた大きな建物があつた。

礼拝堂である。

その後は藪だ。

緩やかな傾斜が続いているが人が住む場所はそこで行き止まりらしい。左側には柵があり、天空の街並を一望できるようになっている。

そして……

「あ！ スーヴェン、あれは」

スーヴェンはハマートが声をあげる寸前で頬を殴り、無理矢理黙らせる。路地からその光景を黙って見た。

少女と少年。話し合い、嬉しそうに笑う二人。
そして…… 謡う少女。

スーヴェンは笑った。

「どうですか、スーヴェン」
「うん、そうだね」

謡い終わった少女は幸せそうな顔をしていた。
その表情は満開の桜のように華やかで、近くに寄ったら甘い香り

がしそうだ。少女と周囲の空気だけが淡い桃色をしている。エディ少年も少女に染められているのが、離れた場所からでもよく分かった。

「可愛いですねえ、羨ましいですね、あんな女の子と一緒になんて」「馬鹿か、君もあの女の子の色香に毒された？ あれは作り物だよ」「ええっ……それじゃ、あの子はかなりの悪女ってことですか！？」

素っ頓狂な声を出すハマーを無視して、スーヴェンは歩き出した。ハマーも慌てて後を追う。

最初に、少女と目が合った。次に、振り向いた少年を見た。

「やあ、こんにちは」

声をかけると同時に、どこからか鐘の音が聞こえてきた。

第3幕・5 全力少年

ふとアイリスが視線を逸らしたので、エディは何事だろうと訝しんだ。彼女は自分越しに何かを見ている。察して振り返ると、二人の男が歩いてきていた。

右側の男……皮のジャケットに黒いパンツというシンプルだがよく似合っている、二十代の青年。

左側の男は初めて見る。地味な色合いの服で大きな眼鏡をかけていて、老けた印象があるがよく見れば右の青年と同じくらいの若さだ。

二人とも土地の者ではないことは一目で気付いた。

こざっぱりとした服装や雰囲気は、周囲の空気と馴染んでおらず、風景画に人物の写真を貼付けたような違和感があった。

アイリスが、ずっと背後に隠れるように移動した。ちらりと見ると、表情が硬い。

「やあ、こんにちは」

青年が親しみの笑顔で挨拶をしてくるものだから、エディも思わず「どうもお久しぶりです」と挨拶を返しそうになるが、よく考えればどこの誰とも記憶に無い人物だった。

「また会ったね。昨日はどうもありがとう」

青年は続けて言うのでエディは記憶の糸を手繰る。昨日何かあっただろうか？

昨日は……朝からみんなが慌ただしかった。

遅刻をして、配達して。

アイリスに会って、配達して。

帰ったら日が暮れて。

呆気なく一日が終わってしまったので、具体的に思い出そうとしても夢のようにぼんやりしている。

昨日はどうも、と言われてもエディはすぐに思い出せず、礼を言われて言葉に詰まった。

「えっと、あの……寝具店の若旦那さんですか。今日はお店は休みなんですか？」

当てずっぽうで言ってみたら、やはり大ハズレだったらしい。青年は露骨に嫌そうな顔をした。

しまった、間違えてしまった。ではアンメル金具店のお嬢さんだったろうか。エディは頭の引き出しを引っくり返して記憶を探るが、錯綜するだけで増々混乱した。

「違うよ、昨日は道を教えてくれたよね」

苦笑しつつ青年が説明するので、エディはやっと思ひ出す事があった。

「ああ、あの……」イアソン・ヴォードの家に行く途中で出会い、道を教えた。あの人たちか。あのときも笑顔だったな。

「そうそう。思い出した?」

青年はにっこり笑う。隣の眼鏡は青年の一步後ろにいて、愛想はいいが喋る気配はない。

エディから見ても青年は男前で、柔和な印象があつたが、笑顔を真正面から受け取れないのはアイリスが自分から離れようとしなからだろう。自分の背中で小さく体を縮めている。

美しい花は萎んで、開こうとしないのだ。

「……知っているのか?」エディは小さな声でアイリスに訊いた。

「知らない人たち。でも、そばに。すぐそこに。風のすきまから出てきたの」

首を振りながら、アイリスは答えた……しかしエディには彼女の意図するものが理解できなかった。何を言っているのだろうか? でも、支離滅裂なことを言っているようにも思えない。

アイリスは二人を見て怯えている。それだけは確かだ。

「何か用ですか」エディはアイリスを庇いつつ、警戒心を強めて尋ねた。

「そう、用があるんだよね、僕たちは。でもそれを説明すると、とても長くなるんだ」

青年は顎に手を当て、言葉を探っている様子だった。

「どこから説明すればいいのかな。僕たちが用があるのは、後ろの女の子」

「アイリスに?」

「アイリス……そうか、アイリスか。うん、アイリスちゃんに確かめたいことがあって」青年は勝手に納得しながら、アイリスに近づく。

その一歩が。アイリスには大きなものだった。

あああああっ

耳をつんざく鋭い絶叫を、アイリスが発したのである。それは声というより音で、頭を激しく揺さぶるような高音だ。反射的に耳を塞いでも、音は脳を刺激する。

「え？ アイリス？」

吐き気に襲われながらも、エディは何とか声をかけた。

アイリスはエディの声に反応し音を止める。しかし見開かれた瞳の焦点はずれており、どこをも見ていない様子だった。

そして……素早い動きでエディの手を振り払うと、公園の柵に飛び乗った。花のように美しい少女は、エディの手に捕らえられることなく、空へとその身を投げ出したのである。

「アイリス！」エディは叫ぶ。

長い髪はまるで翼のように。

少女は軽い身のこなしで民家の屋根に着地をすると、屋根伝いに駆けて行った。

思いもしない彼女の行動は、エディの理解を越えていて、彼は果然とその姿を見ていた。家と家の隙間に消えていく、その姿を。その後ろで、声がしている。

「あれっ、あの光る頭はトムの兄貴じゃないですか？ スーヴェン」
「ああ、本当だ。運がいいのか悪いのか……嫌な場面で出てくるね」

苛立たし気な青年の声。

その意味を意識して頭に刻む前に、エディは胸倉を掴まれ体を揺さぶられ、動きを止めていたエディの脳は叩き起こされた。

「何をしているんだ、君は！ 先に見つけないと、人形を横取りされるよ！」青年が言う。

人形？

「そうだ。君はアイリスを、ただのママゴト人形だと思ってるんじゃないだろうな！」

青年は乱暴にエディを離すと、

「ハマート、行こう」

「はいっ」

眼鏡の青年の名を呼んでアイリスを追って走って行く。

二人の姿も広場からなくなって、ようやくエディは走り出していた。

わけが分からなかった。あの青年たちは何者なのか、アイリスはどうしてしまったのか。何が起きたのか。分からないことだらけだ。確実に言えることが一つもなかった。

「アイリス！」

名を呼ぶが、返事が戻ってくるはずもなく。別れ道に来ては立ち止まる。どちらへ行っただろう？ あの子の姿もない。耳を澄まして声も聞こえない。

ああ、本当に。俺は何をしていたんだろう！

午後からガットがアイリスについて、ただならぬ事情を話してくれる約束だった。つまり、アイリスにはただならぬ秘密があるということ。

それほど重大な、エディの考えも及ばない重要な、アイリスという秘密を追う二人組。

アイソン・ヴォードが、遠くへ逃げると言った理由。

頭の中で、それらが組合うそばから崩れて行く。
足下に落ちたピースを拾っても、破片はうまく合わさってくれない。

エディは坂道を駆け下りる。

肩を揺らして息をしても、苦しさに追いつかなかった。

肺から出てくるゼイゼイという音が、やけに大きく聞こえた。

空を仰ぎ見た。

深く、濃く、果てのない青。

心が吸い込まれそうになって、目を閉じた。

一瞬、アイリスのことも二人組のことも、ガットのことも……何もかもが、青に染められて頭の中から消えた。

すっと息を整え、目を開く。

その瞳に強い光が宿っている。決意に満ちた、勇ましい光だった。

とにかくアイリスを捜し出し、家に連れて帰ることだ。ガットも来てくれるんだ、そうすれば何とかなる。前を見据えたエディは、よし、と気合いを入れて体を起こした。

その拍子に、上着のポケットから何かが落ちて、ちん、と音をたてた。

見ると、それはアイリスのオルゴールの鍵だった。

第3幕・6 前進

スーヴェンは黙って歩いていて、彼がトムに対して燃えるような怒りを覚えていることを、ハマートはよく分かっていた。静かに怒りを鎮めようとしていることも。それでも空気を焦がすような緊張に耐えられず、ハマートは口を開いた。

「それにしても、さっきの女の子はすごかったですねー。スーヴェンの顔が怖かったんでしょっか？」

スーヴェンは間を置いて言った。

「そんなわけないだろ。何があったか知らないけど、とにかく彼女こそが『鍵』だよ」
「ボスが捜している鍵ですか？ でも『アイリス』と同じ名前でしたよ」

「付属品なら同じ名前だろうさ。あの場にいたなら、彼女が『鍵』だとトムも気付いただろうね。それにしても何であんなに酷い音を出したのか……」

スーヴェンは顎に手を当て考え始めると、横からハマートが口を挟んだ。

「なんだか、今回は鍵がいっぱい出てきますね。倉庫でもイアソンの家でも」

「鍵……そうか、鍵か」スーヴェンは彼の何気ない言葉に閃いたようだった。

「『停止のための鍵』だ」

「どういうことですか？」

ハマートは尋ねる。

スーヴェンが答えようと口を開いたとき、被さるように、空を切り裂くような、鋭い悲鳴が……今度は本当に、抵抗のための激しく、悲しい悲鳴がした。

「離して！ 離して離して！」

瞳に光が戻ったアイリスが、悲痛な声をあげている。

「アイリスを離せ！」

エディは剣呑な男たちに向かって叫んだ。坊主頭の大男を先頭に、鋭い眼をした二人の体格の良い男たちがエディを睨みつける。

あまりの鋭さに、そのまま刺し殺されてしまうんじゃないか、とエディは男たちが放つ迫力に負けそうになる。

高い壁に囲まれた道ので、一人と三人は対峙していた。

こいつらがアイリスが逃げていた『誰か』なのか？

息を整えながらエディは考える。男たちの側には大きなバッグがあった。持ってきたのか、市場で買ったのか……それにアイリスを入れようとしているとしか思えなかった。

道具のように、彼女を入れるために。

「いやっ！ 離して！ 留まってはダメなの！」

アイリスは激しく抵抗している。
入れ墨をした男が面倒臭そうに、鋭く低い声をエディに放った。

「ガキが首を突っ込むんじゃない。子供は子供らしく、砂場で遊んでろ。面倒臭えな」

「う、うるさい！ あんたたちが何者か知らないけど、大人が犯罪やっていいのか！ あんたのそれは、誘拐だろ」

エディも力を振り絞って言い返す。

「こいつぁ人形だから、窃盗だな」

大男がにやにや笑いながら若い二人に目配せした。

すると二人は顔を見合わせ、刺青の男が鬱陶しそうに顎で合図をする。

金髪の男が嫌そうな顔で、黙ってエディに向かってきた。肩幅は広く手は骨が角張っていて、凶暴な顔つきをしている。

足がすくむ。

喧嘩などしたことがなかった。勢いにまかせて立ってみたが、どうすればいいのかわからない。

男の目が怖かった。

凶器のような手も、口の隙間から見える牙のような歯も、足を鳴らして歩く音も。

男が左腕を突き出し、避ける間もなく首を易々と捕らえ……頭を壁に打ちつけられた。

狭まった気道で息が苦しい。ひゅうひゅうと呼吸の音が漏れる。

「弱っちいなあ。カスすぎて涙が出てくるぜ」

金髪の男が嘲笑うような声で言うと、エディの頬を殴った。鈍い音がして、口の中に鉄錆の味が広がった。

アイリスの悲鳴が聞こえる。男の体の隙間から、彼女の姿を見た。アイリスが。

彼女は突然力を失った。手足はだらりと下がり、首が折れたように上を向く。一瞬見えた彼女の目は見開いて無機質となり、人形のガラスの目玉となっていた。

アイリスに、何が。アイリスが。

「離せ！」エディはオオカミの牙のような腕に、爪をたてて抵抗した。

「テメーをか？ それともあの人形か？」男は再び殴る。

頭の中が揺れる。視界が定まらない。その間に、金属が弾けるバチンバチンという音がした。

何が起きているのかわからなかった。

目の前が霞んで、息が苦しい。心臓は酸素を求めて激しく脈打つ。

……やっぱり無理だっただろ？

ぼんやりする頭の中で声がした。無理だって？ その言葉が突き刺さる。

無理でも、これだけは。譲れないだろう？

「おい、もういいぞ」

大男が言う。

金髪は気怠そうに頷いて、大きく腕を振り上げた。ひゅっという空を斬る音がして、拳が……エディの目の前で。

「待ちな！」という声に阻まれ、止まった。

誰だ？

その場にいた、誰もが声の主に集中した。

仁王立ちで、太陽を背に道の真ん中に影を落としている。

その主は、トリティだった。守衛服を脱ぎ、白いシャツと紺色のズボンで額にサングラスをかけている、簡単な服装をしていた。

「何だデメーは？」

金髪が横目で彼女を睨みつけ、低い声で凄む。

「正義の味方よ！」

トリティは言うど、額のサングラスを外し……金髪男に投げつけた。男は咄嗟に拳で振り払う。その一瞬に間合いを詰め、腕が地面を向いている間にトリティのしなやかな鞭のような蹴りが男の顔面に直撃した。

不意を突かれた男はエディを解放し、後ずさる。道に唾を吐いた。

その横に首筋に蛇の入れ墨を彫った男が並んだ。

そして後ろから大男が二人に何かを言う…… バッグを引きずって、大男は道の反対を駆け足で去って行った。

「うえっ…… はあ、姉ちゃん？」

エディはその場に座り込む。

なぜ、ここに？ エディは訊きたかったが、むせて言葉が途切れ

「久しぶりに『カボチャ村』のカルボナーラを食べようと思ったのにね。物騒な男どもがアイリスちゃんを追っているのを見たら、放つとけないでしょ」

トリティはポケットからハンカチを取り出し、エディに投げた。

「情けないツラだね、男のくせに。事情はよく分からないけれど、ここは私に任せて。あんた、いい加減男になんなさいよ」

姉の強い言葉に、エディは体に力が戻ってきたのを感じた。

心が奮い立つ。目の奥に意思の光を戻し、エディは体を起こして走り出した。

「さあ、どっちからやる？」

トリティは武道家のように構えた。前には大男が去って行った道

を塞ぐようにして、二人の無頼漢。

エディが後を追うのを背中を感じて、心の中で弟の無事と救出の成功を祈る。

「素人の喧嘩好きが、女だからって容赦しねえぞ」金髪男が睨む。

「お生憎様、私はこれも元軍人。そこらへんのチンピラと一緒にしないでちょうだい。あんたたちこそ、後悔すんじゃないわよ」挑発的な笑みを浮かべ、トリティの瞳が鋭く光った。

第3幕・7 前進2

疼く頬を押さえて、エディは走った。

細い路地が、入り組んだ道が、曲がり角がじれったい。

それでも足を進めた。

前へ、前へ。

男の姿はなかったが、エディはひとつの場所に向かっていた。

彼らは街の人間ではない。どこへ向かおうとも、行き当たる場所
は一つだ……

空の駅。

外界との唯一の交通手段のブルートロッコ。

そこにいれば、必ず会はずだ。

駅までの近道を行こうと、さらに細い路地に入る。薄暗く湿っており、料理の匂いと腐敗の臭いが混ざった空気が気持ち悪い。と、
数歩進んだ所で突然。

「わあっ！」

突然、肺が圧迫されて奇妙な声が出た。

前に飛ばされて地面に勢いよく倒れる。

一瞬、何が起きたのか、エディは理解できなかった。眼を白黒させているうちに無理矢理起こされ、頭突きを食らわされた。

勢いで石畳に尻を打った。

「ハイボーイ。久し振りだぜえ」

ざらついた男の声が、路地に響き渡った。
額を押さえると生暖かいもの触にれた。

血だ。額が割れていた。

エディは痛みを堪えて顔をあげると、そこにはトリティによつて阻まれていたはずの金髪の男が、敵意を隠そうともせず立っていた。

金髪の男がここにいるという状況が示すもの。エディには想像でしかなかった。したくもなかった。

男の眼は血走っていて、それは怒ったマイクの般若顔やトリティのゴキブリ退治の時の真剣な顔つきの、どれにも似ていなかった。鼻息は荒々しく、殺気が陽炎と化して男を歪ませている。

男は迫り、エディの頬を殴った。

強烈な打撃だった。

激しい痛みと同時に、胃からこみ上げてきた血の塊を路地に吐き出した。

口の中を切り、胃に流れたものが全部出てきたのだ。口の端から赤い糸が垂れる。

胃酸の酸っぱさと錆び臭いと生暖かいものが、口の中に満たされた。それから息をする間もなく、男はエディの鳩尾を蹴り地面に倒すと、胸元を大きな足で踏みつけた。

エディは再びこみ上げてきた吐き気に耐えてあえいだ。

剥き出しの殺意にエディは初めて恐怖を感じた。命に関わる恐怖を。肋骨が悲鳴をあげ肺が苦悶し、エディの頭に生命の危機のみ発せられる警報が鳴り響く。

「ゲームオーバーじゃねえか、クソガキ。さっきの勢いはどこいっ

た？」

男は嘲笑う。

エディの頭の中では、今朝の混乱から順に、昨日、一昨日の出来事が駆け巡った。だが、最初に思い浮かんだのは……。

みしみしと骨が軋んでいる。……エディはゆっくりと手元を探った。なにか、武器がないかと。すると硬くて冷たい物が指先に触れた。慎重に触ると、それは空き瓶だった。

気付かれないよう手に取る……

がん、という鈍い音。

男が絶叫し、口から泡をふきながら、足を押さえて汚い路地の上で転がった。

その間にエディは立ち上がり、血を拭いながら早足で路地を進んだ。

頭が痛くて、目の前がぼんやりした。足がふらふらする。空を歩いているようだった。

路地を抜けると、一段一段の高さが違う長い階段に出る。

そこから右下に空の駅支社と、空の駅が木々の隙間から見えた。

風に乗って微かに、かぁん、と鐘の音がエディの耳にまで届いた。

慌てて空の駅を見ると、ブルートロツコが発車し、空へと走り出していた。

第3幕・8 鐘が鳴る

トロツコが出発する、少し前のことである。
空の街の中を、二人は急ぎ足で歩いていた。

「さっきの悲鳴はあの女の子でしょ？ 行かなくていいんですか」

ハマートが尋ねると、スーヴェンは淡々と答えた。

「何しに行くんだよ」

「何って、女の子が襲われているんですよ。見ぬ振りするなんて、人でなしじゃないですか」

「今は、そんなことを言っていられないんだよ。あの人形は誰の手
に渡ってもよくないんだから、駅で待つんだよ。最終的には、空の
駅に来るだろうから」

「誰が、ですか？」

「オヤジの忠犬たちさ」

スーヴェンの予想は、半分は当たっていたが、もう半分は外れて
いた。

空の駅にやってきたのは坊主頭の大男、トムだけだった。他の二
人の姿は無い。

駅舎の中でスーヴェンとトムは向き合う。

駅舎のベンチに座っていた客は彼らの殺気を感じ取り、そそくさと駅舎から避難した。

入り口には、屋台の主や行商人が集まって興味深気に見物していた。

その中にハマーも素知らぬ顔で混ざっている。

「その鞆には『鍵』が入っているんだろ？ やり方が野蛮じゃないかな。堅気に手を出すなんて」

改札口の前に立ち塞がり、スーヴェンはできるだけトムに威武を感じさせるように言った。

だがトムは少しも怯まない。彼も股、幾多の困難から、相手を抑えるための破壊と威圧を学んでいた。凄みをきかせた声を出す。

「ふう、仕方ないですな。これも仕事ですから」

「君は他の奴らとは違って分別もあるし、もう少しスマートだと思っ
ていたけれど。残念だね」

「何とでも言って結構。あっしはヤクザの道理を貫いているだけで
すよ。理解し難いことでしょうがね」

「そうだね。でも君が持っている物は君の忠誠心とは無関係なんだ
よ。オヤジから聞いているんだろ？ 『アイリス』のことを。世界
の劇的な変化だ」

「委細承知ですな。しかし、あなたが言う『世界』は、いつだって
シーソーみたいに右にも左にも傾いて、不安定で脆いもんです。落
とされるのが嫌なら、目に見える範囲の『世界』に踏ん張って立っ
ているしかないんですよ」

「……僕は偽善者でも正義のヒーローでもないから何とも言えないさ。ただ、確実に言えるのは、この事実を知った僕は、少しでもそれを阻止するってことさ。破壊されるのは嫌だからね。劇的な『変化』は『破壊』に等しいんだ」

トムは何も答えず……緊張感がその場を支配していた。

くぐもった車掌の独特の音が、ブルートロツコ発車の旨を伝えた。あと一分で発車します、と。

そのとき、空気が動いた。

唐突にトムは懷に手を入れて……大きな手で大きく黒い金属の塊を取り出した。目の前に突如として現れた壁のように、それは大きな存在感を放っていた。

駅舎はパニックに陥った。成り行きを見ていた駅員も戸惑い、逃げたい気持ちと止めたい気持ちが交差して、扉の隙間から覗きながら震えていた。見物人も駅舎から離れ、勇気ある野次馬とハマートだけが駅舎の入り口で見守っている。

「……それは無いだろ？ 一般人を脅かすだけだよ」スーヴェンは平静を保っていた。

「巨大な力は、ときに有効なんです。今がそのいい例ですな。あつしは次の発車時間まで待つ事はできませんので」

「君が持つ物をそこに置いて行ってくれるのなら、道を譲るよ」

スーヴェンは、銃口の向こうにある……少しも揺るがない瞳を見つめていた。

だが、それでも譲らなかった。どちらも、動かない。

車掌の出発を告げる声が駅舎に響き渡った。

かあん、と鐘の音が鳴る。

トムは。

スーヴェンは。

その瞬間、動いた。

脳を揺らす爆発音と、悲鳴。

混乱が巨大な波となり、誰も彼も飲み込んだ。

逃げ惑う人。

叫ぶ駅員。

火薬の臭いと反響する音。

「あわわわわ！ スーヴェン！」

ハマーだけが、その場に崩れたスーヴェンに駆け寄った。

仰向けに倒れたスーヴェンの横で、彼は叫ぶ。

死なないで下さい！ 助けて下さいい！

「やかましいっ」

「わああ！ 生き返った！」

体を起こしたスーヴェンは、叫ぶハマーの頬に拳を入れた。

「誰が死ぬか、頬をかすただけだ！ はあ、トムには参ったよ。本当に」

頬のかすり傷を触りながら、肩を大きく揺らして息をする。本当に驚いた様子だった。

「……トムは？ 見ていたんだろ？」鼓動が休まる間もなく、スーヴェンは辺りを見渡す。

「はい、トロツコに……でも、それどころではなくなつて……」

ハマー트가心配そうに見ているが、スーヴェンは気付かずに改札口の奥にあるホームを見た。ちょうどブルートロツコがゆっくりと動きだしていた。

あれに乗ったのか！

スーヴェンは急いで起き上がると、ハマー트의静止も無視して改札口を通る。

ホームでは駅員が、ブルートロツコを見送りながら駅舎での騒動を気にしていた。

その横をするりと抜ける。スピードに乗り始めたトロツコ列車の連結部分の柵に手をかけ、飛び乗った。

駅員の悲鳴のような怒鳴り声が聞こえたので振り返ると、駅員は顔を真っ青にして慌てていた。彼には気の毒なことに、トロツコ列車は、緩やかな坂道を駆けて始めていた。

連結部分で強い風を受けながら、目の前に広がる青を見た。遠い遠い空の一面。

空に近い場所にいるのに、空はまだまだ遠かった。

スーヴェンは深呼吸をすると、車両の扉に手をかけた。

第3幕・9 空へ！

頬が火傷をしたみたいにじんじんとしている。

ブルートロッコの発車を見たエディは、それでも駅に向かって走った。

男たちが乗っていませんように。
そうすれば、次の発車まで一時間はある。彼らは空の街に閉じ込められ、その間にガットに会うことができれば、きっといい知恵を教えてくれる。

階段を駆け下り、ようやくベクターズカンパニー空の駅支社の前まで来た。周囲がいつになくざわついている。

駅の前には人ばかり、屋台の主人や行商の老人が言葉を交わしている。

見知っている自衛団員の姿もあった。

彼らいるということは、つまり事件が起きたのだ。

最初に思い浮かんだのは、あの大男だった。あの凶暴な男。金髪の男。何しに来たのか、よくわからない愛想のいい青年たち。

駅に近づくと、興奮した人々はエディを見て驚いた目を向けるが、それも一瞬で、すぐさま自分たちの話に熱中した。エディはざわめきの欠片を拾い集め、何が起きたのか推測する。

……なんて物騒なんだろう……

……これだから余所者は……

……ツルツ禿の男が……
……トロツコに……

男はトロツコに乗っていた。

もう届かない。

どこにも。

手を伸ばしても、どれだけ走っても、追いつくことはできない。

目の前に、虚無の空間が現れた。音も景色も吸い込まれ、エディの感覚は遠くなって、虚無は体を侵害し、エディ自身を飲み込んでしまっていた。

突然、体から力が抜けていった。頭がぼうつとして、目がぐるぐる回った。

落ちていく感覚……

虚無の空間の底には、自分の力ではどうにもできないという、現実があった。

ここから先は、どうにもできない。そうだろ？

虚無の底から、慰める声がした。

身を引いても、誰も怒らないさ……

自転車では時速二十キロメートルで走るブルートロツコに追いつくのは難しい。発車からもう何分も経っているし、ロックリバーから出るブルートロツコは南のサンミラノか、西のルーツェヘ向かう。

そうだ、と顔を上げた。そうだ、まだなんだ。

どうにもできない、ことはないんだ。

その瞳には光が蘇り、崩れていた心が立ち上がっていた。
前へ、前へ。

「自転車は？ エンジン付きの！」

エディが飛び込んだのは、ハーレーの工場だった。

シャッターが開いた工場に乗り込んできたとき、ツナギ姿の青年は右手にペンチ、左手に肉饅頭を持ち、間違ってペンチを口に運ぼうとしていた。

「あるけど、それよりもその怪我どうしたんやいね？ ちょっと待って、救急箱取ってくるし」

エディの顔を見たハーレーは、彼の顔を見た人々と同じように驚き、慌ててペンチを皿に、肉饅頭を工具箱に入れて、奥の引き戸を開けて居間へあがろうとする。

「怪我はいいんだ、もう治った！」エディが慌てて引き止めるが、

「ウソこけや。見とるこつちが痛いわ」ハーレーは構わず長靴を脱ぎ始める。

エディは彼の背中を引っ張って、工場に無理矢理留まらせて懇願した。

「自転車を貸してほしいんだ！ あの、変な機械が付いたやつだ！ あるだろ？」

「まあ、いいけど……どしたん、急に？ 実験体になるのは、嫌やつたんやないんかいね」

ハーレーは首を傾げながらも、長靴を履き直し工場の端へ行く。何も訊かずにいてくれた彼に、エディは感謝した。

ハーレーは笑顔で自転車を持ってくると、エディの事情など関係ない、という調子で嬉しそうに言った。

「あれからちよつと改良して、使い易くしたんや。カゴはサービスやし」

エディが昨日見た機械は、今度は大きなカゴ付きの変わった型の自転車にくつついていた。後輪が三つもあって、不格好だった。

それを前にハーレーは説明する。

「自転車は後輪を回して前に進むよう出来とるやろ？ このモーターエンジンは真ん中の後輪を強制的に回して、推進力を生むんや。自転車の利点は漕がなくても、車輪が回るとこやんね。ほやからエンジンが止まっても両端の車輪は回るようにしてあんやわ」

ハーレーは女性を扱うような手つきで、サドルを撫で回す。

笑顔が気味悪いな、とエディは思った。

「なんか、言ったかいね？」

「ううん、言ってない……」

ふうん、と頷くと青年は続けた。

「それで、空を走るときはベクターズの自転車と一緒に、まずイメ

ージするんや。自転車が安定してきたらハンドルの真ん中に付いる紐を引っ張る。そしたらエンジンが動いて車輪も回る。もう一回引っ張ると止まるから、エンジン止めてからブレーキかけるんやぞ」

解ったか？ と話し足りない様子でハーレーが言う。

「うん、ありがとう」

ハーレーは壁に掛けてあったゴーグルの付いたヘルメットを投げ渡す。

受け取ったエディは装着し、自転車の留め金を外して空を走る自転車にまたがった。

「本当に、ありがとう」

「エンジン動くの、だいたい五分やし、気をつけねや。後で感想も聞かせてやあ」

説明を聞く間、少しの休息を得た落ち着きを取り戻し、うん、と強く頷いて、エディはペダルを踏む。

ハーレーは嬉しそうに手を振って、少年を見送っていた。

腰を半分浮かせ前のめりの姿勢になり、ペダルを蹴るように自転車を力の限り漕ぐ。

耳を掠めていく風の音がいつもと違って感じるのは、心の内に秘めるものが違うからだろうか。

空を走っているというのに開放感はなく、壁で囲まれた狭い道を走っている気分だった。

エディはゴーグル越しに見える、カゴの中で揺れる肉の塊に視線を投げて叫んだ。

「あのトロツコはサンミラノ行きなんだな！ ルーツエ行きじゃないだろうな！」

「間違いねえ！ 俺あまだボケちゃいねえよ！」

カゴの中で、ガットが怒鳴るように大声を出して答えた。

昼を過ぎた頃である。エディとの約束のため空の駅支社をでたガットは、駅からの尋常ならざる爆発音を聞いた。

何事かと、混乱し逃げ惑う人々の波に逆らい駅へと向かい……騒動の半分を目撃した彼は、怯える駅員を奮い立たせ、当事者の若者の確保、自衛団の手配と、その場にいた誰よりも落ち着いて指示を飛ばした。

間もなく自衛団員が駆けつけ仕切り始めると、ガットはその場を団員に任せて駅を出た。

だが今度はエディが必死な顔をして自転車で向かって来るではないか。

「おおい、と声をかけるとエディはガットの手前で急ブレーキをかけた。」

どうしたんでえ、そんなに慌てて、その顔は何だ？

ガットが矢継ぎ早に質問を浴びせると、エディは泣きそうな顔になって答えた。変な男が、アイリスが、変な青年たちが。おお、そ

いつあもしや、先の若者か、だがオメーその自転車は登録外だから空は走れねえよ、なに行くだあ？ 馬鹿やろっ、仕方ねえ奴だ、そんなツラあしやがって……言うなり、ガットはひょいとカゴに飛び乗った。オメーだけじゃ危なっかしいぜ、止めたって聞かねえんだろっ、さあ行くぞ！

エディを勇気づけるように言っで、駅員にその眼光と威厳と屁理屈で門を開けさせると、空への道を開いたのだった。

第3幕・10 追い風マーク

正午を過ぎた空には白い大きな雲が広がり始めていて視界が狭い。空気は身を切るように冷たかった。

いくら体力があるとはいえ、全力で自転車を漕いだのは無謀だった、とエディは後悔していた。

とにかく前へ。

しかし、足は自分の意志とは関係なく動かなくなっていくのだ。誰が足を掴んでいて、ぐいぐいと力を入れて動かせないようにしているみたいに。

それでも、足を動かす。手を振り払うように……

「おい、見えたぞ！ 俺は正しかっただろう！」ガットが叫んだ。

ぼんやりとする目を凝らすと、ブルートロッコの姿が雲の隙間に見え隠れしていた。

だが、エディはもう、激しく呼吸をしても苦しくて、返事もできなかった。頭の中に白が押し寄せて思考を染めて、足がどんどん動かなくなっていく。

ちっ、というガットの舌打ちが聞こえた。それから彼はカゴの中で器用に体をねじらせエディの方に向くと、前足と爪を使ってエンジンの紐を引っ張った。

エディが「あっ」と言う間もなく……背中を突き飛ばされたような振動。

「何、するんだ！」

強い力に引つ張られてエディの体が仰け反る。

ガットはカゴにへばりついた。

後輪は急加速をし、エディの何倍もの力を発揮した。予想外のスピードにエディは面食らい、ハンドルを握って飛ばされないようにするのが精一杯だったが、慣れると元の風を受け流し易い前のめりの姿勢に戻った。ガットはカゴの中で風に押し潰されたままで、鼻の先が彼の顔に触れそうになる。

風はごうごうと耳を打つ。車輪は高速回転を続け、エンジンは振動して車体を揺らす。

細い線のようにしか見えなかったブルートロッコが、どんどん近づく。

自転車は猛スピードでブルートロッコに迫る。

ところが貨物車両との距離が百メートルほどまで縮んだとき……ぶすん、という間抜けな音がしてエンジンが停止した。

まだ五分も過ぎていないはずなのに、どうして！

エディは驚いてエンジンを見るが、そんなことをしても解らなかった。

ハーレーの設計通り、自転車の後輪は回転を続けている。エディがペダルを踏んでも空回りをするほどのスピードを持っていた。

自転車はブルートロッコを追う。

目の前にブルートロッコが迫る。

目の前に……

「うわあっ！ どうしよう、ぶつかる！」
「ブレーキだ、ブレーキ！」

エディは思い切り手に力を込めて、ブレーキを握った。その瞬間、勢いを残した自転車は、尻を浮かせて前方に回転……宙返りをし、前輪も浮き上がり、エディは眼下に空を見た。

そして、後ろから貨物車両の木製扉に威勢よく突っ込み、ぱりぱりどすん、と貨物車両の中に倒れて背中を打った。

一瞬息がつまり目の前が真っ白になる。何が起こったのか瞬時に理解できなかった。

「馬鹿やろう！ 前輪のブレーキもかけてどうする！」

ガットの怒鳴り声が聞こえた。起き上がって見ると彼は奥まで投げ飛ばされていたが、猫の持つしなやかさのおかげで無傷のようだった。

エディは前輪のブレーキを握ったのだ。それがいけなかった。

前へ進もうとする自転車は前輪が急停止したことによって、つまずいた状態になった。そして、このありさま。

貨物車両に荷物なかったとはいえ、よく二人とも無事だったな、とエディは奇跡を感じた。打撲だけで済んだのは奇跡だ。貨物車両の扉に体当たりしたのも奇跡だ。

「なに惚けてるんでい、ほれ、さっさと起きねえか！」ガットが急かす。

エディは背中に痛みを感じながら、立ち上がる。

ブルートロッコの降車係（扉の開閉と運賃の回収が仕事）のモリスは、これまで運の無い人生を送ってきた男であったが、それでも降車係という職に就けたのは、まだ神から見放されてなかったからかもしれない。

彼は神に感謝していた。ついさっきまで。

モリスは、どうして、という恨みと、お助けください、という祈りを神に捧げながら、二両目の最後尾の座席に隠れて震えていた。

ロックリバーから出発する直前、扉を閉めようとしたときに大きな鞆を持った、大きな男が押し入ってきた。

顔を真っ赤にした悪魔のような男を見て、モリスは青ざめた。

彼は男が手にしていた、命を奪う悪魔の道具……拳銃を目の当たりにしたのだ。溢れ出す恐怖に耐えきれず奥へ奥へと逃げた。悪魔は彼を追って二両目に。

その直後。

悪魔の後ろから勢いよく入ってきたのは、一人の青年。

数メートルと離れていない彼らは向き合う。

モリスに背を向けた男は腕を動かすと、耳をつんざく轟音を発した。乗客の悲鳴があがる。

「ボスへの反抗心は結構ですがね。仕事の邪魔をしないでください。でないと本当に、あなたをどうにかしなくちゃいけなくなる」悪魔に相應しい声で男が言った。

「邪魔をしているのは君の方だ。トムは僕の邪魔ばかりしている」
青年が言った。

モリスは二人の声を聞きながら、最後尾の座席に身を寄せる。

「大丈夫かい、兄ちゃん」

声をかけられ、モリスは心臓が口から出そうになって慌てて口を手で押さえた。

横を見ると、窓側の席に帽子を被った中年の男が座っていた。

「まったく、こんな所で銃を使うなんて、非常識だな」

男は暢気な様子で溜め息をついた。落ち着いているのか鈍感なのか、モリスには判断がつかなかった。

それから……どれくらい経っただろうか、恐怖と緊張、混乱、不安。それらが時間を狂わせていた。悪魔と青年は相変わらず睨み合っている。

モリスは緊張しながらも、時間を知ろうと腕時計を見ようとした瞬間、どおん、という音と後方からの激しい振動。客が、悪魔が、青年が、突然の揺れに驚いた。そしてモリスを、いや後ろの扉を見た。

どすん、ぱたんと音がする、その扉の向こうを……

第3幕・11 イアソン・ヴォード

「追いついたぞ！ アイリスを返せ！」

いくつかの目がエディに視線を投げたが、エディの目には二両目の真ん中にある大男しか入っていなかった。男は青年（確かスーヴェンと呼ばれていた）に拳銃を向けている。思いもよらない破壊の力を目にし、エディは体を強張らせた。

「ちっ、しっこいガキだ。あいつらは何をやっていたんだ？」と男が憎々しく言う。

男の後ろにいたスーヴェンは、意外そうな表情をして、そして笑った。

「あいつらが弱かったただだよ、トム。エディ君に腕力はなくても、あいつらより運があった」

エディは自分の名前が出たので驚く。どうして俺の名前を知っているんだろう？

トムはエディを横目で見てから、青年に顔を向ける。

「そんな悠長なことは言えないんじゃないですかい？ こいつを壊したいのでしょう、でもあのガキは取り戻したいときている。ガキにとっっちゃ若もあっしも、邪魔者だ」

スーヴェンもエディを見る。

エディは二人が何者なのか、どういう成り行きなのかわからず、黙って状況を見ていた。

「そんなことは、どうだっていいんだ。結局のところ君が退いて、僕かエディ君か、どちらかが取り返せばいいだけの話。それで終わりだ」

「あなたはひとつ、忘れてますな」男は拳銃を見せつけるように軽く振った。

「あなたかガキが引いて、あっしが残る……その可能性が一番高いと思いますかね」

「野蛮だね、本当に」

スーヴェンは言った。そして……ぐつと前へ一歩。

空気が震える。

客の悲鳴。

きん、と耳鳴りがし、エディの目に映る世界は無音になった。血飛沫をまき散らし、倒れる青年……彼の姿を見ながら、エディの現実は無音のまま崩れていくようだった。中で何かが壊れた気がして……自分でも気付かないうちに座っていた。

（離れる、くそっ）遠くで聞こえるトムの怒りの声。

男は腕を振り回し、何かがエディの元に飛んできた。スタッと体操選手のように華麗な着地した大きな塊。

それは？

（おう、大丈夫か？）ガットはエディに背を向けたまま声をかけた。

誰に向かって？

「大丈夫に……見えるのか？ ああ、でもこれじゃ、大丈夫とは、言えない」

息を切らしながら答えたのは……スーヴェンだった。

起き上がった彼は、右肩を押さえている。弾道はガットの手腕によつて逸れ、スーヴェンの肩を撃ったようだった。

エディは目の前で起きていることに、まるで現実味がなかった。五感に膜がかかったように霞んでいて、夢の中みたいだった。

「どいつもこいつも無茶なことをしやがるぜい。年寄りの気が休まる暇あねえよ」

ガットが言うと、背後から誰かが立ち上がる気配があり、同調の声を出した。

「まったく、猫將軍の言う事は正しい」

「ああ？」

トムは拳銃を向けるがその顔はすぐに驚愕の表情になった。スーヴェンは苦しそくに顔を歪ませて目を向ける。

エディは現実には霞がかかったままで、振り返った。

最後尾の窓側の席に立つ、一人の男。

隠れていた降車係を押しつけて座席から出てきた。

「イアソン・ヴォード！ 何で生きている？」トムが叫ぶ。

エディは自分のすぐ後ろまで出てきた男を無遠慮に眺めた。
この男がイアソン・ヴォード？

帽子の下目は眠たそうに垂れていて、顎には無精髭、癖のある髪を後ろで一本にまとめていて、およそ職人とは思えない風貌だった。とりまく空気は、緩んでいるが、隙がない。

想像していた人物と全然違う。

この人がイアソン・ヴォード？ エディは繰り返した。アイリスを作った？

「おっさん……人形じゃ、ないだろうな」スーヴェンが言う。

「なるほど、俺の人形に会ったのは若いの方か……俺がいくら腕利きのオートマタ職人でもな、そう何体も同時に作れるもんじゃない。俺こそは本物さ。せつかくロッキンバーまで逃げてきたってのにトムボーイがやって来て、ルーツエ行きかと乗ってみりゃ、うっかりサンミラノ行きに乗っていて、これだ。俺には神サンはついてないのかね？」

気怠そうにイアソンは息を吐く。トムは何も言わず、拳銃をイアソンに向けた。

「おっとっと、止めときな」中年男は慌てず急がず、手を挙げて牽制する。

「こんなところで撃つても解決にはならない。お前さんは『アイリス』を手に入れ、『鍵』もそうして持っている。俺には用はないはずだ。悪いが俺は、抜けさせてもらっぞ」

「……僕に結末を、見届ける責任がある、と言っておきながら……あんたは、見ないのか？」

「若いの、お前さんがトムボーイに歯向かってる意味は解っているつもりだ。あんたは親子仲が良くない。そういうことだな？　だから、俺が残してきたものに会ったんだろう。だからこそ解ると思うんだがね。行き着く先は一つ……なぜなら俺たちは一つの物で繋がっているからだ」

言うなり、イアソンはエディの襟首を鷲掴みにした。ずるずると乱暴に引きずって、後ろへ移動する。

「何するんだ！　やめろ、離せ！」

「少年、お前さんはここでは何もできない。あの傷では若いのにも何もできないだろうがね。それに何も知らないでここまで来たのだから、事実を知る必要がある。それからどこへ進むか、選んだ方がいい。猫將軍もいることだ、冷静になんねえとな」

イアソンは後部の扉を開けた。ごう、と強い風が車両に突入してきて、事情、思惑、恐怖も緊張も、何もかもをかき混ぜた。

「無茶ができるのは若い証拠だが、冷静になる場所も必要だ」

ガットが側に寄ってくる。

エディは抵抗するが、イアソンに引きずられたまま貨物車両へ渡る。

イアソンは器用に空いた手で倒れていた自転車を起こした。ガットは当然のようにカゴに飛び乗った。

「離せ！ 何するんだよ！」アイリスが！

エディは必死にもがくが、イアソンは見掛けによらず力持ちだった。手の力は緩まず、

「それでは皆さん、御機嫌よう！ ははははは」

高らかに笑って、エディと自転車を持ったまま、壊れた貨物車両の扉から大空へと飛び出す。エディの悲鳴が空へと吸い込まれていった。

落ちている。雲があつという間に通り過ぎていく。どこかで見た光景だ、とエディは考えたが、はつきりと分らなかった。エンジンが稼働した自転車とは比べものにならない速さで、二人と一匹と一台は大地の懷に飛び込もうとしていた。体は大地と平行になっていて、全身で風を受けている。イアソンが肩を掴んで無理矢理自転車に押し付けた。エディはハンドルを握る。

「さあ、漕げ！ でないと木っ端微塵だぞ。俺はお前さんのような子供と心中なんぞ、まっぴらなんだがな」

うるさいうるさいうるさい！

声にならない声で叫んで、エディは自転車を引き寄せサドルに尻を乗せた。今度は頭が大地を向く。真つ逆さまとはこういうことか、と実感した。

「落ち着け！」ガットがカゴの網にしがみついて叫ぶ。「落ち着いてイメージするんでえ」

「慌てるんじゃないぞ、絶対にできる」

今度はイアソンが、肩を掴んで怒鳴った。

大地はもう目の前で、くすんだ緑色だった森が、もこもこの絨毯のようになっている。エディは頭の中の警鐘を聞きながら、どうにか心を鎮めようとする。大きく息を吸って、吐いて、イメージする。垂直から弧を描き、大地に沿う道を描く。足に力を入れた。

……回らない！

「どうした！」ガットが尋ねる。

「動かないよ！」

後輪が壊れたのか？首をひねって見ると、がいん！と振動が起きて空に木片が飛んでいった。イアソンが後輪を蹴飛ばして、挟まっていた破片を外していた。

横で、もう一度、という声がある。もう一度、集中して。……足に力を込める。

後輪は動き、とたんに前輪も回転を始めた。

これでよし！

これで……

「げっ！」

森はすぐ、目の前に。

絨毯はいつの間にかブロッコリーになっていた。
ハンドルを引いて、傾斜を。イメージを！

自転車は緩やかな傾斜を描いて走った。
だが、スピードは殺せず……結局彼らは森に勢いよく突っ込んで
いた。

第3幕・12 決意

どこかで鳥が鳴いていた。

会話をするように、森の奥でギシギシと鳴くと、別の場所からギシギシと鳴いている。まるで、突然の侵入者を警戒し、森全体に報告しているように。

エディは木の太い枝に守られて、うまい具合に引つ掛かっていたが、ぼんやりと葉の隙間から覗く空を見ていた。

あの空に、いろんな物を残してきた。

一時の勇氣。

情熱と勢い。

歌声。

オルゴール。

そして、アイリス。

大地では帽子を被ったままのイアソンが（どこに持っていたのか）工具で自転車を修理しながら諸々のことを、ガットと話していた。

「『アイリス』は実際に存在していたのか？ その証拠を軍が見つけたと？」

ガットが素っ頓狂な声をあげたが、イアソンは冷静に言う。

「信じられんのも無理はない。なんたって『アイリス』の存在は伝説だったわけで、そんなモノの製造法が在るなんぞ、夢にも思っちゃいないだろうからな。実際は…… 国定図書館の奥深くに眠ってい

たんだ。俺の所に来た軍の若造が言っていたから、そうなんだろう。だが『アイリス』に関しては、ヴォード家に代々言い伝えられていた。なぜか分かるか？」

「さあなあ……察するに、オメーン家がオートマタ職人ってことと、関係してるんだろう」

「うむ、さすが猫將軍。『アイリス』の前身は俺のひいひい爺さんが作ったオートマタだ。もう百年以上も昔の話さ。ご先祖様のオートマタを元に『アイリス』の他、色んな物が作られて利用された。あの時代にあつたこと、オートマタってもんがどんな使われ方をしたのか……そういうことも全部、我が家に代々伝えられてきた。俺は猫將軍より知っているのさ。戦争の話や……世界についても」

「なるほどなあ……」

ガットが考え込むように顔を撫で回し始めると、ふとエディが気の抜けた声を出した。

「それで、結局『アイリス』って何なんだ？ アイリスとどんな関係があるんだ？」

「それはな……」とガットが言い難そうにする。横からイアソンが続けて言った。

「兵器だ」

「兵器？」

「そうだ。戦争で使う強力で危険な武器の、兵器だ」

言われても、エディには信じられなかった。アイリスが兵器であることよりも、そんな物があつた歴史に驚いていた。

「……戦争で兵器が使われたなんて、聞いた事が無いよ。学校でも教えてくれなかったし、誰もそんなことは言っていなかった。どういうこと？ ガットは知ってたのか？」

「オメーが知らねえのも当然だ。俺も百年以上前の戦争で兵器が使われたってえ、噂でしか聞いたことがなかった。それで確かめたことがあったが、事情があつて調査ができなくなってから、以来すっかり忘れていた。そんなときに判った事は史実が残ってねえってことさ。あるのは口伝された個人の体験だけだ。そいつぁオートマタみてえなもんだった、と」

「そう、これは……世界でも有名な元政治家、猫將軍も掴めなかった歴史の陰の部分さ。百年前の世界戦争があつたのは少年も学校で習った通りだが、世界は戦争の史実は残して兵器だけをもみ消した。製造法やら記録やら、兵器に関する書類、記録、関係者の暗殺……腹黒い手段も使つて、全部を隠して、二度と表に出ないように尽力したのさ」

「なんで、そんなことを」

「俺が知るか。伝え聞く所によると、『アイリス』とそれに続いて製造された兵器群は、世界の半分をぶっ壊したんだそうだ。破壊と殺戮。爆発。残ったのは不毛の大地と死骸」

イアソンは面倒臭そうに、ふん、と鼻で笑った。

「冗談だと思うだろう？ 百年前には世界の半分が死んでいたなんてな。信じ難いが事実だ。事実をもみ消そうと、世界が躍起になったこともな。だが戦争が終わって百年過ぎて、戦争を知ってるは一

人もいなくなつて……ただの知識では戦争の恐怖や危険の実感が無いんだ。世界の様相も時代が過ぎれば変わるからな、軍が計画してもおかしくない」

ガットは深い溜め息を吐いて、頭を振った。

「しかしそうになると、あちこちで作り出すだろうな。拳銃を持つ奴に対抗して散弾銃を持つみたいにな、どんどん強力なモンが作られて、そんで昔と同じ事を繰り返だろうな。人間ってえのは、なんだかんだ言いながら学習能力が無えからなあ……オメーはそれを分かっていて作ったのかい？」

「うむ、実はどんなモンかと興味もあつてな、世界を破滅させるほどの力が、本当に人の手で生み出せるのか試したかった。作ったのは本物の十分の一ほどの試作品だが」

「そんなこたあ問題じゃねえだろう」ガットは非難する目でアイソンを見る。

「確かに、十分の一にしたって破壊力はある。俺も作っちゃってから、どうしたモンかと考えてな。動かしてみたいが、動かすのは倫理的に無理だ。それで『鍵』は自発的に逃げるようにしたんだ。うまく逃げれば『アイリス』はただの物だし、捕まったときは、それはそれだと運に任せた。だがオートマタの送り先を適当に選んだのはまずかったな。まさか集配所に送り返されるとは。それに『鍵』の形を可愛い女の子にすりや、情を動かされて、逃げるには有利かと思つたんだが……予想外の奴が情を動かされて、俺はビツクリしている」

アイソンは言葉を中断し、木の上をちらりと見る。エディはおっ

さんと目が合う前に、ふいつと顔を背けた。それでも構わずイアソンは続けて言う。

「少年、お前さんは事実を知って、これからどうする？ 前へ進むか、後ろに退くか」

呼びかけられ、エディはイアソンを見た。

「無事に取り戻したいというなら、早く行動するんだな。若いのは俺が自宅に残してきた『俺』に会ったと言った。『俺』には『破壊用の鍵』を仕込んでおいたんだ。起動の鍵と間違えて使ってもらおうと思ったんだが……とにかく男前が鍵を持っているだろうな。『アイリス』は動き出したら、破壊でしか止められない。取り戻すなら鍵を『開ける』前だ。それに『鍵』は途中で力を無くしたんだろう？ 複雑な物を作るとたまにショートするときがあるんだ。俺の腕もまだまだな……」

エディは何も言えなかった。

あまりにも大きな事実の前に、彼の目的は霞がかった。何を選べばいいのかも判らなかった。

ガットが諭すように言った。

「余計な事あ考えんじゃねえ。進んだ後と、退いた後、どっちが後悔しないか、それだけだ」

「……どっちを選んでも、後悔しそうだったら？」

「そんなときは進めばいい。前に進んで終わっても、そこから新しいモンが生まれてなんとかなるもんだ。……どっちを選んでも俺は才

メーの味方だからよ」

「いいこと言うねえ、猫將軍」

イアソンが茶化すと、ガットは彼を睨みつけた。

エディは……目を瞑り、考えた。アイリスを助けて。その後は、どうするのだろうか？ 彼女は人形だから……ずっと一緒に叶わないのに。でも、このまま退くのは嫌だと思う。そつくり全部を投げ出すのは、逃げるみたいでもっと嫌だと思った。

「奴ら、サンミラノの外れにある倉庫で実験するだろうな。あそこに『アイリス』が置きっぱなしになっている。動かしたら爆発すると、取扱説明書にも記しておいたからな、ビビって動かせないだろうさ。ははは、ヘタレ野郎め、ざまあみる」

「……『アイリス』を作ったり説明書を残したりよ、オメーみてえなどつちつかずのいい加減な大人のせいで、次の世代が苦労するんで」

ガットは深々と溜め息を吐く。

「それもそうだな。ではこれから心を入れ替えて、猫將軍のような有能な指導者になれるよう努力しよう」

イアソンは真剣さの欠けた口調で言った。

エディは二人の声を聞きながら目を閉じ……ゆっくりと開けた。

木の葉の隙間には、雲が広がる青い空。

『きれい』と言ったアイリスの声を思い出していた。

第4幕・1 深淵の鍵

薄暗い墓地と藪が、この世の深淵のような雰囲気をかもし出しているサンミラノの西の外れは、不気味さと暗黙の了解から、街の人々が立ち入らない場所だった。

藪を背に建つ六つの倉庫が、それぞれが誰の所有物か、それが意味している事を人々はよく知っていたからだ。

何に使われているかも、現場を見なくても知っていた。

左端の倉庫の横には二台の自動車が停まっっていて、雲に隠れた太陽を恋しく思いながら、薄暗い場所で寂しく主を待っていた。

彼らの主は、オレンジ色の白熱灯が照る倉庫の中にいて、中央にあるガラクタの塊のような大きなオブジェの側で（彼らはそれを『アイリス』と呼んでいた）大きな鞆の中身……少女の姿をした人形……に注目していた。

「随分と可愛い『鍵』ですね。これでは私どもでも探し当てるのに少し時間がかかったかもしれません。なにせ、本来はただの金属の鍵なのですからね。この人形を見るだけでも、イアソンの技術力の高さだけは評価できます」

「腕前のほどはともかく、胡散臭い野郎ですよ。丁寧に取扱説明書を残して消えるんですからね、意味が解りませんや。何を考えているんだか」

カーネルが言うと、山高帽を被ったスーツ姿の男は、それもそうですね、と答えた。

「ところで私は、彼に幾つかの質問をしなければなりません……気分は優れませんか？」

男は後ろを振り向く。男の視線の先には、入り口付近で木箱を椅子にし、頬杖をついて座っていたスーヴェンがいた。彼は呼びかけられると男に鋭い視線を投げ返す。

男の横で、カーネルが代わりに口を開いた。

「気遣いは必要ねえですよ。アナタの要望通り連れてきましたが、ご覧の通り生意気なクソガキだ。大した怪我でもないのにトムは大袈裟なんだ。病院まで手配することはなかった」

「そんなことは、どうでもいいです。大切なのは、彼が私の知り得ない事実を知っていて、私にはその情報が必要だということです。いずれは喋っていただけなければなりません、今の方が監獄で拷問をするより人道的でいいと考えています」

言いながらスーヴェンに近づくと、眼鏡をキラリと光らせた。

「あなたが何かを知っていることはすでに明らかなので、隠す事は無意味だということをよく理解してください。君はイアソン・ヴォードの自宅へ行きましたね？ 私は自らイアソン・ヴォードの家を搜索しましたし、トムからおおまかな事は聞きました。どうなのでしょう、君はそこで何を知りましたか？ あの力ゴの中は何でしょうか」

スーヴェンは鋭い視線のまま、渋々と口を開いた。

「僕があの家で知った事は、あんたにとっては些細な事だ」

「些細か大事か、それは私が判断することです」

「それでも、あんたが……あんたたちが『アイリス』が必要だと思っ
ているうちは、何も話したくない」

スーヴェンの態度が気に喰わないカーネルは、早くも青筋を額に
浮かべて何の躊躇も無く拳銃を彼に向けた。

「面倒くせえガキだぜ。てめえ、どうしてここにいいのかわかつち
やいねえのか？」

「カーネルさん、あなたは我慢を知るべきでしょう。肉親の命を脅
かすのは、恨み辛みがあるうと見ていて気持ちいいものではありません。
どうぞ仕舞って下さい」

男は優雅な物腰で、カーネルの拳銃に触れた。

「あんたは、オヤジのような悪人でもなさそうだけど、一般人とは
感覚がずれている。『アイリス』が何であるか知ったら、誰だって
反対する。それは個人だったり、もっと大きな組織だったりするだ
ろうさ」

「私は広い視野と長い目を持っているだけです。多少の乱暴であつ
ても、選択することはときに有意義なのです。君の若い頭では、
理解し難いことかもしれません」

「乱暴な選択が有意義でも『アイリス』である必要はないよ。もつ
と別のやり方があるだろ。それを考えるのが政治家じゃないのか」

スーヴェンは憎々しく言ったが、男は聞こえない振りをした。そして、人形を興味津々に見ていた白髪混じりの小柄な男を見た。

「オロonz室長、どうですか？」

「ふうむ、興味深いものです。ええ、本当に」

答えたオロonzは、瞳をキラリと光らせ妖しく笑った。腰を屈めて慎重に人形を取り出す。

「オートマタという人形の存在は不思議極まりない。浮島と同じく、科学から見れば全くの不明の代物ですからな」

人形の腕を持ち上げて、感触を確かめるように撫で回す。人形の首が仰け反って、ガラスの目玉はオロonzに向けられた。何かを訴えるように空虚な灰色が彼を捉える。

「素材、原理、歴史。何もかも摩訶不思議。……動かしてもよいですかな？」

「まだ万端の準備は整っていませんよ、オロonz室長」

「確かに。しかしこれは爆発物ではなく、ただの大きな人形ですぞ」

「一応は『兵器』の名がついています」

「これの十倍の力があって、初めて『兵器』と呼べるでしょうな。

大丈夫、止める方法も知っていますぞ」

オロonzは目を輝かせて言う。玩具を目の前にした子供のようだった。

男は溜め息を吐くと、オロonzに背を向けた。

「動かすんですかい？」カーネルが眉動かして言った。「代行者も

見つかっていないですぜ」

「いえ、もう当てはあります。オートマタ職人は、イアソンひとりではありませんから」

オロonzは倉庫の中央へと人形を運ぶ。台座と思われる唯一の平たい鉄板の上に人形を乗せると、ポケットから紙切れを取り出し……取扱説明書の最後のページを切り取ったものだ……ふむふむ、と頷きながら『アイリス』を模索する。

一本のコードを取ると、先端の金属部分を人形のうなじの穴に差し込む。

人形は体を痙攣させる。

右の目玉が外れた。

床に落ちると同時に破裂する。

黒い粘液が散らばり、その中央に新たな鍵が出現した。

オロonzは汚い物を触るように鍵をつまむと、服の裾で粘液を拭き取った。

鍵は『T』型で、対の部分は顔にあった。二つの歯車がまるで目のようで、鼻の位置に二つの穴が並んでいる。右に差し込むと『アイリス』は起動する。鍵を回すと停止するので気をつけるように、とも。

カーネルは落ち着かない様子で、葉巻をくわえて火をつけた。

トムは眉間に皺を寄せて成り行きを見守っている。

男は相変わらず表情を変えず見ていた。

オロonzは熱い息を細かに漏らす。

彼の手に握られた鍵を、腕を伸ばして、

その穴に……

「うわあああっ！」

突風がぶつかったような衝撃。誰もが驚いて動きを止めた。
一階の窓の部分の板を破って、何かが突っ込んできたのだ。

それはカーテンがクッションとなって、ごろごろとくるまりながら床にぶつかった。

「馬鹿やろう、着地点はきっちり測れと言ったじゃねえか！」

「無理言つなよ、狭い場所なんだから！ いたた……」

二つの声。

そして……

第4幕・2 アイリス

エンジンが外された自転車は、キィキィと妙な音をたてても空を走る事ができた。

空からごちゃごちゃした埃っぽい街並を確認すると、民家がまばらになっている西側の外れに目を向ける。墓地と倉庫を目印に自転車を下降させた。

自転車は加速し、坂道を走るように車輪は激しく回転する。

だが……目測を誤ったエディは、イアソンに伝えられた倉庫の前の道に降りるつもりが、板張りされた窓に突っ込んだのだった。

「いたた……」

木の板には前輪が先にぶつかっただとはいえ、エディはよく生きているな、と二度目の奇跡を感じた。

布に助けられたらしい。それにしてもカビ臭い布だった。

這い出ると、異様な空気を感じた。顔をあげると、男たち……奇妙な物を見る彼らの目に気づき、自分が場違いであることを察してエディは怯んだ。

だが見覚えのある顔もあった。

坊主頭の大男と、アイリスに関わっているらしい青年。

「おうオメーら。とうとうここまで来ちまったぜい。アイリスは返してもらっぞ」

ガットも出てきて（やっぱりどこも負傷していない様子だった）
エディの横に並ぶ。

「……おや貴方は」山高帽を被った紳士のような男がガットの出現で、我を取り戻した。「猫將軍の呼び名高い、G・トラジロー大臣ではないですか？」

「誰でい、そいつは？ 俺はただのベクターズカンパニーの隠居よ」

ガットが知らぬ振りをするので男は少しだけ首を傾げるが、すぐに納得した様子だった。

「……そうですか。それでそのご隠居がなぜここに？ 窓から入るとは行儀が悪いですね」

「すまねえな。だが何も無くここへ来たわけじゃねえよ。荷物を取り戻しに来たんだ」

「荷物？」

「アイリスという名の人形だ。配達途中にそのボーズの男に盗まれちまったんでい。配達中の荷物はベクターズカンパニーの大切な預かり物、エディから横取りしたオメーたちは窃盗罪か、強盗罪だ。しよっぴかれたくなけりや大人しく返しなあ」

エディは本当にガットがいてくれてよかった、と感じていた。一人ではただ突っ走るだけで、どうにもできなかっただろう。彼のように正論を準備する頭も回っていなかった。

「そうですか……貴方にいくらかの包みを渡すことは難しそうです

ね」

「見ての通り、俺にや袖の下が無えもんでな」

山高帽の男とガットが睨み合う横で、エディは倉庫の中を見てアイリスの姿を捜した。

……。

微かな音を聞いて振り返った。

アイリスだ。

アイリスは変な機械に座らされ、じっとエディに左目を向けていた。灰色の瞳が灯りに照らされ、色の渦を作っていた。微かに開いた口からアイリスから音が漏れる。

横に居た白衣を着た男が、機械の側でこちらを窺いながら手を震わせていた。

「アイリス！」

エディが一步を踏み出したとき。

ゼンマイが緩んだオルゴールのように、男は不自然に首を回した。機械のようなぎこちない動きに、エディは違和感を覚える。

胸騒ぎがした。

目は自然に違和感の元を探っていた。

男にあった不自然なもの。

男の首突き刺さった一本のコード。
そこから鮮血が流れ、衣服を朱に染めていた。
コードの先は機械が続いている。

虚ろな瞳。滴る血液。青ざめた皮膚。

「どうした、エディ」

エディの様子に気付いたガットが、彼の目が向く先を見て……ガットも体を強張らせる。

アアアア……

間延びした静かな音。

金属がぶつかる音。

何本ものコードが機械から伸びてきて、床に散らばったガラクタを拾い集め出した。素早い動きでガラクタを機械の体に貼付け、アイリスの体をおし上げながら飲み込んでいく。

歯車と銅板がまるで顔にも見える天辺に、男の軀が挟じ込まれた。

エディの感覚は閉じていた。映るもの、聞こえる音、埃の臭い、ざらついた空気。巨大な危険が、狂気が、彼の中にまで入り込んできて、理解し、動くことを阻害していた。

「なにボケつとしてんでい！」最初に声を出したのはガットだった。

「おら、行くんで！ さっさとしろ！」ガットが頭でエディを押す。

よろけたエディは、理解しないまま扉に向かって走り出した。刹那、彼のいた場所にコードがぶつかって自転車を拾って体に付けた。

エディは振り返った。

アイリスは。機械は？

金属が擦り合う酷い音がして、機械の下部から人間の足が出てきた。靴も履いている。さっきの男の足だ。そこにコードが次々にガラクタを張り合わせていき、男の足を軸にして機械は自らの脚を作り出した。

ぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎし

金属の軋む音は獣の咆哮のように凶暴だった。顔の目の部分にある歯車が回り、一步を踏み出す。

体中からガラクタが落ちて、コードが拾い集める。

同じ事を繰り返して機械は徐々に均衡のとれた体になっていく。と、機械の外面を突き破るようアイリスの上半身が現れた。

右腕と頭だけを、機械の頭の横に。

うつ伏せにぶらりと下げて。ミルクのような白い肌は裂けて黒いものを垂らし、美しい花が枯れて死んでしまったことを伝えていた。

エディは声も無く、アイリスを見ていた。

ガットは失った少年の姿を見て頭を振る。

それから、少しの動揺は見せたものの一瞬のちに不気味な機械を睨んでいたスーヴェンに向かって言った。

「あの機械は『アイリス』だ。そうだろ、その若いの」

突然声をかけられ、機械に意識を取られていたスーヴェンはハツとしてガットを見た。

「そうだよ。製造法に書いてあった『アイリス』より、寸法は小さいみたいだね」

「奴は十分の一の試作品だと言っていたがなあ、破壊力は確かにあるようだ」

バリバリと破裂するような大きな音がして、ガットの言葉は遮られた。

機械はコードを伸ばして二階を破壊し始める。

倉庫全体が歪みはじめ、彼らは外に出た。

みしみしと倉庫が唸っている。金属が激しくぶつかり合う音がしている。

エディは倉庫に背を向けていた。イアソンの腹が立つほどのんびりした声を、頭の中で聞きながら。

……動き出したら、破壊でしか止められない……

それはつまり、アイリスを破壊するということ。

エディはぎゅっと唇を噛み締め、轟音がする中で思い出していた。昨日の出来事。今日の出来事。

砂糖の何倍も甘い時間は簡単に溶けて無くなる儚いもののに、記憶にはつきりと残っている。目の奥が熱くなった。鼻の奥が痛くなった。

それらをぎゅっと体の中に閉じ込めた。

力を抜くと、痛みに負けているいろいろなものが溢れ出してきそうだった。

我慢する。

落ち着つこうと、息を吐いた。

「止めないと」

耳を澄ましてやっと聞こえるような小さな声だった。だがそれほど小さくても、ガットにははっきりと聞こえていた。

「……そうか。だが、オメーがやることあねえよ。あの若いのも目的は一緒だ」

「うん、でもさ。どうにかしないと。……放つとけないよ」

突然、倉庫からの爆発音。

振り返ると、倉庫から離れた場所で、スーヴェンが息を切らせて立っていた。

「やあ、ごきげんよう」

と、暢気な挨拶をしている。だが、青年の顔は青ざめていて、目はうつろだった。

疲れきっている様子だった。

「大丈夫かい」ガットが声をかける。

「大丈夫か、だって？」スーヴェンは頭を押さえて、ガットを見る。

「大丈夫なわけないだろ！ 死人が二人も出て、どこが大丈夫なんだ！ 早くどうにかしないと、取り返しのつかないことになるのに」

鉄の扉を吹き飛ばし、粉塵を巻き上げて機械が出てきた。元の五倍はありそうな巨大な機械には八組の足と、コードが絡み合っていてきた二本の太い腕。鉄板の顔はそのままに、蜘蛛に似た姿をした機械は腹からガラクタを大量に落とし、短いコードがそれらを拾い集めている。その中に山高帽の男の首があつたのを、エディとガットは見逃さなかつた。男の歪んだ顔……ひん剥いた目玉やただれた口、潰れた額はエディの脳裏に焼きついた。

「自業自得だよ。何も考えていなかったせいだ」とスーヴェンは冷やかに言った。

「何があつたんでい？」ガットが尋ねる。

「あの役人が止めようと躍起になってたけど、でも相手は兵器で、イアソンの作った物だ。いろいろやっている内にアイツは機械に喰われたんだよ、簡単にね。それから機械の中で爆発が起きた……でも壊れていないんだ」

「イアソンの話だと、原理はオートマタを作るときと同じだそうだ。複雑なやつあ失敗も多いみてえだが、あの試作品にもイアソンの『意思』が組み込まれているってえことだ。アイツがどんな『意思』を込めて作ったか知らねえが、面倒なモンを作りやがって」

ガットは、彼にしては珍しく疲れた表情を見せて溜め息を吐いた。

だが次を考え出す間もなく、地面を揺らす地響きで彼の大きな腹が揺れた。

見れば自動車が勢いよく向かって来ている。倉庫の側で二台並んであった自動車のうち一台に……運転席には恐怖で顔をくしゃくしゃにしたカーネルが乗っていた。

スーヴェンは呆氣にとられたエディの襟首を掴んで、藪に放り投げた。

後に続いて別の影が藪の中に飛び込む。

「何するんだ、いきなり」藪の中に倒されたエディは、抵抗の声をあげた。

「真正面に突っ立ってるなんて！ 死にたいのか？ それなら『アイリス』の前に放り投げてやるよ！」

「なんだよ、投げることはないじゃないか！ ちょっと言ってくれればいいのに」

「君がボーツとしてるからだ！ 助けてやったんだ、礼ぐらい言えないのか？」

「う、うるさいっ！ 俺は助けるなんて、頼んでない！」

「ええい、止めねえか二人とも！」

言い合う二人の若者の頬に、ガットのネコパンチが炸裂した。

「喧嘩がしてえなら後にしろ！ そんな場合じゃねえだろうっ！」

衰え知らずの気迫に、若い二人は気を縮める。

ガットは鼻から大きく息を吐いた。その息で、怒りの炎を消すかのように。

その間にも、勢いよく走り出した自動車を肉食の虫が獲物を捕らえるように、機械の手が易々と絡めとった。

カーネルは見栄も威厳も捨てて醜く喚いていたが、機械は容赦なく自動車を小さく丸めていく。元の形が判別しないほど潰された……だが運転席のカーネルは隙間で息を持ったままで……自動車は悲鳴と共に体に取り込まれた。

命乞いの断末魔を聞いたエディは、骨の髄まで広がる恐怖に足が震えそうになる。

だが、エディは耐えた。拳にぎゅっと力を込めて息を吐く。

目の前の恐怖に心を乱されても、忘れてはならない事が、彼に平静を取り戻させた。

もう一度息を吐く。

「……何とかしないと」呟いてから、機械を見た。

「ちったあ待ってろい。なんとかすらあな」

ガットは険しい表情でエディに言うてから、スーヴェンに向かって、鍵はどうした、と尋ねた。

「どの鍵のことか知らないけど……イアソンから預かっている鍵は持っているよ」

言いながら、スーヴェンはポケットから鍵を出しす。

「そいつあ機械を破壊する鍵だそうだぜい。そいつを使えば『アイリス』は止まるとよ」

「そうか、やっぱり停止の鍵なんだ。説明書を僕は読んだんだ……それには鍵穴の位置は顔の真ん中だった。差し込んで回すだけの簡単なことだよ。顔に辿り着くまでが大変だけれど」

「むう、そうだなあ」ガットは考え込むように俯いた。しばらくして顔を上げると、厳しい表情で二人を見た。

「よし、オメーら。博打で命い賭けられるかい？」

第4幕・3 人形

「僕は猫君に、ひとつ言いたいことがある」

「なんでえ、言ってみな」

スーヴェンは右肩を庇いながらガットに言った。肩の傷は、生物が棲み着いているのではないかと思うほど、気持ち悪く勝手に脈を打っていた。

「君はイアソンと同じくらい乱暴で、無茶苦茶だね。事が終わったら、なにか礼のひとつもしてくれないと、納得できないな」

「ふん、生きてられたらなあ。肉饅頭でも奢ってやるよ」

ガットは微かな笑みを浮かべて答えた。

二人は今、自動車に乗っていた。

ガットの考えた作戦は至極簡単で、囷を使って腕の動きを止める、というものだった。その囷とは残された一台の自動車で、機械の前に移動させるという。

それを聞いたエディとスーヴェンは眉をしかめた。鍵を使う方も、自動車を移動させる方も、本当に命を賭けている。

それでもスーヴェンは、すべてのものを……それは街であったり、森であったり、または命であったり……壊すための道具をなくすためには、それ以上の力が必要なのだ、と思っていた。

大きければ大きいほど、きつと力は必要だし、賭けるものも大き

くなるのだろう。

だからといって、エディを説得することはしなかった。

自分よりも年下の彼を（まだまだ子供じゃないか。ハマーより、ずっと）危険にさらす必要はないし、こんな酷く汚れた経験をさせたくはなかった。

少なくともエディは、彼と同じ年頃だった自分に比べて随分と純粹で、一途で、まともだった。

「彼を止めなくてよかったのかな？ 君なら、なにか理由をつけて避難させただろ」

隣の老猫に尋ねるが、彼は優しいまなざしを……その奥には決意めいたものを光らせて、スーヴェンを見る。

「男つてえのはなあ、試練を乗り越えるたびに、大人になつてくもんなんだぜ」

呆れた溜め息を吐いた。そんな理由で？

「スポーツ選手みたいに、ただのスランプだったら話は簡単だけれど」

「もちろん、あいつの意思も酌んでやってのことです。危ねえことだが、なに、死にやあしねえよ」

「それだけ自信満々に言える、根拠は？」

「死んだら、全員であの世行きてだけのことさ」

スーヴェンは肩を竦める。

「十分な理由だね」

機械が二つ目の倉庫のほとんどを自分の体に取り込んだ頃、エディは機械の背後に寄り、スーヴェンとガットは一台の自動車に向かった。エンジンキーは無かったが、ガットがスーヴェンにエンジンの配線の配置換えを指示すると、エンジンは動き出した。

「こんなことを知っているなんて、猫君て何者？」スーヴェンは訝し気に訊くが、

「俺も昔はやんちゃだったからなあ」ガットは笑って受け流した。それから間もなくして、自動車は動き出した。

本当に、短い時間だったとエディは振り返る。
一日と半分。

たった三十六時間の出会い。
人生のうちの三十六時間なんて、一瞬と同じだ。それほど短い時間だった。

だが一瞬と感じるような時間でも、懐かしいとか夢のようだとか、何かを思うことができるのは貴重だし、重要だと思った。

日常の一瞬を大切に思うことは、ほとんどないのだから。

機械は重さに耐えきれず、這いながら緩慢な動きで三つ目の倉庫に向かっていた。

その横を自動車が勢いよく走っていった。

機械がそれに気付き、金属とコードが絡まった腕を伸ばす。

エディは迷わず前に出た。

とにかく前に。

スーヴェンから受け取った鍵をその手に握りしめて。

瓦礫の機械は近くで見ると、わずかな衝撃で崩れそうな隙間があるが、細胞のように結合していた。

舞い上がる錆と埃の煙が目を刺激する。

金属片や瓦礫で手に幾つもの傷を作った。生暖かく赤黒い血が腕を伝って服に色を付ける。

この色はアイリスには無いものだ。

生物の証。

アイリスには無いもの。

でも彼女には感情があつて、笑ったり嬉しがったりする。

人の姿をし、心を持つ人形だけれど、『物』だ。

それを愛おしく思うのはなぜだろうか。悲しく思うのはなぜだろうか。

物に対してそんな風に思う自分が、変なのだろうか？

エディには解らなかった。

そして、機械の頭の横で揺れているアイリスの頭。

機械がぐらりと揺れて、巨大な爆発音をたてた。

ばらばらと降り注ぐ金属の破片、漂う黒い煙。

鼻孔を突くのは、濃い油の臭いだ。

ガットが言うには、揮発油は発火性が高く、気化しても小さな火

花で発火するという。

まさに、その爆発だった。

機械は腹の部分に大きな穴を空けていた。

バランスが崩れた、体を折り曲げるが、倒れはしない。

そつと近づいた。

すると突然、機械は頭を上下させ、何かを拒否するように……何を拒否するように？

機械は頭をもたげる。

地面に先端をつけた。まるで、懺悔でもしているかのように。

その先には、アイリスの顔がある。

そこには虚無があった。

右目には闇のような穴、頬は陥没し、鼻は潰れていた。

エディはアイリスの潰れた顔に触れた。

可愛くて、白くて、可憐な少女の人形。

冷たかった。

固まって、動かない。

どうしてこうなったのだろうか？

彼女は存在してはいけなかったのか？

人形だから？

どうして、などというものの答えは見つからない。

頭の中はすべての色が混ざった複雑な色を成して、その中から答えを見つけ出す事はできなかった。

耳の奥で聞こえるのは、オルゴールの歌。

目の前にあるのは回る歯車と鍵穴。

片方には別の鍵が刺さっていた。

もう片方に、腕を伸ばして。

その穴に。

第4幕・4 雨

破壊破壊破壊。

あるのは破壊。

断末魔の音と破壊。

機械から破片が落ちていく。

破壊に抵抗する凶暴な機械は、全身で破壊を始めた。

地面に頭を何度もぶつけ、粉々になり、部品が宙を舞い、振動が起きる。

金属音が脳を揺する。腕を振り回し、木々をなぎ倒し、瓦礫を拾い集め、再生を試みるが腹から真つ二つに折れた。機械は上半身を闇雲に振り回して瓦礫や破片を散らしながら体中から激しく白い煙を吹き出して辺りを粉塵と煙で灰色に濁らせ姿を何者からも隠しながら目の前で轟音を響かせていた。

爆風に飛ばされた少年は、仰向けで蔓植物が絡まる藪の中に倒れていた。

埃が喉に入って咳き込んだ。

目に塵が入って涙が出てきた。

ぼろぼろ。

痛くてたまらなかった。

全身が痛かった。

拳で拭っても、涙がこぼれてくる。

ぼろぼろぼろぼろ。

その握った手の中には、

黒く煤けた鍵の無いオルゴール。

閉幕

太陽はいつもと同じだった。ロッキンバーの上で人々に平等に光を与えている。

空に孤立した街の天辺のベンチ座っているエディと、横に並ぶガットとスーヴェンにも、同じように平等に。

エディはこの不思議な組み合わせに違和感を覚えながらも、ぼんやりしていた。

今あるのは祭りの後に感じる寂しさ、静けさ、喪失感。虚無感。起きた騒動が祭りのような楽しいものでなかったため、すつきりとした爽やかさは微塵もなかった。達成感も。

「軍にいる古い友人に連絡をとったんだがなあ、あの若え役人、武装ナントラ研究所とかいう軍の研究所の所長だったんだよ。立派じゃあねえか、あの若さで役職に就けるたあ、頭もキレルんだろうよ。だが兵器の計画は、奴の独断だったらしいな。上の連中は誰も計画を知らなんだと。今は世界のバランスが丁度いい具合に保たれてんでえ、わざわざ崩すこたあねえもんよ。だからな、軍としても隠蔽してえヤマなんだと。この件に関しちゃ、心配いらねえよ」

ガットが言ったことも、何の慰めにもならなかった。少しでも気を緩めると、目が潤んでしまいそうだった。

あれから一日と半分が過ぎていた。事件は一昨日のことだが、エディとスーヴェンには遠い昔の出来事のように、まるで現実味はな

かった。

だが、つい先日まで見知らぬ他人だった者同士が、こうして並んで話をしていることは間違いなく現実で、事件があったことを実感させた。

友人でも知り合いでもなく、突発的な関係しかないのに『アイリス』という共通点があるのは、奇妙な感覚だった。

エディが霞んだ頭で、出来事を思い出し、考えていると、

「……ところで」不意にスーヴェンが声の調子を変えて尋ねてきた。

「君は今日のお勤めは、しなくてもいいんだ？」

「……三日間の謹慎だって。今日の朝に知らされた」

エディはちらりとガットに視線をやってから、下を向いた。視線の端に青が入ってくる。

「俺が、荷物をおっさんに届け損なっただのは、事実だから」

「ふうん、そうなんだ」

スーヴェンはそっけなく頷いてから、はっきりとガットを見た。

「事件は狭い場所で起きたことだけど、軍が関わる一大事なのに。よく首を切られなかったね。人脈と権力は偉大だ」

するとガットは、ふん、と鼻を鳴らして言った。

「俺あ何もやつちやいねえさ。今回のことを知る奴はほとんどいいねえ。俺たちと、そのごく一部の奴らだけだ。支社長には、荷物の事しか伝わってねえよ」

「ふうん、そっか」スーヴェンは肩を竦めた。それから、ふう、と

息を吐く。

「何も得るものがなかったなんて。あまりいい結末ではなかったね。特に、エディ君にとっては」

「それは、オメーも同じだろう」

エディに代わってガットが言った。

スーヴェンは、彼がカーネルのことを言っているのだと悟って、曖昧な笑みを浮かべる。

「悪党が悪党らしい死に方をしただけで、残念なことは一つもないんだ。猫君が気に病むことじゃない。それよりも、イアソン・ヴォードの行方の方が重要だよ。あいつは最後まで、自分の責任の重さを知っちゃいなかったんだから」

それはエディも同感だった。

計画を企てたのは軍の役人だったが、エディたちにとって一番の原因はイアソン・ヴォードであった。

なぜなら、彼らはイアソン・ヴォードの言い分を聞いていたし、それについて反感を抱いていたからだ。

エディは森の中で。

スーヴェンは『アイリス』の残骸の側で。

山となった瓦礫と、ほとりと落ちてきた雨粒。

足下に転がる潰れた人の首。

そして人影。

「今更、何しに来たんだよ」スーヴェンは、不機嫌な声をイアソンに投げた。

「様子を見に來ただけさ。俺が作った物の動く様を、目に焼き付けておこうと思っただけだ。壊される前に一目でも。こんなモンが作れることは滅多にないもんでな」

イアソンがいけしゃあしゃあと言うので、スーヴェンは苛立った。自動車から飛び降りたときに、体を打ったときの鈍い痛みや、肩の傷の疼きも、飛んでしまっただった。

「……他人事みたいに言うなよ！ この状況は、あんたが招いたんだよ。全部、あんたがね！ 僕たちがいなくて、このまま暴走していたら、どうするつもりだったんだ」

「さてね。俺が壊していたかもしれないし、お前さんじゃない誰かが壊していたかもしれない。何にせよ、俺はお前さんがこうしていることに、有り難いと思っているんだぜ」

「礼を言う態度じゃないね」

スーヴェンはイアソンを睨みつけた。「責任はアンタにもあるんだ。それは分かってるんだろ」

「勿論さ。俺も自分の作った物への責任くらいは持っているぞ。もっと早くに來たかったんだがな、騒ぎのせいでトロッコが遅れていたから、来るのが遅れた。惜しい事をしたもんだ。記録にとっておくべきだった」

それからひと呼吸おいて、イアソンは帽子を被り直す。

「ところで、製造法の本はどうした。成り行きを考えると、お前さ

んが持っていることになるが……どうだ？　持っているか？」

スーヴェンはイアソンを睨みつけたまま、一瞬だけ沈黙した。

こんな男に、製造法を渡していいのだろうか？　こんな不真面目な大人に！

それでも彼は結論を出した。

本は自分に必要な物でないことは、明白だった。

「あるよ。事務所とは別の場所に。誰も僕が持っているとは思わなかったみたいだ。あの役人さえもね。本が無くなったことに、気付かなかったのが不思議だよ」

「俺は器用だから、何でも作れるのさ。あいつらには二セモノを返してやった。他に記録をとってなければ『アイリス』を計画することはないだろうよ。そして、俺が原本を持って旅に出る。ちょうど、世界を回ろうと思っていたところだ。なあ、それで完璧だろう？　一定の場所に置いておくよりも、危機は薄れる」

スーヴェンも、本がどこか関係のない所に行ってしまうのには賛成だった。

ただ一つの不安があるとすれば、本を持つのがイアソン・ヴォードだということだった。

いずれまた『アイリス』を作ってしまうのではないか、という疑惑。

信用できない不安が大きかった。

スーヴェンの考えを見抜いたかのように、イアソンはにやりと笑った。

「安心しな。軍の費用を流用しなければならぬほど、『アイリス』には金がかかる。まあ、兵器だからな、安くは作れないもんだが。

俺も作る気はない。ただその本は、俺のご先祖様の名が入っているから、俺が持っているべきだろうと、そう考えただけなのさ」
「……あんたが『安心』を使えば使うほど、『安心』の価値がなくなっていくんだよ」

スーヴェンは嘆くように言った。

それがイアソンとの最後の会話だった。

「……それで？」エディは続きを求めた。「それで、おっさんは、いつ消えたんだ？」

スーヴェンがイアソンと話をしている頃、エディは藪の中で意識を失っていた。目が覚めたらサンミラノの病院のベッドの上で、ざあざあという雨音を聞いた。

運んだのがスーヴェンだと知ったのは、昨日の夕方……ロッキンバーへ帰る、ブルートロッコの中だった。

「そのときだよ。猫君が僕を呼びにきて、僕らが現場を離れるときには、もういなかった。本はどうするのかと思っていたけれど、僕が本を置いていた場所に行ったら、本はなかった。代わりに直筆のメモがあったよ。空き巣みたいなマネしてさ、ふざけた奴だよ」

スーヴェンは思い出すのも不快のようで、口調にそれが表れていた。怒りが伝わってくる。

だがエディは、彼ほどイアソンに怒りを感じていなかった。

イアソンがいなければ、それまで経験したことのない時間、その時間の中にある笑顔、オルゴールの歌を、知ることはなかったのだ。あの場にあつたことは、忘れたくはない。

決して美しくないし、素敵でもないけれど、大切な思い出。

それは、元を辿ればイアソンがアイリスを作ったことから始まる。

感謝の気持ちはない。かといって、憎らしくも思わなかった。

しばらくの沈黙があつた。

風は緩やかに流れ、数日前よりも濃い緑の匂いと、街のざわめきを運んでいる。

その風を遮るように、能天気な声が二人と一匹の耳に届いてきた。

「わあ、スーヴェン、生きていたんですね！」

息を弾ませて近づいてきたのは、嬉しそうに表情を緩めたハマートだった。

その後ろから派手な花柄のシャツを着たモーゼフが、黄色い縁のサングラスを額に乗せた粹な恰好で歩いている。

モーゼフとハマート、二人がどうして一緒にいるのか、エディは奇妙に思った。

二人の繋がりは、自分とスーヴェン以上に遠くて薄いものなのに。

「うひょひよ、随分と酷くやられたようだよ、エディ？」

「うるさいなあ。何しに来たんだよ。俺は爺さんの占いがまた当たったから、気分が最悪なんだよ」

エディは陽気な爺さんの顔を見て、不思議と元気が戻ってきた。それまで心にあつた重しが、突然消えたように軽くなる。

「なあに、下界は雨だから、晴れた場所に來たかっただけだ。空の駅でガットに会つてのう、頼まれ事をされてここまで來たんだ。お前さんもいると言つしの」

「頼まれ事？」エディは首を傾げてガットを見た。

「自衛団の事務所にいる眼鏡の若造を連れて來いとな。面識もないにさせるかね？ ガットは横暴だわい」

「すまねえな、トリティは仕事だしよ、他に頼める奴がいなかったんでえ」

ガットが笑みを浮かべながら言うと、モーゼフも軽く息を吐いて笑う。

「いいつてもんよ。お前のワガママは慣れとるわい。それよりも、僕はいろいろと知りたいものだなあ。エディ、大変なことがあったらしいのう？」

「あつたよ。本当に大変だった。……って、何で爺さんが知ってるんだ」

「ガットに聞いたぞ。カワイイ女の子とか、そのへんを詳しく知りたいのう」

「何言つてんだよ」モーゼフがにやにや笑つて言つので、エディは呆れてそつぽを向いた。

それから、それぞれの顔を見ていたガットがのんびりと筋肉を伸ばしながら、昼飯でも食いにいくか、と言つた。

まだベクターズカンパニーの昼休みを告げる鐘は鳴っていなかったが、太陽は頭の上にあり、強い光を放っていた。

スーヴェンは立ち上がると、優しく笑ってガットの提案を断った。

「僕は、行こうと思っっているんだ。ここはとてもいい場所だから、ずっといたいけど」

「サンミラノに帰るのかい？」ガットが尋ねる。

「ルーツエの方へ。知り合いがいるんだ。こんなことがなければ、もっと早くに、行ってる予定だった。昼一番のトロツコで行くつもりだよ」

そう話すスーヴェンを、エディは見ているだけだった。

ああ、この人は先へ行けるのか。あれだけのことが起きたのに。エディは彼ほどすぐに決断して、割り切り、歩き出すことができずにいたので、羨望も少しだけあった。

そういえば、と思い出した。

そういえば、最初に、モーゼフの爺さんから言われたこと。

勝手に占われた、その結論。明日への希望。くよくよするな、と言っるのは簡単だ。

でも、モーゼフの言葉が実行できるのは、まだまだ先になりそうだった。

「君とは不思議な縁だったね。もう会うことはないだろうけど。迷惑かけたね、お元気で」

スーヴェンの挨拶は爽やかだったが、エディは彼に対して曖昧な笑みを返した。

去り際、ハマートがこっそりエディに声をかけてきた。

彼がエディに話しかけてくることは、それが初めてだった。

「どうもお世話になりました。スーヴェンが、他人と話して笑顔に

なっているのを、久々に見ました。たぶん、君のこと、猫さんのこと、気に入ってます。またどこかで出会えるといいですね」

そう言つて、犬が主人の後を追うように、ハマートはスーヴェンの後を追つて行つた。

彼らの姿が見えなくなると、ひょうつと一吹き、風が通り過ぎていった。

彼らの名残をさらっていくように、素早く、強く。

それで本当に、何もかもが終わった気がした。

事件を真正面から思い起こさせるものがなくなって、新たな空白ができた。

夢の後のように、頭の中がぼやけている。

エディのポケットの中には、鍵の無いオルゴールが入っていた。

それだけが現実を知る唯一の物。

「さて、俺らも帰るか。昼飯はオメーの好きな物、奢ってやるぞ」
「本当か？ 儂は『カボチャ村』のパンプキンパイが食いたいのに」

オメーじゃねえよ、とガットが言つて、年寄り二人は笑い合う。

エディはその声を聞きながら空を見た。

明日から、また日常が始まる。

それは同じ事の繰り返しの日々。記憶はあつという間に過去になつてしまつて、そのうち色褪せてしまふのだろ。思い出とはそういうものだ。

大切でも嫌な事でも。

だから、立ち止まらないでおこうと思った。

止まることは、進んだ先にある後悔よりも、もっと後悔することだから。

エディはオルゴールを取り出すと、ベンチに残して歩き出した。

閉幕（後書き）

長々とおつきあい、ありがとうございました。この物語はこれでお終いです。なので、「あとがき」らしいものでも、ひとつ書いてみようと思いましたが、いいものか思い浮かばなかったため、物語と登場人物たちについて、どうでもいいことですが、書いてみることにしました。

【物語について】『はじまりは「空の駅」って響きがよくね？ でしたが、駅員の話が思い浮かばなかったため、配達屋さんに。空を「飛ぶ」ではなく「走る」ってのが気に入ってます。なんか、少年少女が頑張る話はいいんですが、やっぱりそこには「大人」がいて「他人」がいて、沢山の人が関わっていると思います。そういった人物（猫も）がちゃんと存在感があるような物語が好きです』

【出てくる人々について】「エディ↓やっぱ主役は少年でしょう、という単純な理由。苦労人なのは、まあ物語なので。あと、よく「ひょんなことから主人公が事件に巻き込まれる」っていう展開がありますが、そういうのって白々しいし、沢山あるので、そうじゃないはじまり方にしました。つまり「巻き込まれる理由」があるってことです。この場合、「少年が配達屋さんだった」から「事件に巻き込まれた」ってことです。「アイリス↓特に深い意味はなく命名。最期はけっこう初期から決まってたんですけどね・・・まあ、恋愛小説じゃないんで」「ガット↓ポルトガル語で「猫」の意味（え；）。少年を導く大人ってことで博識な猫。ご先祖様が長靴を履いていたとか、どうでもいい裏設定があったり。「スーヴェンとハマー↓名付けのセンスが無い事を証明する二人； 日本一有名な釣りコンビの愛称から付けてみたのがいけなかった・・・いつの間にやら「いい人」な二人。初期設定ではスーさんは斜め上行く不良だったけど。今気

づいたけど、二人はニートですな・・・」。「トリテイ↓姉は最強の存在。兄だったら、また違う話になってただろうと思われ。」。「ハーレー↓「二輪車を扱う人」だから、ハーレー。なんて安直；彼の方言は、関西弁ではないです。」

最後に、オートマタについて。 オートマ

タは、実際にあるオルゴール人形で、最初に見たのは「京都嵐山オルゴール博物館」です。ヨーロッパのオルゴール職人が、職人魂をかけて作った芸術作品です。古い人形が、音に合わせて動く様子は感動的でした。日本のからくり人形もすごいですが、ヨーロッパの人々の感性も素敵すぎます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7143k/>

エディ・バートンとアイリスのオートマタ

2010年10月9日23時19分発行